

一撃必殺を夢に見て

だめねこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

良くある二次小説の流れで転生することになった少年はアニメの世界に生れ落ちた。

原作知識など全く無い彼は自分勝手に行動する。

その結果原作はどうなるのか？

成るか原作レイプ

目次

キャラ設定集	1
げんさく!!まえ	
第2話	4
第3話	7
第4話	13
第5話	19
第6話	22
げんさく!!開始	
第7話	27
第8話	33
第9話	36
第10話	41
第11話	48
第12話	55
第13話	61
第14話	66
第15話	73
第16話	77
第17話	80
第18話	83
第19話	87
第20話	89
第21話	92

第21話	銀次は御用になったのです。	95
第22話	狐はくーくー猫はにやーにやー	98
	魔法ばれなの!?	102
	バカはバカ故にバカげた事をやってのける	106
	想定外すぎた現実	111
	バイストンウエル?いいえ海鳴市です	113
	類は友を食わせた	116
	ようこそーアースラ 《紳士の社交場》	119
	なのはは俺の魂だ!!目ん玉かつ開いて良く見やがれ!!!これが御神	122
	流師範代高町恭也の本気だ	122
	寝てる子を起こすな!!!!	126
	6月4日ははやての日	129
	目が覚めたら偉い事になっていた件	132
	バカと真面目は水と油	136
	うわようし、よつよい	139
	ブレーキの存在しない暴走マシン(ただし一人乗り)	142
	坂本銀次は悪い子なの?	145
	お前にとっては未来の事、私にとっては過去の出来事	151
	終わる日常、始まる非日常	154
	時は超えた、空も翔けた、あとは八神はやてを救うだけ	158
	聖なる夜に戦いのゴングは鳴る	162
	これぞ達人技!?!フルコンボだドンツ	166
	花咲く頃に会おうぜ	170
	時に人は過ちを犯す	175
	井の中の蛙大海を知らず、されど空の深さ(青さ)を知る	179

幕間 不思議の国のリインフォース 183
虎の尾は踏んではならない(戒め) 186
それではこちらの映像をご覧ください 189
確かに差は縮まったよ・・・1mmくらいは 193
オ(おれじゃない)ア(アリサがやった)シ(知らない)ス(済んだこと)運動 197
河は船を運ぶが時に船を覆す 201
ここで会ったが100年目 204
人生落(らく)ありや苦もあるさ 207
私の名前は高町ヴィヴィオ 210
射砲撃? バインド? 格闘オンリー・・・分かったよ。ただし鉄山靠 213
てめーはだめだ 217
怒れるヴィヴィオに火が付いた 219
ロシアより愛をこめて 220
L e t i t b e 223
睨めっこしましょ 226
非殺傷設定? そんなもんねーよ 229
銀次、啞然、河辺にて 231
それは力を求めた・・・ 234
スイッチが入ったら 238

キャラ設定集 随時更新 T家追加

主人公：坂本銀次

性格：単純にして難しい事は考えない。常に行き当たりばったりで、本人の運の悪さも相俟って全部が裏目に出る。

しかも自覚が無いのでなお性質が悪い。

ちなみに周りに実害が無いのが唯一の救い

容姿：白髪 of 長髪を後ろで束ねてポニーテールしており、身体つきもかなり細いため美少女にしか見えない。しかも服を脱ぐと全身傷だらけのためビツクリ仰天。

高町士郎ですら驚くものがあるが本人は全くもって気にしてない。最近の傷跡は未来シグナムに燃えるレヴァンティンによる袈裟切りをされ、一生消えない火傷の痕がある。

身体能力：日々のラジオ体操や鉄山靠にパルクールと天狗下駄（鉄仕様でかなり重い）でうなぎのぼりで上がっている。

仙豆を食べれば消えるはずの怪我の痕が残っているのは銀次の自然治癒能力が中途半端に高いためである。

そして念も習得しており戦闘面で無類の強さを発揮する。

念を強いた技

・レンナス・クエイグ土俵入り

銀次の円の中に入っている者達（味方識別可）の足元から勁を放出しダメージを与える。空中にいるものは当然無効

発

・エニグマ・アイ妖の目

強化系念能力。身体能力が1.6倍になり、物理的に見えない物が見えるようになる。発動条件は殺気を受ける事

神様転生では無くドラ○ンボールにより転生した中学生。

若干の中二病を患ってるが、意外と場は弁えている。

テストはやる気が合っても無くても赤点ばかり、これは転生前から

そうなので彼にとっては何時ものこと。

高町家の人たち

高町なのは

被害者一号

当初銀次を見たとき女の子だと思っていたが、ある日桃子の計らいにより一緒に風呂に入ってしまいそのときに銀次の全てを見て絶叫。

そのあと慌てて来た士郎と恭也により誤解が加速し銀次は折檻された。

高町桃子

A級戦犯（銀次に対して）

当初銀次を見たときやっぱり女の子だと思っていた。なのでいろいろ言葉遣いが悪い銀次をあの手この手と強制・・・ないし教育していたが、湯煙お風呂事件により性別が発覚した。

この事により一時かなり落ち込んでいたが（性別を見抜けなかった件に対して）いつの間にか新たな扉を開いたのか何かにかこつけ銀次にメイド服を着せようと色々と画策し始めるようになった。

最近よくいう言葉は”かわいいのが悪いと桃子さんは思います”

高町士郎

常識を持った加害者（銀次にとって）

当初銀次を（以下略）そのため無数の傷跡を見て激しい怒りを覚えたが・・・いまでは自業自得だなど思い全く気にしていない

高町恭也

常識が通じない最強最後の敵（銀次にとって）

当初（以下）。膝は壊れてないのでガチでやばい位強い人。なのはが見ている前では普段の3倍ぐらい強くなる。神速を使用で銀次も超える強さです。もしなのはが「お兄ちゃん大好き」って言ったら、仮に地球破壊ミサイルなるものがあれば確実に受け止めて投げる。坂本ジュリエッタに通じるなにかがあるのは確定的に明らか

高町美由紀

癒し（銀次にとって）

当（以下）銀次の初恋の人今でも継続中。なお本人はまっつったく気が付いてない模様

恭ちゃんLOVE

テスタロツサ家

フェイト

本作で魔改造を施された人

当初は純真無垢であったが、銀次の部屋にあった漫画（リングにかけろ1、2）を読み人生観が180度変わった。

今ではアニメ、特撮を良く見るようになった。

意外な事に仮面ライダーも見ているようだ。

アリシア

生き返った人

死んでいた間、母の狂った姿を見て、心を痛めていたのは過去の話
今は事あるごとにフェイトがプレシアにべったりのため違う意味
で胃が荒れる日々

そのせいで病院にお世話になることもしばしば

プレシア

ロリ

銀次が使用したジュエルシードに巻き込まれ頭も体も子供になった。（なお知識は失っていない）

魔力量はSSクラスにまで膨れ上がり、子供の為体力も半端ない
常にフェイトがそばにいるため寂しいとは思っていないが、鬱陶しい
と思っている。

げんさく!!まえ

第2話

目が覚めると真っ白い空間に居た。

なるほど、まるで二次小説のテンプレですね。わかります。

そんな事を考えていたら目の前に突如ランプの精みたいな服装で頭にターバンを巻いた肌が黒くて眼が見開いている人?が現れた。

「お前死んだ。納得しろ」

黒い人は端的にそれだけ告げた。

「え?死んだ?俺が?ふざけんな!!!納得できるわけねえだろ!!今すぐ生き返らせろよ!!!」

俺の怒鳴り声も黒い人には柳に風のように淡々と受け答える

「そんなことは神様でも無理。だから転生で妥協しろ」

「転生だ?!?まるで二次小説だな。おい、ところで特典はあるのか?」
「特典?ポポ良くわからない。とりあえず神龍呼ぶから3つ叶えて貰え」

そういうと黒い人ポポはオレンジのボールを七つ取り出して床に並べた。

「出でよ。神龍」

ポポがそういうとボールからなんか飛び出して、緑の大きな龍が現れた。

それを見た俺は・・・恥ずかしながら、えへへ腰抜かしちやいました。

「さあ、願いを言え。どんな願いでも3つだけ叶えてやろう。」

「ぎゃ あ あ あ あ あ あ あ あ あ 龍がしゃべったーーーーーママこわいよーーーーー」

「早くしろ、ポポ忙しい」

ポポはそれだけ言うで一瞬で俺の視界から消えた。

その後頭に鈍い痛みが走ったのでおそらく鈍器的な物で殴られたと見て間違い無いだろう。

ちなみにその一撃は強烈で動揺を消し飛ばし冷静さが戻ってきたのは良いが、一番大事な意識がどこか遠い世界に引越してしまっただ。

意識が旅行する前に見た光景は「ポポ手加減上手くない」と言っって頭を搔いてる姿だった。

その姿に苛立ちを覚えつつ俺は意識を手放した。

目が覚めるとやっぱ俺は真っ白の空間に居て、目の前にはポポとテンションの下がった神龍が居た。

「お前目覚めるの遅い。」

「そもそもお前が殴らなければ良かったんだ。」

「お前じゃない、ミスターポポだ。そんなことより早く願いを言え」
謝罪をしないポポをジト目で見つつも神龍を待たせるのは申し訳ないので俺は話を切り上げた。

「納得いかないがわかったよ。じゃあ神龍さん一つ目の願いがありとあらゆる病気・アレルギーにかからない健康な体。2つ目はどんな傷でも一瞬で治せる薬的な物。3つ目は100兆円」

その言葉を聞いた神龍はようやく仕事が出来ると思い張り切っって答えてくれた。

「ふむ、良かろう。ぬうううううううん。願いは叶えた。サラバ
ダ」

「なんか変わったようには思えないけど?」

「お前が要求したものは一個目以外全部物品だ。わからないのも仕方ない。あと傷を治せる物と100兆円は転生後のお前の家に送っって置く」

「え!?今くれるんじゃないの?」

俺がそういうとポポは俺の後ろを指差した。

俺もポポの指の先を見て納得した。

大量の福沢さんと豆が山を築いている。

うん、無理だ。持ち運ぶ事が出来そうにねーな。

「わかったな。じゃあ転生してこい。」

「わ、わかった。」

その言葉を最後に俺の意識は消えた。

「ようやく転生した。あ、転生先伝えるの忘れてた。ポポ反省。サービスとして筋力のリミッターを取っ払おう」

ポポが転生先を教えたところで彼にとってはどうでも良い事だった。

何故なら彼はその物語を知らないのだが、しかし、そんなことよりポポの粹な計らいの方が彼にとっては大変な誤算になるのである。

第3話

目が覚めると見知った部屋に居た。

その事に気づくと先ほど転生したと思った俺自身が偉い恥ずかしい。

いや、今さつき見たのは俺の願望交じりの超リアルな夢だから仕方ないと心の中で思うことにして洗面所に向かい顔を洗うことにする。

思い立ったら吉日俺はベットから降りて立ち上がった。

うん？なんか目線低いような気がする？いやいや、何を馬鹿なこと……もともと俺は身長低いじゃん。合法パンチラ出来るぐらい……ってそんなことはどうでもいいか

と、思いつつ洗面所に行つて驚愕の事実気がついた。
そりゃあ低いはずだよ。

だつて鏡映っている俺は見た目5歳児だぜ？しかもめっちゃめっちゃかわいしいし、思わず息子が行方不明になってないか確認してしまった。

まーそこにはずいぶん謙虚な息子が居たけど……ま、どうでもいいな。

それより当面の問題としてどうする？このまま学校に行くか？だぼだぼの制服を着て？アホか行つてどうするんだよ。門前払いだ馬鹿野郎。

という訳でサボろう。

どうせ俺の親は二人とも海外出張中だから全然問題ナッシングやりたい放題出来るぜ。

テンションのあがった俺はテレビを見ようとリビングに行こうとして、行けなかった……言葉がおかしい？

いや、間違いなんて無いぜ。

だつて……リビングが福沢先生で埋め尽くされているんだ。

啞然とした俺は落ち着くため冷蔵庫から飲み物を取り出そうと開けると中には豆がギッシリこれでもかかってぐらいギュウギュウに入っていた。

動揺と驚愕の間俺は思った。

夢だけど夢じゃなかった。

転生して初日早くも頭が痛い。

そんな時であった。リビングに置いてあるだろう電話が鳴り出した。

しかし、リビングには福沢先生がいっぱい居るため入ることが出来ない。

だから俺は電話を取ることを諦めた。

ケータイはどうしたって？元中学生が持つてるわけ無いだろ？

仕方が無いから部屋でエアマスターでも読んでるか……

それからしばらくして気がついたら時刻は14時に成っていた。

やつぱりジョンズ・リーはかつこいいなく。

そういえばここはアニメの世界だから俺もがんばれば鉄山靠ぐらい出来るように成るじゃないか？

一応前世でも発頸はあつたつぽいし……俺には福沢先生が着いているんだ。怖いものは何にも無いならば行こう。図書館に

そう思い俺は半そで短パンに着替えてドアを開けて頭を悩ませた。

だつて目の前に広がる町並みは俺が知っている光景では無いんだ。

つまり俺は図書館の場所が分からないということになる。

福沢先生俺はどうすればいいですか？

福沢先生を目線の高さまで上げる。

その時俺には福沢先生がにっこり微笑み掛けてくれたように見えた。

俺の脳内に福沢先生の声が響いた。

腹が減つては戦は出来ぬってね。とりあえず目の前の喫茶店で何か食べようか？その後店員にそれとなく図書館の場所を聞けばいいよ。

それが幻聴かどうかを俺は……気にしない。

道が出来た。ならば俺は進むだけだ。

ありつたけの勇気をかき集めて俺は喫茶店の扉を開いた。

扉を開けるとカランコローンと音が鳴り響く

その音を聞いて見た目20代ぐらいの店員が音も無く目の前に現れた。

「いらつしやいませ。うん？君一人かい？」

まあ見た目五歳児だから親と一緒にだと思われたんだろう。

「はい、一人です。」

「ふむ、じゃあカウンター席で良いかい？」

「良いですよ」

そして、店員に案内されてカウンター席に座る俺

「注文決まったら呼んでくれ」

店員は二カツと笑いメニューを渡すと奥のほうに引っ込んでしまった。

手渡されたメニューを見ると・・・うむむケーキなど甘くて美味しそうだな。

クッククク甘い物を食べながらのブラックコーヒーは格別に美味いだろうな

そんな事を考えていると俺の席の隣にいつの間にか座っていた茶髪の幼女がこつちをじーっと見ていた。

まあ見ているだけだし、見られて困るものなど息子ぐらいのものだから俺は気にしない事にして店員を呼ぶことにした。

「すみません店員さん」

「うん？もう決まったのかい？もっとじっくり選んでいても良かったんだよ？」

「あ、大丈夫です。とりあえずショートケーキとチーズケーキとシュークリームとブラック一つ」

「うん？君はその年でブラックを飲めるのかい？」

「ええ、飲めますけど何か？」

店員と幼女が何やら驚いているが今時ブラックを飲めない奴が居るのだろうか？いや、そんな奴は居ない!!!仮に居たとしてもそれは子供ぐらいなもんだ。つまり飲める俺は大人である。と言っても元中學生なんだがなあっはっは

「いや、本来5歳児がブラックなんて飲むのだろうか？」

店員は頭を傾げながらも注文を受け取った。

そして、数分後

シヨートケーキとチーズケーキとシユークリームとブラックが出
てきた。

「シヨートケーキとチーズケーキとシユークリームとブラックお持ち
致しました。」

持ってきたのは20代くらいの茶髪の女性だった。

「では、いただきます。」

「はい召し上がれ♪で、なのはもお待たせ」

「わーいシユークリームなの。そうだお母さんなのはもブラック飲
みたいの」

俺の隣に座っている幼女なのはとんでもない事を言い出した。

え!?!この20代にしか見えない女性が母親!?

思わず吹きそうになってしまったが何とか堪えることが出来た。

おいおい、まさか相手は20代にしか見えないこちらの男性か?

「あらあら、なのはにはまだ早いわよね、土郎さん」

「まあためしに一回飲んでみるかいなのは?」

そういうと土郎さんと呼ばれた男性はなのはにブラックを出した。

差し出されたブラックを飲んだのはは一気に涙目になった。

「お父さん苦いの」

「はっはっはまだなのはには早かったな」

茶髪の幼女はあまりの苦さに涙目になった。

ふっ幼女は幼女らしくミルクでも飲んでるんだな!!!

「あらあら、それにしても君は美味しそうに飲むわね」

実際問題、このブラックは美味いからな。

「ええ、美味しく頂いてます。」

それに匂いも良い、有無この店は当たりだな。福沢先生に感謝。こ
のお店に感謝。そして偶然に感謝。圧倒的感謝!!!!

食うものは食った。さて腹も膨れたところで店員に聞かねばな

「すいませーん。お会計お願いします。」

「はい、四点でお会計1750円になります。」

福沢先生ありがとうございます。

「一万円からお願ひします。」

「はい、8250円のお釣りになります。」

「あ、そうだ店員さん。この近くに図書館か本屋さんてありますか？」

「ええ、それならこの道をまっすぐ行ったところに本屋さんがありますよ。図書館は反対があります。」

「ありがとうございます。それでは失礼します」

俺はそれだけ言う店を出た。

さて、本屋と図書館どっちに行こうかな。

今現在お金があるんだし、買ったほうが楽だよな。

という訳で俺は本屋に行くことにした。

ふっふっふそれにしてもええもん買えたな。

『サルでも分かる鉄山靠』と『震脚解体新書』

この二冊を買ったんだ。

これだけあれば大丈夫だろう。

まー本が薄いのが難点だが、まー何とかなるだろう

さーって早速これを読んで練習だ。

俺はダツシユで家に帰り本を読み始めた。

「じゃあまずは震脚からだな。えーと何々地面を力一杯踏みつける。

以上マジかよ。鉄山靠は・・・背撃である。以上」

マジかよ。ボツタくられたんじゃないよな俺？とりあえずやり方はわかったから庭で練習するか

「えーつと震脚が地面を力一杯踏み着けるんだっけ？じゃあ豪鬼の挑発ポーズを全力でおらあ」

その途端辺りに轟音が鳴り響いた。

それだけなら別段問題は無いというか気にしなかった。

今現状最もやばいのは俺の全身の骨という骨から鳴っちゃいけない音が鳴り響いたことである。

それを聴いた瞬間俺は激痛で意識を手放した。

第4話

あれから10日が経ちました。

そこには元気にラジオ体操をしている俺の姿がありました。

え!? 傷はどうしたって? そんなもの気絶から目覚めた後激痛に耐えながら冷蔵庫に入っている仙豆(せんず)って豆を食ったら治った。

そんな訳で今俺はラジオ体操したり、跳んだり、走ったり、掴んだり、登ったり色々して仙豆で得たカロリーを消費している。

うん、実は仙豆食べてから今まで水しか飲んで無いんだ。

まさか満腹度100%を今日まで維持するとは夢にも思わなかったとです。

そんな訳で今日まで震脚の練習は出来なかったのだよ。

ま、傷も治って適度に腹も減って来たから震脚するけどな

そして、俺の人生二回目の震脚が行われた。

結果?

おそらく全身の骨に致命的なダメージが入ったと思うが、仙豆を食べて回復した俺には死角は無かった。

そんな生活を過ごしていたある日

俺はいつもの様に震脚を行って自身の身体を頑丈に作り変えていた時である。

「きやあああああああああ、お父さん、お母さん来てー」

子供といふかなのはちゃんの声が響いたのであった。

それも当然であろう。何せ10日に一回我が家の庭から大きな音が響き渡るのだから、それに好奇心を刺激されたのはちゃんが覗きに来て、案の定血まみれの俺を見てびっくりしたって所だろう。

ちなみになんで俺がそんなに冷静だって言うの

気絶はしなくなったが、激痛のせいで身体を一步たりとも動かすことが出来ないからだ。

自分自身を客観的に分析しているとなのはちゃんの声を聞きつけ

た士郎さんと桃子さんが駆けつけ俺はそのまま病院に担ぎ込まれた。

病院に担ぎ込まれた俺はすぐに全身に包帯を巻かれた。

まあその際に震脚の練習により体中の傷を見られた事は些細なことですよ。

それを見て医者は驚愕し、この子の親は一体何をしているんだと憤慨していたがそもそも俺には親は居ない

なんだか面倒な事になったと思うが、気にしたら負けだと思いとりにあえず寝る事にした。

寝て起きたら何故か俺の前に医者らしき人が居た。

その後ろには何故か高町家の人たちも居た。

共通していることは全員が全員目を赤くして陰鬱そうな雰囲気醸し出している。

そんな中医者が意を決したように語り掛けた。

「すまない。僕たちも全力を尽くしたんだが、君の身体を元に戻すことは出来なかった」

医者がそういうと後ろにいる高町家が全員が泣き始め、士郎さんにいたっては手から血が出ていた。

しかし、俺としては元の身体に戻すことが出来ないという医者言葉に驚き慌てて自身の身体を見たが、どこか欠損しているわけでも無かった。俺をビビらせるなんてやるじゃないか!!!

ま、身体に関しては仙豆を食べれば元通りになるんで気にしないでくださいって言ったかったが、この世界にそんなものが流通している訳が無いので言ったら最後没収されかねないので黙っていることにした。

そんな事を考えていると桃子さんが話しかけてきた。

「所で君の親は今どこにいるの？早く連絡しないとイケないわ」

うん、一般的に考えればそうだよな。誰だってそう考える。俺だって普通ならそう考える。

しかし、親ねえく転生してから会ったこと無いからたぶんだけ居

ないんじゃないかな？

少なくとも一ヶ月以上は家に帰ってきたことが無いからもしかしたら長期出張とかしているのかもしれないが、可能性をあげればきりが無い

「生まれてから会ったこと無いので分からないですね。」

その俺の発言を聞いて部屋の空気が一気に張り詰めたような気がした。

「桃子さん・・・決めたよ僕はこの子を引き取ろうと思う」

「(ええ、士郎さん私もこの子をほっとけない無いわ)」

その時何故か俺の背中に言い知れない悪寒が走った。

そしてそれは見事に的中した。

「もし、よかつたら家の子に成ら・・・成ろうか!!!」

「そうよ。親が居ないなんて不謹慎だわ。家の子になるべきよ」

「家族が増えるの〜」

二人がそういうとなのはちゃんがつインテールをピコピコ動かしながら全身で喜んでいた。

それは部屋内の陰鬱な雰囲気を一気に払拭させる程であった。

しかし、それに流されるのは巻き込まれ系転生者。

ここにいる俺は嫌な事・面倒な事・空気を読む事はしない・やらない・読みませんをモットーに生きようと思っっているのはつきり・くつきり・しつかりと相手の耳に聞き間違いが無いように告げた。

「そのお気遣いに感謝いたしますがお断りします。そこまでしていただく事はありません。後治療費も自分で支払いますので大丈夫です。病院まで運んでいただきありがとうございます。では俺は帰ります。さようなら」

俺はそれだけ言うとポケットから財布を出し福沢先生を10枚医者者に渡して部屋を出た。

その後病室からは血相変えて医者が追いかけてきたがパルクールを日常的にやっている俺に追いつけるわけも無く無事振り切って家に帰ることが出来た。

家に帰って早速やったことは仙豆を食べる事であった。その結果俺の身体能力は劇的に上がったと思える。主に骨が硬くなったただけだが振り返ってみると今日は色々とめんどくさいことになったが、無事に一日過ごす事が出来たのでよしとしよう。さて、寝る前に日課のラジオ体操をして眠ることにした。

翌朝

雲一つ無い澄み渡る青空の下俺は朝のラジオ体操を行っていた。やはり、ラジオ体操は良いものだ。

全身の筋肉を解し、血流を良くし、その上身体を柔らかくするのでからまさに理想的な体操である。

それを俺は朝と昼と夜寝る前に毎日三回行っているのだ。実に健康的である。

そして、ラジオ体操が終わった俺は一本下駄（通称天狗下駄）を履いてランニングを行う。

未だにバク転・側転・前転などの動きは怖くて出来ない。

しかし、走る・跳ぶ・掴む・登る事等は誰にでも出来る事なのでこれらを行っていた。

それはもはや俺のライフワークになりつつあるので、いまさら辞めることなど考えてはいない

例えば目の前に血走った目をした土郎さんと恭也さんと美由紀さんが居たとしてもだ。

「ようやく見つけたよ。君とは少しO☆H A☆N A☆S H Iをしないとね。」

何故だろう土郎さんを見た途端脳内の緊急警報が最大レベルで鳴り始めた。

それに伴い悪寒が全身を走る。

「…………抱きしめる抱きしめる抱きしめる抱きしめる」

美由紀さんが俺を見ながら何かぶつぶつ言っている。

「…………例えば家族になったとしてもなのはやらん」

恭也さんにいたっては目がやばい

俺は逃げると思論した瞬間にはもう逃げ始めていた。

「「ふっふっふ御神流から逃げられると思うなよ」」

そこからは地獄だった。

猛ダツシユで逃げている俺を三人は追いかける。

しかし、その距離は一向に離れない。いや、むしろ徐々にだが縮まってきている。

バランス感覚を鍛えるために一本下駄を履いているので、速度は普段より出ない。

寧ろ転ばないように走るだけでも精一杯なのだ。

ならばどうするか？

答えは決まっている。

悪路を走って巻くしかない。

この場合の悪路は塀の上や屋根などだ。

さすがに高町家もそんなところは走り慣れては居ないはず・・・ならば逃げ切れる。

だが、俺のそんな浅い考えなどあざ笑うかのように彼らは俺を追いかける。いや、追い詰める。

二メートルある壁を飛び越えるってどんな身体能力ですか？

嘘でしょ!!!

壁を垂直に走ってるよ!?

そして30分後俺はあえなく捕獲されてしまった。

今現在俺は美由紀さんにごっしりホールドされて高町家のリビングに居る。

その様子を桃子さんはあらあらと言いつつ見て、なのはちゃんは俺の横に座っており、俺は美由紀さんの膝の上に座っている。

なので後頭部に柔らかい母性が当たるのは仕方の無いことなのです。

だから恭也さん血涙を流しながら俺を睨まないでください。

「そういえば土郎さんこの子の名前知ってる?」

桃子さんが恭也さんをスルーしながら土郎さんに尋ねる

「いや、僕も知らないなあじゃあまずは自己紹介からだね。僕は高町士郎。高町家の大黒柱さ」

「私は高町桃子。ママって呼んでね。」

「長男の高町恭也だ。」

「長女の高町美由紀だよ。よろしくね」

「次女の高町なのは。なのはって呼んで欲しいの」

士郎さんを皮切りに全員が自己紹介をし始める。

「じゃあ最後は君の番だ。名前教えてくれるよね。」

士郎さん目が笑ってないです。

名前ね・・・よしアレにしよう。

「分かりました。別段教えたからと言って困るものでは無いですね。俺の名前は坂本銀次です。」

第5話

「じゃあこれから家族になる訳だから銀次君と呼ばせてもらおうよ」

「なのほも銀次君って呼ぶね」

「苗字で呼ぼうが名前で呼ぼうがどつちでも構いませんが、俺はこの家に住む事を拒否します。というか引き取られるのを拒否します。」

俺の発言に今まで和んでいた空気がピシって音が入った気がした。

「えつと銀次君なんで拒否するんだい？理由を聞かせて貰えないかな？」

士郎さんの目がやたらと鋭くなった。なんでだと思ひ横を見るとなのはちやんがこの世の終わりみたいいな表情をしていた。

なるほど、この家のヒエラルキーはなのはちやんが頂点か・・・まいったね。

ま、だからと言って譲る気はさらさら無いんだけどね。

「うくん理由ですか。理由らしい理由はありませんが、あえて言うならば、例えこの星、この宇宙、生きとし生けるもの全てを支配する者が命令したとしても賽の目と俺の自由を覆したり、奪うことは決して許さない。と、言うわけ諦めて下さい。」

俺がそういうと桃子さんがニタアと笑い始めた。

「あらあら、それじゃあサイコロで決めましょうか。もちろん私が勝ったら銀次君は家族になって貰う事。銀次君が勝ったらこの話は今後一切しないということが良いかしら？」

「全然良くないです。俺にメリットが全然無いじゃないですかやだー」

「でも、銀次君が言ったのよ。賽の目を覆すのは許さないってね」

「ええ、言いましたがそれはあくまで勝負を受けたときの事です。なので俺は勝負をしません」

実際問題、桃子さんと勝負したら負ける気がする。

そしてこういうときの感はおおよそはずさない事を俺は理解している。

だから俺は桃子さんとは勝負しないで帰ることにした。

ちなみに美由紀さんの母性に後ろ髪を引かれる思いで抜け出したのは男なら仕方ないことだと思います。

そしてその様子を桃子さんがほっこりしながら見ていることに俺は気がつかなかった。

そして4年が経過した。

今現在俺は修行の成果により、自身の骨が震脚の威力に耐えられる身体を作ることが出来た。

その当時あまりにも嬉しくなった俺はその日から一日一万回の感謝の鉄山靠をやっていたが、途中から回数は取っ払って満足するまでやってる。

正直、感謝してやってるのに一万回だけっておかしいな、あと無論ラジオ体操にパルクール(天狗下駄使用)も欠かさずやっています。

その所為か日々が充実している。

そんな俺だが現在悩みを抱えているのだ。

それは俺の見た目的に年齢九歳という点である。

本来であれば小学校に行かなくちや行けないのだが、はつきり行って前世中学生だった俺(成績はドベ)的にはいきたくないのである。

だって別段福沢先生ならいっばい居るから将来金に困ることはほぼありえない。

誰にも迷惑掛けて無いんだから良いじゃねーかと思っていました。

そしたらどうだ

お巡りさんが追いかけてきたんだよ。

しかし、日常的にパルクールを行ってきた俺に追いつける訳無いじゃん。

余裕で逃げ切ったよ。

そしたら次の日は自転車に乗ったお巡りさんが10人来たね。

まあ、刺激的でなかなか面白かったけどな。

そんなことをして過ごしていたら今現在あいつら機動部隊とスワットとヘリコプター10機と自動車50台で海鳴を包囲し始めやがった。

気分は大江戸捜査網

というか俺は唯の9歳児で犯罪者でもなんでもないんだけどね。
なんでこんなことになったんだろう？

ああ、ママ、僕はただ街中を健康のため走り周っている善良な9歳児なのに、警察が目の敵にするんだよ。

そんな事を考えつつも走ることを止めずに、今日も今日とて走り続ける俺でした。

第6話

大丈夫だ。今の俺にしたら絶対に出来るはずだ。万が一失敗したとしても打撲程度だ。パルクールをこよなく愛する俺に不可能はあんまり無い!!!!

あ、どうも坂本銀次です。

今何をするかというところ……二つの高層ビルの間を三角跳びで登るところです。

何故そんな事をしているかって？

配管工の髭オヤジやパワースーツを着た美女にさらにサンタや忍者にも出来たんだ。ならばパルクールが挑戦するのも問題は無いという訳の分からない言い訳をしつつ、脳内BGMはブリンスタレツツチャレンジ♪

結果

何度ミスって地面に向かってダイビングしたか分からない位落ちた。

どれくらい落ちたかって？

100から先は覚えてねーよ。

まあ一番やばかったのは頂上付近で飛距離が足りずそのまま落ちたのがやばかったぜ。

空気抵抗で目を開けていられなかったから、受身を取れなかった。

怪我はしていないんだがね。

伊達に感謝の鉄山靠はやってないぜ。キリ

そんな訳の分からない達成感に身を震わせつつ家に帰ろうとしたところで背中に衝撃が走り、俺は真上に跳ね上がったあと地面に叩きつけられた。

何があったのか首だけを回して確認すると、黒い車が遠ざかっていた。

そうか

俺はあの車にひき逃げにされたのか……ふざけるなよ。

絶対に逃がさない。

きつちりかつちりけじめをびしっと着けてやる。

思い立ったら即行動

俺は……車を追いかけた。

しかし、車に追いつけるはずも無く見失ってしまうのは時間の問題。

ならば高いところから見ながら追いかければ良い。

塀に跳び乗り、屋根に跳び乗り、電線を走り車を追いかける。

そうしていると車はとある倉庫の前で止まった。

すると中から黒ずくめのスーツの男が4人

なんだか見た目若そうなホストの兄ちゃんが1人

そして特徴的な金髪の少女と紫の髪の少女が担がれた倉庫に入っ

ていったのが見えた。

それから10分ほどしてようやく、倉庫に着いた

中の様子を見るとホストの兄ちゃんが笑って、紫の髪の少女が涙を

流して、金髪の少女が何かを叫んでいるようだ。

どんな状況か分からないがとりあえず今言えるのは入り口付近には4人の男が幸運にも居る事だ。

俺はそれを確認して、入り口付近の壁に近づくと

今からやる事は今まで何十、何百、何千、何万回と数え切れない程

繰り返してきたこと

腰を落とし、右腕を前に出し、左腕は腰の辺りに置く

呼吸を整え、一気に踏み込む。

全力の震脚で踏み込んだ為辺りに轟音が鳴り響きコンクリートは踏み砕かれ地面にクレーターが出来る。

そして俺は背中を入り口の壁にぶつけた。

その結果壁には人が通れる程の穴が空き、壁の付近に居た4人の男たちは俺の目論見道理に地面に倒れていた。

辺りを見渡すとホストの兄ちゃんが引き攣った顔して、金髪の少女

と紫髪の少女は目をぱちくりさせていた。

そしていち早く正気に戻ったホストの兄ちゃんが声を荒げる

「貴様一体何者だ。忍の手先か？どちらにしろ夜の一族であるこの俺に勝てると思うなよ」

「夜の一族だかなんだか知らないが・・・俺を轢いたんだ。けじめは付けて貰うぞ」

「夜の一族を知らない・・・なんだ貴様も下等生物か、いいだろう冥途の土産に教えてやる。夜の一族とはなお前ら人間とは違い、優れた頭脳、身体能力を持った吸血鬼の一族だ。それに歯向かったんだ。そこに居る月村すすかも俺と同じ化物だ。」

ホストの兄ちゃんがそういうと紫の少女はびくつと身体を震わせた。

それを見た金髪の少女は叫んだ。

「何が夜の一族よ。吸血鬼がなんだって言うのよ。すずかは私の親友よぶぎけたこというんじゃないわよ」

「ほう、言うじゃないかしかし、ほかの人間がお嬢さんみたいに受け入れられる訳では無いのだよ。」

貴様はどうだ？」

そういうとホストは俺に話を振ってきた。

すずかと呼ばれた少女と金髪の少女も俺に視線を送る

「人はなあ、安っぽいプライド」があれば神や悪魔や化物等にだって立ち向かうことが出来る。そして俺はこの「安っぽいプライド」にかじりついている。たかが吸血鬼だなんだといちいちビビッてられるかよ。来いよ吸血鬼。それとも下等生物に怖気ついたか？」

分かりやすく人差し指を曲げて挑発する。

「ふん、良いだろう。その挑発に乗ってやるさ。」

そういうとホストはまっすぐ向かってきた。

自分の事を吸血鬼と言うだけあってそのスピードは速かった。

だが、俺にはそんなことは関係ない。

スピード、技、力が例え相手の方が上でも俺がやるのは唯一つ間合いに入ったら・・・打ち落とす。

「あ、そうそう俺も一つ面白い事を教えてやるぜ。」

ホストの拳をあえて背中で受け止めて技を放つ

「鉄山靠に二の打ち入らず、沈みやがれ自称吸血鬼」

その瞬間ホストはコンクリートの地面にめり込んだ。

「グハアば、ばかな・・・この俺が下等生物如きに」

「ハッ意外としぶといじゃないか、さすが吸血鬼だけの事はあるな。」

俺はそれだけ言って足を上げる

「ま、待ってくれ」

ホストの制止の声を聞かずに俺は足を振り落とす

「ウルアー……」

ホストの身体を思いっきり踏みつけると骨の折れる音が響くと同時にさらにコンクリートに埋まった。

まあ吸血鬼って言うていたし死んではないと思うが：：別段どっちでもいいか

そんな事を考えていると金髪が突然叫びだした。

「あんたそいつやつつけたんならとつと縄を解きなさいよ。」

なんとという上から目線!!親の顔が見てみたいby銀次

「あのさあ君と俺は初対面だよな？仮にも助けて貰う人の態度がそれで良いと思ってるわけ？全く最近のガキンチョは躰がなってるな。これもゆとりの弊害なのかな？親の顔が見てみたいよ。」

俺がそういうと金髪は顔を真っ赤にさせて口をパクパクさせていた。

「あのく私月村すずかっつて言います。すみませんが縄を解いて頂けませんか？」

「ああ、俺は坂本銀次だ。全くお友達の月村さんは礼儀正しいのに隣の金髪はやかましいだけだな。ほれよ」

「改めてありがとうございます。じゃあアリサちゃん今から縄を解くからまってね。」

「いや、別に大したことはねーよ。たまたま俺もこのイケメンに用があっただけだし、じゃあ帰るわ」

「待ちなさいよ。助けられっぱなしなのは性に合わないわ。だから、

その、助けてくれてありがとう。って勘違いしないでよこれはあくまでお礼なんだからね」

「勘違いも何も自意識過剰でしょ?。」

「う、うるさいわね。あと私の名前はアリサ・バニングスよ。特別に名前前で呼んでいいわよ。」

「なあ月村この子いつもこんな感じなの?俺若干疲れてきたんだけど」

「いえ、普段はもっとおとなしいですよ。あと私の事はすずか呼んでください」

「え!?ああ、わかったよ。じゃあか「すずか助けに来たわよ」うん?あ、美由紀さんだ〜♡それとおまけの恭也さんと士郎さんなんているんですか?」

「それはこっちの台詞だよ。なんで銀君がここにいるの?」

「ジョギング中にそのイケメンが運転する車に撥ねられたから、けじめを着けに来た。」

「相変わらず銀君はバグってるね」

「失敬な努力の賜物ですよ。美由紀さん」

「どんな努力をすれば9歳児がコンクリート壁を壊せるだろう?」

そりゃあもちろん感謝の鉄山靠ですよ!!

「父さん一体どうなってんだ?」

「さあ?たぶん銀次がやらかしたんじゃないかな。まあ良いとりあえずみんな車に乗ってくれ家まで送ろう」

士郎さんの一言によりみんな車に乗り始めた。

車の運転は士郎さんで助手席は恭也さん

後は月村・美由紀・アリサが後部座席に座っている。

俺?美由紀さんの膝の上だよ。

月村・バニングスは俺のことをちらちら見ているが、今の俺の全神経は美由紀さんの母性が当たる背中に集中しているため、車内は静かなものだった。

げんさく!!開始

第7話

士郎さんの車に揺られることおよそ30分後

車を降りると目の前には大きな家が建っており、門のところにはメイドさんと月村によく似たおそらくお姉さんが居た。

さすがアニメの世界だ。美男美女が多い

そんな事を思いつつ目の前で月村が姉に抱きしめられている光景を黙って見ている俺

我に返った姉が家に案内したのはそれから10分ほど経った後である。

居間に案内されてソファーに腰掛ける。

俺の正面には月村家が勢ぞろい

俺の横は士郎さんと恭也さんで埋まっている。

ちなみに俺は美由紀さんの膝の上で抱えられている。

そんな中月村姉が感謝の言葉を述べる

「では、改めて月村家主月村忍です。この度は妹を助けてくれてありがとうございます。」

「えっ!? ああ、これはご丁寧にもです。あ〜と名前は坂本銀次です。」

美人のお姉さんに感謝された事なんて転生前も無かったことだし、正直どもってしまったのは仕方の無いことだよね。

「銀君照れてる〜かわい〜」

美由紀さんはそういうと手にさらに力を籠めて抱きつく

その光景を見て口をヒク着かせながらも話を続ける月村姉は見ていて面白い

「それで坂本君とアリサちゃんは今回の事で月村家の・・・いえ、夜の一族について知ってしまったのよね。そこで二人には契約してもらいたいの」

「契約ですか忍さん？」

「ええアリサちゃん。夜の一族の事を決して誰にも話さないことをね。」

「私はさすがの親友です。誓って夜の一族の事は話さないです」

「ありがとうね。アリサちゃん」

「なーに泣いているのよさすが当然じゃない」

アリサとさすがは手を取り合い喜んでいた。

「じゃあ次は坂本君ね。契約しないなら悪いけど記憶を消させてもらうわ」

そう言った月村姉はまっすぐ俺を見ていた。

それにしても吸血鬼・・・ね。

いくらここがアニメの世界だからと言ってもそんなん居るわけ無いでしょ

「えっと、つまり中二病って事ですかね。わかりましたそういう設定なら、周りにばれると恥ずかしいですもんね。大丈夫です。俺も・・・そんな恥ずかしい事は周りに言いませんから」

俺がそう言った瞬間月村家と恭也さんはテーブルに頭を思いつきり頭突きした。

士郎さんは「まあ、実際信じる訳無いよな」とぼやいていた。

それから月村姉が必死に夜の一族がどうのこうの言っていたが、俺には痛い人になしか思えなくなってきた。

なるほど、これが残念系美人か

「本当なの坂本君信じてよ」

「じゃあ何か目に見える形で証明してくださいよ。吸血鬼っていう設定なら身体能力もすごいのでしょうか？それなら腕相撲して、月村さん達が勝てば信じます。俺が勝ったらこの話はもう終わりで」

「それで納得するならそれでいいわよ。じゃあさすが腕相撲してあげて」

「え？うん、わかった。」

姉に言われてやる気を出すすずか

こうして急遽始まった腕相撲大会

「じゃあいくよ」

「いいよ〜」

腰を落とし臨戦態勢の自称吸血鬼のすずか

対して俺は片手をポケットに手をつ突っ込んですずかの手を握る

「じゃあレディ・・・ゴー」

士郎さんがそういうとすずかは力を籠める。

しかし、結果は微動だにせず俺の腕は動いていなかった。

これにその場に居た全員が驚いていた。

「まー女の子に負けるほど軟じゃないよ俺はね。ホレ、両手使っていからがんばんな」

俺がそういうとすずかは両手を使い全体重までかけた。

しかし、結果は変わらず微動だにせず

「大したことないなあ〜ホレ」

俺はゆっくりすずかの手をテーブルに着けた。

「じゃあ次は・・・お姉さんで」

「すずか仇はおねえちゃんが取るからね。士郎さんお願いします。」

そして俺とお姉さんは手を握る。

お姉さんもすずか同様腰を落とし、空いている手はテーブルを掴んでいる。

俺はやっぱポケットに手を入れてるだけである。

「え!? ああ、じゃあ手を組んでレディーゴー」

士郎さんの声がすると同時にお姉さんは力を籠める。

その力は体感ですずか三人分位はありそうだった。

しかし

「嘘でしょ? あなた本当に唯の人間?」

「失敬な!!俺はどこにでもいる唯のパルクール好きの9歳児だ」

「そんな9歳児は居ないよ銀君」

「解せぬ」

腕相撲の結果は俺の勝ち、しかし何故か化物扱いにされた感じがするがどこにも違和感はなかった。

その時であった。

「お嬢様分かりました。彼が何者かが」

「ノエル本当!? 結果はどうなの」

「はい、調べた結果彼の父親は“怪物”坂本ジュリエッタで母親は“

エアマスター”相川 摩季です。」

「マジかよ!!!」

「あんたが驚くな!?!」

アリサが突っ込みを入れるがそりゃあ驚きもするさ、何せ初めて知ったんだからな。

未だに家は福沢先生で埋め尽くされてて調べることが出来ないんだから仕方が無いのさ

「と、とりあえずノエルそれ以外に分かったことは?」

「彼は年齢9歳児「それは知っているわ」で、小学校に通ってはいないようです。」

それを聞いて月村姉はニタリ笑い出した。

「坂本君・・・嫌です」まだ何も言っていないじゃない」

「言わなくても分かります。学校に行けとでも言うのでしょうか? 嫌ですよ。面倒くさいですし」

「そんなことないよ。坂本君一緒の学校に行こうよ」

「そうよ、私が友達になってあげるわよ」

「ほらほら、すずかもアリサちゃんもこう言っている事だし・・・ね。お願い。手続きはこっちですて置くから」

「いやーですー。なんで小学生を2度もやらなきゃいけないんですか!!! 俺は断固抗議する」

「二「え? どういうこと? (だい)」「」」

なんだろう俺は今口走ってはいけないことを言った気がする。

結論から言おうあの後俺は洗いざらいしゃべることになり今現在は

「はい、みなさん今日から新しいお友達が来ました。」

「えー坂本銀次です。」

すずかとアリサが通う聖祥大学付属小学校に通うことになった。
しかもクラスも同じだとか忍さん・・・あんた一体何者だよって夜
の一族の当主だったな。

「にやあああああなんで銀次君がここにいるのくくく」

「高町さんと知り合いなのね坂本君はじゃあ席のほうは高町さんの隣
が空いているからそこに座ってね」

「わかりましたくつとうんじゃよろしくなのはちゃんよ」

「うん、よろしくつてそうじゃないの!?!なんでここにいるの!!!」

「なんでつてそりゃああそこにいる月村すずかつて奴の姉の所為だ。」

俺がそういうと月村がこつちを見て口ばくでなんか言っているが、
俺には読唇術とかそんなことは出来ないので理解することを諦めた。

「言っている事が何一つ理解できないの」

それはなのはちゃん理解力が足りないからだよ。

授業が終われば質問攻めに会うのは転校生の宿命である

―その赤い髪の毛は地毛ですか？

染めているに決まってるだろうJK

―あんた何時からなのは知り合いなのよ

―うん、私も気になるな教えて銀次君

翠屋の前が俺んちだ。だから昼飯はいつもお世話になっていた

―好きなタイプは？

年上の美少女

―お父さんはどんな人

さあ？会ったことないから分からんがたぶんマキマキ言っている
と思うよ。

―お母さんは？

喧嘩好きのストリートファイター

―将来の夢は？

ニート

と質問に答えればチャイムが鳴り次の授業が始まる。

授業内容？ああ、ぜんっぜんわかんねえや

転生したとはいえ、もともと俺は頭が良いわけでも何でもないし、ましてや勉強なんかしていないし、する気もない

だから俺は考えるのを止めて・・・寝ることにした。

目が覚めたときには目の前で涙目になっているのはちやんとす
ずかとアリサが居た。

「ふあくよく寝た。ところでお前らどうしたんだ？」

「あんたを全力で殴ったら捻挫しちやつたじゃないバカ」

「殴ったこつちがダメージ受けるとか銀次君は理不尽だよね」

「手が痛いのに」

アリサ・すずか・なのはの三人の手を見ると確かに赤く腫れていた。

「知らんがな。じゃあ俺は帰るぜ」

「待ちなさいよ。私も一緒に帰るわよ。」

「そうだよみんなと一緒に帰ろうよ」

「うん、そうしよう」

「集団下校って子供じゃないんだからってお前らは子供だったな」

「あんたも見た目は子供じゃない!!!」

「そうだよ。どこもおかしいところはないよ」

「二人とも何を言っているの？」

「なのは(ちゃん)にはまだはやい(よ)」

そんなどうでもいい話を話しながら俺たちは学校を後にした。

その夜、外でラジオ体操をしていたら夜空に煌く“何か”が“海鳴市
に降り注いだ。

俺はその時アニメの世界ってすげーなって思った。まる

第8話

俺は最近思い悩んでいた。

それというのも俺の放つ鉄山靠なんだが、震脚の破壊力をそのまま背中に乗せてぶち抜くだけ……

はつきり入ってただの力押しである。

今となつてはコンクリートをぶち抜く位は拳や蹴りでも行える。

だからこそ思い至った。

違う!!! そうじゃないだろう!!!

本当の鉄山靠は爆発させるんだ。

ならば俺の鉄山靠はまだ始まつちやいねえ

だからこそ、今一体何が足りていないのか……足りない頭をフル

回転させて考えた結果

俺はそれを知るため本屋^{聖域}に赴いた。

なんか後ろでなのはちゃんとアリサとすずかが叫んでいるような声が聞こえたが俺に取っては些細なことだ。

そして、今現在俺は求めていたものと若干方向性が違うが結果的には似たような物を会得する方法を見つけた。

それは……“念能力”だ。

習得する方法二種類ある

一つは座禅を組み瞑想をし、長い時間を掛けて開花する方法

もう一つが念能力者に協力してもらい、オーラを流して開花する方

法

しかし、俺に取っては一択のみである。

何故なら俺に念能力者の知り合いなど居ないっていうかこの世界に念能力者が居るのかすら知らない。

まあアニメの世界だから探せば居るだろうけど……はつきり要つてそんな事をする気はさらさら無い。

なので俺は……せつかくだから座禅をする事にした。

場所は家の庭

いつもクレーターを作っているが、戻ってきたときには何故か綺麗

さっぱりなくなっている坂本家の不思議な庭でただいまだるんだるのブリーフを履いて座禅をすること・・・5秒

ぽつぽつと雨が降り出した。

その雨は次第に強くなり、俺の全身はびしょ濡れになった。

その時俺の頭脳にある言葉が蘇った。

世の中のある程度の事は気合で何とかなる。

チャック・ヤカンだっけ？そんなふざけた名前の筋肉達磨が言っていた。

ならば座禅など組んでいる場合じゃない!!!

目をくわつと開けて、一気に立ち上がり叫ぶ

「その毛、この毛、あその毛、産毛なんかはいらん。あとは全身の毛の色素も無くなっても構わないし、親知らずに盲腸も捨ててやる。それとあるかどうかも分からないが魔力・霊力・神通力も消えちまえ!!!そんな訳で開きやがれ精孔—————起きやがれ念能力ううううどりよやああああああ」

その瞬間俺の体のいたる所から尋常じゃないオーラ量がほとばしる。

「うおおおおおい全身から力が溢れる。最高に、最高に、ハイって奴だぜ—————。ヒヤツハー我慢出来ねえー鉄山靠だ—————。」

それから俺はヒヤツハーしていた。

あまりにも気分が良くて街中を駆け巡っていた。

途中なんかデツカイ毛玉みたいな変なものを見かけたので驚きのあまり本気の鉄山靠をしたら、毛玉は消えて青いひし形の石になってしまった。

一瞬間がどうにかなりそうになったが、よくよく考えればモンスターを倒せばお宝を低確率で落とすのはRPGの基本

つまり、この毛玉はモンスターで青いひし形の石は宝物である。

そして倒したのは俺

つまり俺の物でおkだ。

そんなことを考えつつ俺はひし形の石をブリーフに突っ込んで家

に帰ることにした。

家に帰るころにはオーラはだいぶ落ち着いていた。

やはり鉄山靠を全力で打つのはスカツとする。

そんな事を考えていると家の前には女刑事が張り込んでいた。

俺の格好は客観的に観て一言

「だるんだるんのブリーフにひし形の石のせいでもっこりしている見た目は9歳児中身は中二坂本銀次唯の変体です。本当にありがとうごさいました。って言い訳ご無用つかまればお先真っ暗、なるほどこれが究極のスリルか・・・露出狂の気持ちがちよっぴり理解できたところで考えるんだ。どうすればいい？」

うくと考える俺の視界にダンボールと石と自身を覆うオーラが見えた。

そこで俺は自身の精孔を気合で閉じて、女刑事が見ていない方向にダンボールを不自然な位置に置いてから、その方向に空に向かって石をブン投げた。

「あぐつ!!ふえええん痛いの~~~~」

俺の投げた石は運が悪いことに女の子に当たったようだ。

その声が聞こえたのか女刑事は現場に猛ダツシュした。

その隙に俺は我が家に猛ダツシュ

家に入ったら扉を急いで閉めて任務完了

冷や汗が半端ないので今日は風呂場でラジオ体操をする事にした。

そして、風呂から出て飯代わりに仙豆を食って布団に入ってある事を疑問に感じた。

何で、空に向かって石を投げたのに女の子に当たったんだ？

その疑問が解けるのはしばらく後だった。

第9話

目が覚めたら時刻は6時

顔を洗って、歯を磨いて、ジャージに着替えて外に出る。

やる事はいつも行っているラジオ体操

それが終われば全速力の俺式パルクルマラソンを七時まで行い、最後は感謝の鉄山靠と最近始めた突きも行った。

全てが終る頃には時刻は7時40分になっていた。

汗だくになった俺はシャワーを浴びて、汗を流し制服に着替えてから昨日拾った青い菱形の石に紐を通してネックレスみたいにした後それを身に着けて学校に向かう。

バス停に着いたときには前方に慌ててバスに乗るなのはちゃんが居た。

なのはちゃんが乗ると同時にバスは動き出す。

その時偶然だったと思う

バスの後部座席にアリサとすずかが居て二人が後ろを振り向き、おそらく、いや間違いなく今二人とも俺を凝視している。

アリサはなんか叫んでいるようだが残念君の声は俺には全く届いて居ないんだぜ。

隣に居るすずかは紙に高速で何かを書いて俺の方に向けてきた。

えーつと“急がないと・・・”

読み切る前にバスは行ってしまった。

最後まで読めなかったのはすごい残念だ。後でなんて書いたか教えてもらおうとしよう。

そんな事を考えつつ俺は最短距離をゆっくり歩きながら学校を指した。

結果？

遅刻はしなかったぜ。別段しても良かったんだけどな

「ところで何であんたはバスに乗っていないのに学校に間に合っているのよ納得行く説明しなさい。」

「説明も何も最短距離を歩いただけだ。別段驚くことをした訳じゃあ

無いよ。それともアリサは俺に遅刻してもらいたかったのか?」

「そんな分けないでしょ!?!あとその最短距離ってどういうことよ!!!!!!」

「そんなに怒るなよヒステリックは嫌われるぜなあずすか」

「そうだよアリサちゃん落ち着いて」

「はあーはあー分かったわよ。じゃあ銀次答えなさい」

「まー様は算数と同じだよ。時速60キロで6キロの距離を通過するには何分掛かりますか?」

「そんなの簡単よ答えは6分だわ」

「おう正解だ。じゃあ次行くぞ。分速320で2キロの距離を通過するには何分掛かりますか?」

「6分25秒よつてもしかしてあんた秘密の抜け道でも知っているんでしょ教えなさいよ」

「うん、あるんだったら教えて欲しいな」

「なのはも知りたいの〜」

「三人ともなんか勘違いしているみたいだがそんなものはねーぞ。答えはバス停から学校までの距離をまっすぐ突っ切ったんだ」

「だからそんなことできるはず無いでしょ!!!バス停から学校まで建物が幾つあると思ってるのよ。空でも飛ばないと無理に決まっているわ」

「えつともしかして銀次君空を飛んできたの?」

「うくん当たらずとも遠からずだな」

「二どういうことなの(よ)」

「建物の上や家の屋根を通ってきたそれだけだよ。それにしても空を飛ぶとか……アリサは魔法とかそういう系のアニメが好きなの?」

「べ、別にどうだって良いでしょ。ところで銀次首から提げているそれは何よ」

「ああ、これ?昨日拾った綺麗な石。気に入ったから紐を付けてネックレスみたいにした。ちなみに上げないぞ」

俺は三人に見えやすいように石を服から出して見せた。

「へえ〜意外と綺麗じゃない」

「うん、似合ってるよ銀次君」

「銀次君それもつとよく見せてくれないかな？もしかしたら知り合いが落としたものかもしれないの」

「すずかとアリサは単純に褒めてくれたが、なのはちゃん君は何を言っているんだい？これは毛玉を倒したら出現したレアアイテムだよ。君の知り合いのものでは無い事は確かだよ。」

「と言えれば良いがそんなこと言ったら忍さんと同じくらい痛い人になってしまう。」

俺は中二であることは認めるが痛い人は嫌なのである。

だから俺は一方的に拒否することにした。

「お断りします」

「ちよつとだけで良いからお願いなの」

「ご遠慮します」

「本当に知り合いが困っているの。だからなのは助けてあげたいの」

「なのはちゃん・・・あんまり聞き分けの無い子は桃子さんに頼んでお尻ぺんぺんだよ」

「小学三年生になってお尻ぺんぺんは嫌なの」

まー人としてお尻ぺんぺんは嫌だよな。

そんなやり取りが学校であったが今は帰宅中

朝とは違う道を通つたらまた違う出会いがあった。

普通に青い菱形の石が落ちてている。

右見て、左見て、後ろ見て、前を見るが誰も居ない・・・取るなら今のうちだ。

俺のBダツシユにより見事菱形の石はゲットできた。

「よっしやー石ゲットだじえー」

その時だった。

誰も居ないはずのこの場所に女の子の声が響いた。

「ジュエルシードを渡してください」

前後左右を見渡すが誰も居ない。

これはもしや・・・幽霊かもしれん

返事をしたらやられる可能性大

ない。

そして俺は背中を壁にぶつけて一言呟いた。

「今日みた桃源郷の事は俺は消して忘れない。それこそ死んでも忘れない。」

「あんなことしておいて逃がすわけ無いでしょ？それに後ろは壁よ」

「我が鉄山靠の前・・・いや、後ろか、鉄山靠の後ろに碎けない物は無いことを見せてやろう。はあああああああどりやああああああああああ」

オーラを纏った俺の鉄山靠は壁をぶち抜いた。

「あばよ」

ぶち抜いた壁から飛び出した俺は地面を見る。

目測で4階相当の高さであった。

そして、俺はそのまま地面に着地し何事も無く歩いて家に帰った。

その様子をぶち抜いた壁から幽霊がクスクス笑って見ていたことに俺は気が付かなかった。

今日はやたら疲れた

なのはちゃんはやたらと見せて見せてうるさいし、空から女の子の声が追いかけてくるし、しかも最後は幽霊といえど美少女の・・・ぐふふ、まあ悪いことばかりじゃあなかったしラジオ体操したら寝るとするか

俺はそう思い家に着き、ドアを開ける

「クスクス、言ったわよ幽霊からは逃げられないってね」

そこには先ほど桃源郷を魅してくれた幽霊が居た。

「おい、どうやって俺の家を調べた」

「とりあえず私の股に話しかけるのは止めてくれるかしら？」

幽霊は顔を真っ赤にして恥ずかしくがっている。

「ああ、悪いね美少女には免疫力が無くなってな悪い、すまねえ、許せ」とは言いつつも視線は幽霊の股から外れないどうやら俺は呪われてしまったようだ。

第10話

ふとしたことから幽霊に取り付かれた俺坂本銀次。

しかも、困ったことに幽霊の顔はクラスメートのアリサ・バニングスと同じ顔で同じ名前。

さて、どうしたことから？

「よし、ローウエル・・・で良いか」

『一つ屋根の下に暮らす事になったんだから苗字で呼ぶのは感心しないわ。名前で呼びなさい』

「と言ってもなア〜知り合いにお前さんと同じ名前が居るから区別しないと頭がこんがらがっちゃうぜ」

『それは銀次の事情であつて私には関係ないわ』

「全くもって気が強い幽霊だ。じゃありサって呼ぶ事にする。これで妥協しなさい。」

アリサは俺が言った言葉を聴くと納得したのか表情を柔らかくした。

『まるで私が駄々を捏ねた子供みたいに言うんじゃないわよ!!! 少なくとも私の方が年上よ。まー銀次にしては良いネーミングセンスだし、今回はそれで許してあげるわ。』

「毛も生えてないくせに年上ぶるのは関心しませんあ〜」

『~~~~~!!』

顔を真っ赤にして動揺する金髪美少女はたまりませんあ〜

「じゃあ俺はそろそろ寝るからお休み。」

『ちよつと銀次待ちなさいよ!! ようやく喋れる相手を見つけたのだから今日はオールよ』

その後は明け方までリサとおしゃべり・・・

リサは幽霊だから大丈夫かもしれないが、今の俺はまごう事なき正真正銘の9歳児。眠くて眠くて叶わない。

小学校をサボれたらどんなに楽か・・・まあ、サボったら三人娘が家に押しかけてきそうだ。

それは非常にめんどくさいことこの上ない。

そんな事を考えつつ学校に向かう。

そして、告げられる現実

一時間目体育・二時間目体育

「マジかよ。眠れねーじゃん。」

俺の眩きを聞いていた三人娘が駆け寄る。

「銀次あんた授業をなんだと思ってるわけ？」

「そうだよ。それに銀次君は運動得意なんだからやる気出そうよ」

「なのはもがんばるから銀次君もがんばるの」

「あーはいはい、わかりましたよーっと」

そういつて俺は着替え始める。

「ちよつと銀次いきなり着替え始めるな!!!」

「それにしてもすごい身体だね。銀次君」

「銀次君傷だらけなの。それ痛くないの？」

三人が三人とも手で顔を隠しているが、指の隙間から覗いているのが丸分りである。

「お前らも速く着替えといた方が良いんじゃないかね？授業に遅れても知らんよ」

「う、そうだった。なのはすずか速く行くわよ。(それにしてもすごい身体しているじゃない)」

「そ、そうだね。じゃあまた後でね銀次君(もう少し見ていかっただけど仕方ない)」

「あく待ってよ。ありさちゃんすずかちゃん」

それだけ言つて三人娘はクラスを出て行った。

『あらあら、銀次モテモテじゃない。少し焼けちゃうわね』

「(子供の身体を見て鼻血が出る事に俺は驚きだ。)」

『銀次の肉体がそれほど魅力的って事よ』

「(さいですか)」

そして、本日の体育は体力測定

行う種目は握力・50M走・長座体前屈・走り幅跳び・ソフトボール投げ

考えてみれば今世では自分が今どれほど出来るのか凶った事が無かった。

クラスの男子達は女子には負けねーと叫んでいる。

その輪から外れている黒縁メガネ君はため息を吐いているが彼は運動が苦手なんだろう。

逆に女子を見てみるとアリサの目が血走っていて、すずかは鼻息荒く俺を見ている。

なのはちゃんは黒縁君と一緒に居る。

何かしらシンパシーでも感じたのだろうか。

「次は岸本君」

「分りました。」

呼ばれて返事をしたのは黒縁君だった。

彼は心底たるそうに握力計を握る。

先生が測り終わったそれを見ると驚いて叫びだした。

「わ、岸本君右・左ともに握力60kgぐすごいじゃない」

「そんな大したこと無いですよ。(やべっ!!力入れすぎた)」

右・左共に握力60kgかやるな黒縁君

「じゃあ岸本君にみんな負けないように次は坂本君」

「はーい、よつと」

俺はそういつて渡された握力計を全力で握った。

「さーて坂本君の握力は……って嘘でしょ。メーター振り切ってる。最低でも100kg……おかしいわね壊れているのかしら?」

ちなみにすずかはそれを聞いて本気で握ったところ53kgだったとかで落ち込んでいた。

アリサは女子の平均より少し上で、なのはは右6kg・左4kg

続いて50M走は結果だけ言うと俺5秒ジャスト

すずかは7秒5、アリサは8秒6、なのは15秒4

その結果黒縁君から熱い視線を感じるようになったが些細なことだ。

そして、長座体前屈

一日三回ラジオ体操を行っている俺にとってはこの程度何の問題

も無かった。

身長123cmに対して60cmというのがすごいのかどうかは分らない。

ただ、クラスの平均は29cmだったと明記しておく。

そして、走り幅跳び・・・これは出ました新記録

走らず飛んだら砂場を余裕で越えてしまった。

それにはクラスの全員が驚いた。

そして最後のソフトボール投げ

「銀次君ソフトボール投げ勝負しない？」

「良いけど俺が勝ったら何するよ？」

「そうだね。私とデート出来るってのはどう？」

「うくん、すずかとデートね。あんまり興味ないからそうだね。勝者は敗者に一回だけなんでもお願い出来るにしない？もちろん俺はハンデ有りでもいいぜ」

「乗ったよ!!!ちなみにハンデの内容は？」

「手首の力だけで投げる。これなら勝負になるでしょ？」

「ふふふ、銀次君本当にそれでいいんだね？」

「ああ、武士に二言は無い」

そうして、始まったソフトボール対決

校舎を正面に構えるすずか

勢いを付けて全力で投げた玉は校舎にまで届いた。

先生を含めまわりはポカーンと驚いている。

そりやそうだ。ここから校舎まで約120mはある。

投げた張本人はドヤ顔を決めている。

「さあ、次は銀次君の番だよ。・・・ふふふ、これで銀次君は私の物」

「まあ勝負にすずかが勝つたらね。」

「いくら銀次君でも振りかぶる事が出来ない状態じゃあ私の記録は越せないよ。」

「じゃあ見せてやるよ。現実って奴をつな」

そして、俺はソフトボールが壊れない程度に握り手首のスナップだけで投げた。

ボールは校舎の時計に突き刺さり、そのままめり込んだ。

「ありやりや運が悪い、引き分けだわな」

クラス全員開いた口が塞がらない状態になった。

すずかに至っては落ち込み具合が半端ないが事勝負において手を抜くのは俺の流儀に反するので仕方が無かった。

そんなこんなで放課後

リサと共に帰っていると頭上から声が聞こえた。

「リサ今喋った？」

『私じゃないわよ。あの子よ』

リサが指差した先には金髪で黒のスクール水着にマントを付けた如何わしい少女がビームシザーズを持って飛んでいた。

「あ、あのあなたが持っているジュエルシードを渡してください。それは危険なものなんです。」

「そんな物は持ってないぞ。大体なんだジュエルシードって？」

「ジュエルシードは人の願いを叶えるロストロギアで見た目は青い菱形の石で「もしや、これの事か？」ああ、そうです。危険ですので私にください。」

首から提げている石を見せると少女は大慌てで近寄ってきた。

しかし、それよりも速く動いたものが居た。

『銀次悪いけどちょっと借りるわね』

アリサはそれだけ言う俺の首に掛かっていたジュエルシードを奪った。

『ジュエルシード。この私アリサ・ローウエルを生き返らせなさい』

その瞬間目がくらむほどの光が明かりを包む。

光が納まるとそこには・・・受肉したアリサ・ローウエルがそこに居た。

「やったわ、銀次。私生き返れたわ。」

裸足の状態でびよんぴよん飛び跳ねる彼女がそこには居た。

しかし、彼女は気づいているのだろうか？

飛び跳ねていることによって、彼女の桃源郷が絶賛バーゲンセール状態になっていることに・・・

だが、それよりも俺は今この瞬間ならば許されるだろうことを言う。

それは

「リサちよつと確認するぜ。」

俺はそれだけ言うとりサの心臓に耳を押し当てて、右のおっぱい触る。

「どう？動いているでしょ？私の心臓」

「ああ、ドクン、ドクンって力強く鳴っているよ。」

「で、確認は済んだからもうおっぱいから手を離してくれないかしら？」

ちいバレテタカ致し方ない

「おつとコイツア失礼しやした。じゃあ石は返してもらいたんだけど一体どこ？」

「さあ？」

「なるほど一回限りの願い玉か・・・なくなったのならば致し方ない。露出狂の少女よ物は無くなった諦めてくれ」

俺がそう言った直後少女は大きな声を上げて泣き出した。

「う、うわああああああんせつかく見つかったと思ったのに無くなるなんてひどいよおおおおお」

少女の声が当たり一面に響き渡った。

そして、空からまたしても声が響き渡る。

「フェイトを泣かせるなアアアア」

顔を上げるとナイスボディな女性が拳を振り上げ俺に向かって飛んできた。

それは俺の顔面に直撃した。

その瞬間骨が砕けた音がした。

「ぐああああなんて石頭だい、魔力で強化した拳が砕けるなんて・・・」

「いや、俺も想定したよりもすごい痛かったんだけど・・・」

状況はどんどん悪くなっていく。

何せ金髪の少女は大声で泣いている。保護者と思われる女性は右

の拳が砕けている。

それだけで俺が捕まる理由は十分だ。

速いところあの女刑事が来ない内に撤退したいが、状況は更に悪化し始めた。

うわさをすればなんとやら、遠くの方から砂煙を上げて女刑事が走ってきた。

「やっべーリサ逃げるぞ。サツが来やがった。」

「いやいや、銀次あんた今まで何やってきたのよ」

「生きてりや色々あるさ。という訳であればよ」

俺はそれだけ言うトリサを抱えて走り出す。

それを黙ってみているわけが無いフェイトと呼ばれた少女が鎌を振り回して、保護者と一緒に追いかけて来た。

「返して!!!私のジュエルシードを返してよおおおおお」

「こんなことして逃がすとも思っているのかい」

そして、積年の恨みを晴らすかのように女刑事の声が響く

「今日こそ逮捕よおおお坂本おおおおおお」

そうして始まったリアル鬼ごっこ。

今回俺は悪いことしていないのに・・・

ほろりと頬に涙が伝う。

一体俺の何がいけなかつたんだろう？

第11話

あれから何とか女刑事を振り切ることは出来た。
しかし

「やあああああああああああああ」

フェイトは泣きながらビームシザースを振り回したり、ビームつばい何かを飛ばして来る。

それを俺はリサを抱っこしながらも何とか回避する。
どうやって見ないで回避しているかって？

かの有名なアムロは一年戦争時背後からの攻撃も避けたという、ならば俺にだって出来るハズ!!!!
って実は全部嘘です。全弾直撃・ビームシザースでもザックリ切られて案外痛いです。

今じゃあ上半身の服は背中だけ無くなっています。
全く大した嬢ちゃんだ。

「クッ振り切れねえ一体どうなってんだ？アレか？リサが重いのか？」

「女の子に向かって重いか失礼な事言わないでくれるかしら!!!それに振り切れないのはフェイトって子がすごい速さで飛んでいるからよ。まさか、銀次みたいなびつくり人間が居るとわ思わなかったわ。ってまた構えだしたわよ!!!」

「アークセイバー」

『Arc Saber』

一体全体どういう原理なのか分らないが、フェイトがビームシザースを振ると光刃が三日月を描いて回転して飛んで来た。

しかし、甘い俺にいや、俺たちにそれは当たらないぜ。

「銀次2秒後に一旦止まりなさい」

「あいーよつと!!!」

光刃は俺をすり抜けて飛んでいった

想像するならワンピースのゾロが刀をブン投げて落下するところに腕を出したシーンを思い出して頂きたい。

「っ!？」

それを見て息を呑む声が聞こえた。

「まだ終わってない。フォトンランサー」

『Photon Lancer』

しかし、気を取り戻したのか弾幕を展開し始めた。

「ええい、弾幕多いよ。ふぎけんなし……って今ビリツと来たよ!?!?何これ!?!ガード不能の電刃波動拳かよ!?!」

「銀次……当たっても痛そうにしないけど、あなた痛覚ってあるの?」

「ちゃんとありま……」

その時ふと横道を見て、見てはいけない物を見てしまった。

全身から汗が吹き出る。本能が告げる。

逃げろと

「どうしたの。銀次?」

「マジかよ!?!ふぎけんなし、シヤレにならないぜ。ひき子さんなんて……冗談じゃねーぞ!?!」

「ひき子さん?何それ!?!」

「都市伝説に出てくる幽霊で気に入った子供を引きずり回して殺す性質の悪い悪霊だ。ちなみに逃げ切った奴はいないらしいぜ。」

俺の説明を受けてリサの表情から血の気が引き青くなった。

その時だった。

横道からひき子さんが飛び出してきた。

その容姿はひどく、長い腰まで届く髪は手入れが入っていないためボサボサで、着ている白いワンピースは汚れており、裾はボロボロでそして右足を引きずっていた。

そして、何より酷いのはその醜悪な顔である。

生前男子生徒に引きづられたためか、顔中傷だらけである。

「間違いねえあれは本物だ。」

丁度今現在の立ち位置は俺とフェイトの間にひき子さんがいる状態。

チラリとフェイトの方を見るとがたがた震えていた。

しかし、保護者のオレンジ髪はまるでひき子さんが見えていないの

か俺の方に駆け寄ってきた。

フェイトが声を掛けるよりも速く、保護者はひき子さんを通り過ぎて俺に殴りかかってきた。

「さっきの借りだよ。くたばりな」

俺はひき子さんから目を離せない。離す訳には行かない。だからリサを脇に抱えなおして拳を額で受け止めた。

それと同時にひき子さんが動き出した。

それもフェイトの方に……

「あつあああいやああああアルフ助けてえええ」

フェイトがそう叫んだ時ひき子さんは脅威的なスピードで移動しており、アルフが振り返った時フェイトはうつぶせに倒れていた。

「え!? フェイトどうしたのさ!?」

やつぱりアルフにはひき子さんの姿は見えていない。

だから次に何が起こるかわかっていない。

ひき子さんがフェイトの足を掴もうとして要るのをアルフは見ることが出来ない。

まずい、このままだとフェイトが引きずり殺される。

リサを抱えている手前鉄山靠を打つことは出来ない。

それ以前に奴に背中を向けたくない。

そのときリサが震えながらも俺に声をかける

「私の事なら大丈夫銀次あのフェイトって子を助けてあげて」

「スーパー任せろ!!!」

その言葉を聞いて俺はリサを地面に降ろし、俺は全力で駆ける。

ひき子さんがフェイトの足を掴み走りだす。

「え!? どうなってんだい!?」

アルフからしたら異様な光景だった。

何せフェイトがものすごい速さで地面を引きづられている。

異常な事態になってもアルフは動くことが出来ない。

「痛い、痛い、痛いああああああ誰かタス、たすけてえーえーえーアルフーえーえーえー」

しかし、フェイトを掴んでいるため先ほどのような驚異的なスピー

ドは出ていない。

だからこそ俺は一瞬で追いつき、ひき子さんの後頭部に全力のローリングソバットを叩き入れた。

俺の蹴りは初速300k/m。コンクリの壁をぶち抜くことすらたやすい。

そんな蹴りを受ければ常人なら一撃で殺せる。

結果ひき子さんはフェイトを掴んでいた足を離し、優に100mほど吹っ飛んだ。

「うっうう、ひっぐ、痛いよう」

短い距離だったとはいえ、フェイトはうつぶせに引きずられて為その顔は若干だが抉れていた。

「これを食べる。痛みも傷もすぐに治るぞ。」

俺はフェイトに仙豆を渡した。

フェイトはそれを聞くと疑いも無く口に放り込み咀嚼し、飲み込んだ。

するとフェイトの顔は傷の無い元通りの美少女に戻った。

それと同時にひき子さんも立ち上がった。

ひき子さんは立ち上がると同時に俺に指を指した。

その表情は怒りに染まっていた。

「二丁前に切れてんじやねーぞ悪霊風情が!!!!ぶっ殺してやるからかかって来やがれ」

親指で首を搔っ切る動作をし、オーラを開放する。

その途端ひき子さんは俺の目の前から消えた。

しかし、俺は慌てることなく後ろを振り向く。

そこには腕を振りかぶるひき子さんがいた。

俺は振り下ろされた腕を防ぐ為に掴んだ。

「なめてんじやねーぞ。その程度の力で俺をどうにか出来ると思うなよ」

メキメキ、ベキン

その細い腕を俺は骨ごと握り潰した。

「~~~~~!!?」

声にならない声を上げるひき子さん

しかし、たかが腕を握り潰した位じゃあひき子さん相手じゃあ安心することは出来ない。

「なあ〜この腕で一体何人引きずり殺したんだお前は？そんなオイタをする腕は必要か？いや要らないだろう？だから持つていくぜ。」

俺の言葉の意味が理解できたのかひき子さんは奇声を上げて、空いている方の腕を振り回すも俺はそれすらも捕まえる。

そして、その後俺は足でひき子さんの腹を抑えて、力任せに両腕を引っこ抜いた。

引き抜かれた腕からはひき子さんの血が噴出し、周りに飛び散る。支えを失ったひき子さんは仰向けに地面に倒れる。

「さて、もう終わりにしよう最後に俺の震脚を冥土の土産にくれてやる。」

俺は右足でひき子さんの頭を踏みつけてオーラを足に溜めて一気に開放した。

その瞬間ひき子さんは消えてなくなり、代わりに青い菱形の石ジュエルシードと五つに割れたDVDが現れた。」

「全く種が分ればこんな物か、びびって損したぜ。」

後ろを振り返ると

いまだに事態を認識出来ないアルフと顔を真っ赤に染めてこっち見るフェイトと背中を向けて走り出しているリサがいた。

一体なんのこっちやと考えていると俺の手からガチャって音が聞こえた。

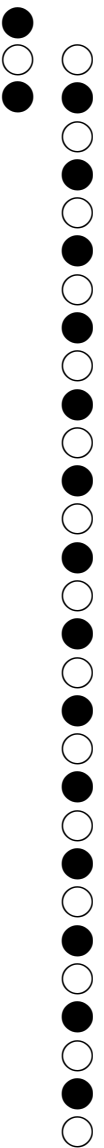
後ろを振り返るとそこには満面の笑みの女刑事がそこ居にいた。

「坂本ようやく捕まえたよ。さあ僕と一緒に署までデートだ♡」

顔を正面に戻すとフェイトとアルフは既にいなかった。

「・・・泣けるぜ」

俺の声はこの憎たらしい澄み渡る青空に響くことは無かった。



まさか、9歳児で牢屋にぶち込まれるとは思いませんでした。
それも2週間だぜ。2週間!!!
信じられないぜ。

それも内容が榎原動物病院をぶつ壊したのは坂本君だね？

被害届出てるから、損害賠償もろもろうんぬんかんぬんって……
ひどくね!!!

確かにこの海鳴市でいろいろやんちゃはしてきたけど（主に廃ビル
ぶつ壊したり、道路破壊、拳銃に倉庫破壊）

よくよく考えれば疑われても仕方ない事この上ないですね。本当
にありがとうございます。

てな訳で牢屋に入っていました。

そして、今現在いつの間に俺の身元引受人になったのか高町家（な
のはを除く）全員と月村家がやってきた。

まあ、なんにせよここから出られると思いきや浮かれていたら女刑
事……リステイって言うんだけど

「君は僕を置いて行くのかい？」

その瞬間すずかから睨まれてしまった。

「え、ああ、そうですね。ではさようなら」

「そつか。でも僕は警察だから、君の事をいつでも見てるからね。」

おい、マジふざげけんなし、警察関係ねーじゃん!!!

それただのストーリーカーじゃん!?

それを本人に言ったら名誉棄損で訴えられかねないので飲み込ん
だ俺はマジで偉いと思う。

そんなこんなで帰り道

ぷくうと頬をリスみたいに膨らませるすずかがいた。

俺とリステイの会話がどうやら気に入らなかつたらしい。

まあ気に入られても困るけどな。

膨らませてる頬を面白がって突っついていたら、今度は美由紀さん
が後ろから抱き着いてきた。

それを見たすずかが腰の入った腹パンをしてきた。それは全体重

を乗せたと思われるアルフの顔面パンチより痛かったと記しておこう。

そして殴られた腹を美由紀さんがさすり始めたんだが、次第に手つきが怪しくなり気がついたら服の中に入って腹じゃないところまで色々してきた。

さすがに公共の場でそんなことされたらいくら俺でも恥ずかしい。だから耳まで真っ赤にして美由紀さんに辞めるようお願いしたら、顔面に思いつきり鼻血をかけられた。

しかも上を見ていたから目にも入った。あまりにも（目が）辛いので美由紀さんから脱出した。

さすがの桃子さんも「あらあら、まあまあ」ではなく「美由紀後でお話よ」と言っていた。

その表情を見た土郎さんががたがた震えているが、知り合いとはいえ余所の家の家庭環境に首を突っ込むのいけないのでスルーした。

その後は恭也さんに手を繋いでもらい家に帰ることが出来た。なんだか最近全く良いことが無いが人生そんなもんだ。

速く目を洗いたいがために洗面所に言ったら、浴室からシャワーの音が聞こえた。

クツ見えぬこの銀次の目を持ってしても見えぬのか

そんなふざけたことを考えていたのが運のつき

浴室がガララと開いたと思ったらずか腹パンされたところに妙にでかい衝撃を受けた。

不意打ち十目が見えない事もあり、倒されてしまった。その拍子にドアの角に頭をゴンツとぶつけたようで意識が遠のいている。

薄れ行く意識の中思ったことは唯一つ俺は目を洗いたかっただけなのに……

第12話

目を覚ますと俺は洗面所で倒れていた。

目の前には心配そうにこちらを覗き込んで見るリサの姿

タンクトップにミニスカートとラフな格好とは……けしからん、実にけしからん

「なありサ……真理ってどこにあるんだろうな？」

「少なくとも私のスカートの中には無いわね。」

「確かに……しかし、ここには桃源郷があった」

「そんなことはどうでも良いから、速く頭をスカートから出しなさい
!!!」

リサがそういうから俺はしぶしぶ出すことにした。

そんな様子をリサは顔を真っ赤にして見ていた。

「ところで、リサ俺が居なかった2週間の間で何か変わった事は無かったか？」

「それなら……今この家にフェイトとアルフが居るわよ。」

「なんで？」

「なんか銀次に聞きたいことが有るみたいよ。今は二階の部屋に居るんじゃないかしら？」

「聞きたいことがなんなのか分らんが、二階に居ることはわかった。」

そんな訳で坂本家の二階に今上がってます。

「フェイトさんやーいらっしやいますかいなー」

俺が声を出すと部屋の扉が開きそこからフェイトが首だけ出した

「あ、銀次お邪魔しています。」

あら、やだ、かわいいいわ、見てください。奥さん家のフェイトはこんなにかわいいんですよ。

それに比べてリサは……俺より先に勝手に家の中に入るし、ウオツシュレットにびっくりして水浸しにするし、ポルターガイストを証明するために電話をリンリンならすわ、俺を置いて一人で逃亡するとか……フェイトの爪の垢を煎じて飲まして遣りたい気分ですよ。

「銀次今変な事考えてないでしょうね？」

ジトつとした目でこっちを見ないで頂きたい。

「全く初心なねんねじゃあるめーし、経験者なんだから気にするなよ」
俺がそういった瞬間頭をスパンつと叩かれた。

「全くリサが絡むと話が進まないな。とりあえず玉露の梅昆布茶でも
飲みつつ話そうぜフェイト」

「あ、ハイ、分りました。」

うむ、素直な少女はかわいい

フェイトの話の内容は至って簡単だった。

・ジュエルシードが欲しい

・力が欲しい

・だから銀次手伝って

「まージュエルシードは・・・がんばって集めれば良いんじゃない？俺
のはあげないけどさあ。」

そう言った瞬間フェイトの目に涙が溜まってウルウルし始めた。

「銀次の所為でアルフの両手が折れているんだよ!!!」

「いや、俺は無抵抗で殴られた訳なんだが・・・」

「こんなにかわいい女の子があんたみたいなか中二病頼ってきているん
だから手ぐらい貸して遣りなさいよ。」

「まさか、リサがそんな事を言うとは思わなかった。しようがないな
じゃあ手を貸してやる。じゃあ早速だが、ジュエルシードの場所を”
こつくりさん”で調べよう」

「こつくりさん!?!」

「まー説明するのはめんどくさいから黙って見てろ」

俺はそれだけ言うとA3の用紙を取り出して、心を籠めて、オーラ
を果てしなく籠めて、書き始めた。

まずは鳥居のマークと左に男、右に女その下に行からワ行を書い
た。

そして準備が完了したときに俺はある物が無いことに気がついた。

「あ、やっべー五円玉が無いんだった。リサ持ってる?」

「つい最近まで幽霊だった私が持っているはず無いでしょ」

「だよなくフェイトは？」

「私は・・・これしかない」

フェイトはそういうと猫が書かれたかわいらしいピンクのお財布から野口英世を十枚、福沢諭吉先生を六十枚・・・間の樋口一葉さんどこにいったし？

「これだけって・・・9歳児が持つ金額じゃないわね!？」

「しかし、三人そろって札が有っても小銭が無いつてすごい状況だな。仕方ないリサ福沢先生を一枚渡すからなんか買ってきてくれ。」

「なんで私なの？」

「お前自分の容姿見たこと無いのか？今この中じゃあ見た目最年長だからに決まっているだろう。」

「ならアルフが居るじゃない!？」

リサの発言に今まで空気だったアルフにみんな視線を向けるが、銀次はため息をついて答えた

「リサ・・・犬に何を期待してんだよ!？」

銀次の呟きにアルフが吼えた

「ああん!?!私は犬じゃな・・・きやいん犬です。だから睨まないでくれよ」

が、銀次の目力にびびったアルフは犬であることを認めた。

「銀次アルフをいじめないで」

「ふえ、ふえいとお〜」

フェイトがそういうと感極まったのか、フェイトに抱きつくアルフ「という訳で速く買って来て。あとついでにコーラも頼んだ3Lのペットボトルで、あとは油揚げもよろ〜」

「どういう訳か分らないけど今行って来るわよ。」

そして、十分後

コンビニから戻ってきたリサを交えて“こっくりさん”をはじめた。

五円玉に指を乗せているのは銀次一人その左右にリサとフェイトがいる。

アルフは興味が無いのか座布団の上で寝ている。

銀次は何が起きてもいい様にオーラを目に集めていた

「じゃあはじめませ。こつくりさんこつくりさん来てください」

銀次がそういうと五円玉に指が置かれた。

無論その指はフェイトのもりサのでも増してやアルフのでも無い。
い。

銀次が不思議に思い顔を上げるとそこには……

金髪で狐耳を生やした着物をきた美少女が居た!!!!!!

「クーーーーー♪」

いや、そこまでばっちり現れていて鳴き声がクーーーー

「なあ何か聞こえなかったか?」

確認のため聞いてみるも

「私は聞こえてないです。」

「聞こえてないわよ」

フェイトとリサは聞こえていないと答えた。

「そ、そうか分った。えつと、こつくりさんこつくりさんいらつしやいましたら、”はい”とお答えください」

「クーーーーー♪」

狐耳美少女はなんだか嬉しそうに鳴き声をあげて五円玉を”はい”に動かした。

「銀次あんたふざけているわけじゃないわよね?」

「死んで生き返ったりリサには言われたくないな。じゃあこつくりさんジュエルシードが欲しいんだけどどこに行けば手に入りますか?」

「クーーーー?」

いや、首を傾げられても困るんだが、まーかわいいから良いんだけどね。

そう思っていたら五円玉が動いた。

「えつと、み……ら……ら……い……の……み……つ……ど……ち……ち……る……だ……?……み……ら……い……の……み……つ……ど……ち……る……だ……?……なんぞそれ?……フェイト分るか?……俺にはわからん」

「え?えつと、私もそんな地名聞いたこと無い」

「たぶん意味は未来のミッドチルダなんじゃない？」「っ」はちいさいのは無いんだし」

その瞬間狐娘はぴよんぴよん飛び跳ねた。どうやら正解のようだ。……しかし未来に行くにはそれこそドラえもんでも呼んでタイムマシンでも貸してもらおうぐらいしか方法は思いつかない。

俺がそう思っていたら狐娘が座禅を組んで鳴きはじめた。

「クウウウー……」

その瞬間俺とフェイトとリサは光に包まれた。

気がつくと俺たちは森の中にいた。

左右を見ると啞然としているフェイトとリサ

俺の正面にはドヤ顔の狐娘

「ねえ、銀次……この美少女だれ？」

リサが声を出す。フェイトの方を見ると俺に疑問を視線で訴えていた。

「ごつくりさん「ちがう、私は天弧」だ……そうです。」

「あの……その天弧さんが何故ここにいらっしやいますか？」

リサの疑問はもつともだ。隣でぷしゅーと煙を出しているフェイトとは大違い

「それは否事を聞くのお娘よ。そこにいる銀次という小僧の降霊術に呼ばれたから答えたのじゃ」

リサはぼつと俺の方を見る。心とオーラをどうやら籠めすぎたのが原因だったとは……

「ふっふっふ、それにしてもこんなかわいらしい益荒男がいるとは。長年生きてみるものじゃ……どうじゃ銀次わらわの物にならぬかえ？・さすれば望むものを与えてやろうぞ」

「え!? あ、いやー天弧さん今現在望みは無いからまた今度でお願いね。ところでここはどこなのよ？」

「ふむ、欲が無いとは……これもまたいじらしいのう。で、場所であったのう。ここは……未来のみつどちるだじゃ」

天弧さんがそう告げたとき空から声が聞こえた。

「時空管理局機動六課フェイト・T・ハラオウン執務官です。事情を聴きたいので・・・すがってちっちゃい時の私がいるーーーーー!!!」

なるほど、このフェイトは成長するとあの姿になるのか・・・光る源氏の物語りを計画しないといけないな。

不自然なほどにや着いていたらリサがこつちを見てきた。

その顔にはまゝくた変な事を考えてるの!?! って視線で訴えてきたので、首を立てに振ったらその直後にそれは見事な胴回し回転蹴りが顔面に命中した。

薄れ行く意識の中最後に見た光景はリサの桃源郷は黒だった事が理解できた。

第13話

目が覚めるとそこは森の中

辺りを見渡すとリサに大きいフェイトとちっちゃいフェイトとお揚げに齧り付いている天弧さんが居ました。

客観的に考えると俺以外全員金髪。

そんなふざけた事を考えていると俺のお腹からぐうぐうって音が鳴り響いた。

考えて見て欲しい。

朝家に帰って気絶して、こっくりさんやって未来に来たと思ったら再度気絶。この間俺が口にしたのはコーラのみ。そりゃ腹も減るっちゅうねん。

しかし、ここは地球ではない。

地球にミッドチルダなんていう地名は無い……と思う。仮に有ったとしても其処では福沢先生の権威が届くはずが無い!!

だから、俺は考えた。

金が無ければ、有る人に使わせれば良い!!!

「なあフェイトさんやおいどん腹が減ったでござす。詳しい話は食べながらでもかまわんじやろ?」

「え?ええ、分かりました。」

一瞬きよとした顔をしたが、笑顔で了承した辺り大人フェイトさんの人間力はかなり高いと見た。

ちなみにリサもお腹が減っていたらしくなんだかあくどい顔していた。

ちっちゃいフェイトはいまだに混乱している。

まあー9歳児じゃあ空気を読めなんて酷な事だから仕方が無い。

「じゃあ、みんな飛んでいくよ」

「分かりました。」

ダブルフェイトはそういうと飛び上がり駆けたので慌てて声を掛けた。

「あのく俺とリサは飛べませんよ。」

「え？」

「え？」

何故二人は不思議そうに俺を見るんだ？

まあ、結局はリサは大人フェイトさんに抱えられており、天弧は子狐になってリサの服の中に入っていた。俺はちっちゃいフェイトの背中の上で仁王立ち。

気分はエウレカセブン。

ただ、二人とも負けず嫌いなのか突然スピードレースが始まりマツハ555もびつくりの音速越えを披露し始めた。

リサは大人フェイトに抱えられているから大丈夫かもしれないけど・・・俺は捕まっている訳じゃないので風圧が半端じゃない!!!
例えるなら安全装置がぶっ壊れえたジェットコースターに乗っている気分だ。

横を見ると天弧はぐったりしており、リサは白目剥いて気絶している。

大人フェイトさんはその様子に気がついておらず、俺の方を見て手を振ってきた。

その行為がちっちゃいフェイトの勘に障ったらしくさらにスピードアップした。

「oooooooooooooooooooo、スピーoooooooooooooooooooo
oooooooooooooooooooo あげ る ん じや
ねoooooooooooooooooooo。こっちは死ぬほど寒いん
じoooooooooooooooooooo」

しかし、俺の魂の叫び声はこのポンコツフェイトには聞こえることは無かった。

その時俺が思った事はちっちゃいフェイトは後でめる。大きい方は財布空っぽにしてやる。

其処から都市に着くまで時間にして5分は掛からなかったが、俺に取っては気が狂うほど長く感じた5分であった。

ようやく着いた場所はレストラン

席はドアに近いボックス席

さて、メニュー見れば何ぞこれ？

「なありサこれ読めるか？」

「いえ、私にも分らないわ。ちっちゃいフェイトは読める？」

「はい、読めますよ（ドヤア）」

なんでドヤ顔しているんだこいつ？

その様子を見ていた大人フェイトはその光景を微笑ましく見ている。

「（銀次文字が分らないんじゃ頼みようが無いわよどうする気？）」

「（俺に任せろ）」

「じゃあみんな決まったかな？」

「ああ、俺とリサは大丈夫だ。」

「私も大丈夫です。」

「じゃあ店員さん呼ぶね」

大人フェイトさんはそういうとコールボタンを押した。

「お待たせ致しました。ご注文はなんでしょうか？」

「じゃあカルボナーラとアイステイーでお願いします。」

「すみません私もそれをお願いします。」

「はい、カルボナーラとアイステイーが二つですね。」

ダブルフェイトは同じものを頼む。

「じゃあ俺とリサは上から高いもの五品お願いします。」

「え!?!上から高いもの五品ですね。それも二つですね。かしこまりました。」

店員は若干動揺していたが問題は無いだろう。

問題があるとすれば今日の前の大人フェイトさんがなんかもぞもぞ動いていることぐらいだ。

そして、注文が届き食べは始めた瞬間に大人フェイトさんの顔色が青くなり、冷や汗を大量に流し始めた。

「あのくどうかしたんですか？大人フェイトさん？」
リサが気になって声を掛けたら大人フェイトさんは突然泣き始めた。

「ううくお財布持ってくるの忘れちゃった」

指を咥えて言えば許されると思うなよ!!!

「はああつてめ何ふざけた事言ってるんだよ。お会計どうする気だよ!!」

「ううわ、私だつてこんなはずじゃなかったんだよ。だから怒らないですよ。怒っている銀次君なんか嫌い」

そういうと大人フェイトさんは両手で顔を隠して泣き始めてしまった。

その横では我冠せずと食べ続けるちっちゃいフェイトがいた。

「モグ、モグ、カルボナーラ美味しいです。」

「今その感想はいらんがな・・・」

20分後

「ではお皿おさげしますねー」

「」「はあ」「」

「で、どうするんだよ。お会計よお」

「ううう。お金がありましたえんって謝るしか・・・」

「いまさらそんなことで通るわけ無いでしょ!!!!」

うくん考える俺たち4人

「あ、考えが浮かびました。」

「なんだ？ちっちゃいフェイト言ってみろ」

「あのですね。向かい側にこっちの事をじっと見ている男性の方がいらつしゃいます。」

「なるほど、つまりそいつを凹つて金を巻き上げると・・・なかなか俺好みの案じゃねーか!!良し俺に任せろ」

「待ちなさい銀次」

俺はそういつて立ち上がり向かおうとしたらリサが俺の腕を掴ん

だ。

「おい、リサいまさら止めろなんて言わねーだろうな?」

「言わないわ!! ああいう奴等は徹底的に殺りなさい。金を払わねーなんて言い出したら腕の一本でも折りなさい」

リサの凄みに俺は返事を返すことしか出来なかった。

ただ、その話を聴いていた大人フェイトさんは俺を止めようとしていたが、リサによって動きを止められていた。

そんなときである。

突然窓ガラスが割れ覆面を着けた3人の男たちが店内に入ってきた。

三人の覆面の男たちは杖を構えて叫びだす。

「動くなあー！ー動いたら全員皆殺しにしてやんぜええ」

「死にたくなければ今すぐ地面に伏せているんだなあー！ー」

「ヒヤッハ！ー！ー金だ！ー！ー」

三人の男たちはまさしく強盗だった。

しかし、今日このとき彼らは運が悪かった。

レストランの中には管理局の死神と怪物がいた事が敗因である。

数分後そこにはボツコボコにされてさらに嚴重にバンドまでされている三人の強盗がいた。

「ありがとうございます。フェイト執務官」

「いえいえ、これも仕事ですから、では私たちは彼等を管理局に連れて行きますので失礼します。」

レストランの店長・店員共々大人フェイトにお礼を言い、大人フェイト達は冷や汗流しつつもレストランを脱出することに成功した。

そのあと、無事に管理局にたどり着いた。

其処には青筋を浮かべている狸となのはちゃんが大人になったような感じの人がデバイスを構えていた。

第14話

青筋浮かべてる女性二人に大人フェイトさんが最初に言った言葉

「銀次ってめっちゃめっちゃ強いんだよはやて!!!」

子狸……もといはやてと呼ばれた女性は頭を抑えながら答える。

「あんなあくフェイトちゃん色々言いたいこと有るねんけどこれだけは言わしてくれへんか？後でなのはちやんとOHANASHIしてもらうからな覚悟しとき!!!」

「ええ!？」

はやての言葉にお先真っ暗になった大人フェイト

「(大人の威厳がまるつきり無いな)え、俺が坂本銀次で見た目こんなんだけど年上だからよろしく。でこつちの大きい金髪はアリサ・ローウエル。で、ちっちゃい方がフェイトだ。」

「アリサ・ローウエルです。私も見た目こんなんだけど年上ですから」
「ふえ、フェイト・テストアロツサ9歳です。ジュエルシードが欲しいです」

「わっちは天弧じゃ。年齢は……1000から先は覚えとらん。とりあえずお揚げを所望する!!!」

4人とも個性溢れる自己紹介に高町なのは19歳は混乱を隠せなかった。

「ふええええどうしようはやてちゃん意味が分らないよ。」

「とりあえずなのはちゃん落ち着くんや。えーつと銀次君言うたな。とりあえず詳しい事は中でゆっくり聞かせてくれる?」

「俺は口下手だからリサに聞いてくれ」

「ほなりサちゃんお願いなあ」

「ええ、分りました」

そして、管理局というか機動六課と書かれた隊舎を案内され、今現在俺は訓練室に放り込まれている。

「じゃあ銀次君私たちに君の強さを見せて欲しいんや、シャーリーとりあえずガジェット20体で模擬戦闘レベルマックスや」

「え!? マックスですか!? 部隊長達もかなりきついですよ? それをあんな子供がクリアできるとは思えませんよ。」

「大丈夫や、フェイトちゃんやんが銀次はめっちゃめっちゃ強い言うてたから問題無しや!!!」

「どうなつても知りませんからね。」

「という訳で銀次君準備はええか?」

「話の流れに着いていけません」

「トキが言つてたで激流に身を任せるんやという訳で始め」

はやてがそういうと目の前にガジェットと呼ばれた機械が20体現れた。

俺はガジェットが動き出す前に群れの中心に飛び込んだ。

「なんやあのスピードにジャンプ力はもはや人間やあらへん。チートやん!!!」という声が聞こえたが、お楽しみはこれからだぜ。

俺は着地し、その場で土俵入り(レゾナンスクエイク)を全力で行つた。

俺が大地を踏みしめるたび、俺を中心に全てのガジェットが地面に埋まる。

それを唾然と見ていたなのはがりサに聞く

「りサちゃんあれって何かな?」

「本人曰く震脚らしいけど・・・今のは間違いなく63代目横綱の土俵入りの真似ね。」

「なんで土俵入りで地震が起きるんや!? おかしいやろ!!!」

「土俵入りとは武器を隠し持ったりしない、そのような卑劣な行為をしてはいないと誓う為に行ったもの。そして昔は神に祈る儀式でもあったのよ。地震を起こすことなどたやすいわ!!」

「その理屈はおかしいわ!!!」

鼻息を荒げるりサにはやてのツツコミを入れるが、ところがどっこいこれが現実

銀次の土俵入りにより全てのガジェットが破壊された。

魔法ですら科学で解明されたこの世界に新たな謎が生まれた瞬間であった。

「アカン。アカンでこんなんおかしいやろ。」

目の前の光景を信じられないはやては頭を振って否定する。

「ならば主はやて私が入って確かめてきましょうか?」

そう言ったのはピンクの髪に人目を惹きつけるおっぱいの持ち主

「ほなシグナム頼んだで」

「承知」

しかし、その様子を黙って見ている事が出来ない人物がいた。

「ずるい、ずるいよ。はやて私だって銀次と戦いたい!!!」

もはや大人の威厳が無くなったフェイトさんがシグナムを睨み付けながらはやてに言う

「……じゃあシグナムの後でええか」

「やだ、先に戦う」

フェイトさんは涙目でそういうとはやてはやれやれという感じで……

「……と、言うわけで銀次君2対1やけどかまへんよな? 男の子やし」

「どうせ俺が勝つんだから構わないよ」

「フェイトちゃんシグナムぜつつつたいに勝つんやよ。」

「承知しました。主はやて」

「うん、やるからには勝たないとね」

はやての言葉を受けやる気満タンのシグナムとフェイトさん

「じゃあ試合始め」

はやての声が訓練室に響き渡り試合が始まった。

試合開始と同時にフェイトさんが牽制で魔力弾を放つ。

それをバックステップで避けると正面からシグナムが突っ込んで剣を振り下ろしてきた。

スピードはフェイトさんよりは遅いが、たぶん避けると思われている。なのであえて自分から前に出てシグナムの振り落とそうとしている剣の手元を掴んで、蹴る。

「な!?!ガハア」

蹴りの反動を利用してバク転すれば丁度俺が居た位置をフェイトさんが鎌でなぎ払っていた。

そのままオーバーヘッドキックを敢行するも、フェイトさんは一瞬でその場から消えてしまった。

「ハアアア」

シグナムの声が聞こえたと思ったら背中に痛みが走る。

痛み能耐えつつも何とか着地し、顔を上げると黄色の魔法弾が目の前にあり、当然避ける事が出来ないで顔面に直撃し吹き飛んだ。

「ちい連携がこうも厄介だとは思わなかったぜ。」

思わず愚痴もこぼした俺を見て啞然とするフェイトさんとシグナム

「・・・手応えはあったのだがな」

「うん、私のフォトランサーも顔面に直撃したのにまるで効いてないみたい」

「ならば、私が時間を稼ぐからフェイトはその間に大技の準備をして置け」

「分った任せて」

シグナムはそういうと全力で銀次に向かっていき、フェイトは大技に準備に入る。

銀次もやられてばかりではなくシグナムを迎え打とうとするも、思った以上にシグナムのスピード、技量が高く鉄山靠を放つ隙が全く無かった。

「どうした銀次避けてばかりでは私には勝てないぞ。」

シグナムの剣は銀次を追い詰める。

一刀だけと思ったら、鞘を使用の二刀流。そして時には蹴りも飛んでくる。

そして距離を離すと鞭のようにしなる蛇腹剣と相性が非常に悪かった。

それを地面に転がりながらも全て避けきる銀次。

だが、相手はシグナム一人ではない

後ろで観察していたフェイトが銀次が立ち上がった瞬間に拘束魔

法が掛けられた。

「なんじゃこりゃ!!!動けねえ」

必死に逃げ出そうとするも身動き一つ取ることが出来ない。

そんな中銀次の耳にそれは聞こえた。

「:アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きの下撃ちかかれ:」

それは金色の死神の歌

バルエル・ザルエル・ブラウゼル:——フォトンランサー・フアラ
ンクスシフト。撃ち砕け! ファイア!!」

発せられた号令。

その刹那、彼女の周囲に浮かぶ魔力スファイアから斉射される、フォ
トンランサーの弾幕。

計三十八基の魔力スファイアから射出されるフォトンランサーは、毎
秒七発。

持続時間4秒の間に斉射される魔弾の数は、合計一〇六四発にも達
する。

それは、最早攻城兵器と言っても差し支えないレベルの代物。

間違つても個人に向ける威力ではない、明らかなオーバーキルだ。

降り注ぐ金色の魔弾が轟音が大気を震わせ、爆炎と煙が銀次を包み
込む。

だが、それだけでは終わらない。

フェイトさんが打ち終わると同時にシグナムが必殺の一撃を放つ

「行くぞ、紫電・・・一閃!!?」

その一撃は銀次を後方に吹き飛ばし、壁にめり込む。

その光景は誰が見てもフェイトさん・シグナムペアの圧倒的勝利!!!

疑うことなど出来ないまさに完勝。

しかし、フェイトさんとシグナムは警戒を解くことができなかつ
た。

銀次はめり込んだ壁から自分の力が出る。

二人の必殺の魔法を受けて上半身の服が燃えてなくなり、そこには
無数の傷跡が見える。

フェイトの魔法でもシグナムの一撃で出来たものではない、それはまさしく自身で刻んだ修行の痕

「(やっべー自分の中を駆け巡る血液が沸騰するように熱く感じる。体中の細胞がざわめいて……力がみなぎってキターーーー。声、出さずには入れられない!!!)」

「がああああああああああああああああああああ」

腹の底から声を上げる銀次は目の前の二人を見据える。

「さっきまでの俺とは違う。いくぜ」エアマスター」

それに反応が出来たのはシグナムだった。

「ふつだが、まだ甘い!!!」

シグナムは銀次が間合いに入った瞬間に逆袈裟切りを仕掛けたが、それを銀次は剣を右足で踏んで防ぎローリングソバットを行うも、シグナムは上体を反らして避けるが……

「甘いのおんただ」

「ガハア」

まさか2撃目の蹴りが来るとは思わず、顔面を思いつき蹴られる。

だが、銀次のターンはまだ終わらない。

「これでフェニツシュだ」

今度は左足でシグナムの頭を蹴り上げる。

さすがのシグナムも予測できなかった銀次の蹴りを二度も受けた為ダウンした。

それを見ていたフェイトさんに見たら銀次が空中でクルクル回ったらシグナムが仰向けでダウンした。

一体何が起こったのかさっぱりわからなかったが、一つだけ分かったことがあった。

今日の前で足を大きく振りかぶっている銀次が居ること

回避が間に合わないため、プロテクションを発動するものの、MAXスピード300キロオーバーの銀次の蹴りはいともたやすくプロテクションを破壊しその日初めてフェイトさんは魔法以外で空を飛んだ。

怪我が打撲程度で済んだのは奇跡ですよとは白衣を着た金髪の女性
性が言ったとか

こうして、模擬戦は銀次の勝利で終了したが、終ってみれば訓練室
がえらい事になっておりシャーリーとはやての胃に多大なダメージ
を与えていることに銀次は気がつかなかった。

第15話

「それにしてもほんま銀次君怪物やな。リミッター付けているとはいえ、百戦錬磨のシグナムとフェイトちゃんに勝つてまうとは思ってもせなかつたで、ところでシャーリー銀次君のデータは取れた？」

はやてがそう尋ねてシャーリーの顔を見るとその表情は引き攣っていた。

「ええ、取れたは取れたんですが・・・」

「なんや歯切れが悪いけどどないしたんや？」

「私は彼が“人間”なのか信じられません。これならまだ戦闘機人つて言われた方が現実味が有ります。」

シャーリーが取った坂本銀次の身体能力の元となる部分それは全身の骨である。

スキャンした結果頭蓋骨すら異常な硬さ誇る骨。

骨は例外なくどの場所にも折れた痕が残っていたが全て治っていた。

次に彼の筋肉。これも考えられない程の高密度を誇っている。

しかし、彼の全身に刻まれたおびただしい程の傷を調べると不可解な点が出てくる。

その傷は外側からではなく内側から出来ている。

そうなると坂本銀次が動ける事がおかしいのだ。

筋や腱の断裂などけして治る事が無いものが、傷跡だけを残して治っている。

もしかしたら彼にはレアスキルがあるのかと一瞬考えたが、彼には魔力が無いためすぐさま否定する。

だからシャーリーは困惑する。

あらゆるデータが坂本銀次は人間であると示しているが、あらゆる事実がそれらを否定する。

ただの人でありながら魔導師を圧倒する戦闘能力。

常軌を逸した耐久力。

「何者なんやろうな銀次君は・・・」

はやてとシャーリーは眠気に耐えつつも手を忙しく動かしていた。

そんな事を話しているとは全く考えていない銀次は水が入ったコップを掴んでいた。

その様子をリサはため息を着きながら見ていた。

「同調？一体コップの水とどうすれば同調できるか理解できんぞコレ？」

「もう諦めたら？別段発勁が使えなくとも念能力が使えるなら問題無いじゃない。」

「問題大有りだバカヤロー!!鉄山靠使いが発勁使えないとか間違いなくプギヤーもんですよ。」

「そもそも模擬戦中に一回も鉄山靠使えてなかったから私が言ってるわよ。プギヤーコレで満足？」

「いざ言われるとむかつく」

「そういうものよ。ところで銀次はなんで強くなろうとしているの？」

「良くぞ聞いてくれた!!!この坂本銀次には夢がある。その夢は・・・この世界で一等賞になりたいの鉄山靠で俺は!!!」

それを目をきらきらさせて言う銀次はイケメンだった。

しかし、女性であるリサには銀次の夢がこれつつつつつつつつぱちも理解できなかった。

「優良し、強いし、お金持ち、性格だって単純明快で悪い訳じゃないのに中身が中二病となると一瞬で残念になるのはなんでかしら？」

それは天才少女にも理解できない摩訶不思議なものだった。

そんな時であった。

「師匠そろそろお願いします。」

ちっちゃいフェイトが金属バットを持って来た。

「うん？ああ、わかったよ。じゃあ外行くか」

二人はそういうと隊舎の外に出た。

「じゃあフェイトは金属バットを全力でフルスイングね。俺はそれを受け止めるから・・・あと狙う場所は全部頭だ」

「わかった。」

ブオンと風を切る音が鳴ると金属バットは銀次の頭にフルスイングされる。

それを銀次は素手で受け止める。

辺りにゴンという音が響き渡るが両者共に気にせず続けていく。

フェイトは身体ごと回して金属バットを振り回す。

それを銀次は反対の腕で受け止める。

遠心力が乗った分先ほどよりも大きな音が響く

「よっしゃーいい調子だ。どんどんこいやー」

「ハイ」

30分後

「どうしたちっちゃいのへばってんじゃねーぞ。そんなんで強くなれると思ってるのかあ？くやしかたら俺の腕をへし折って見やがれ」

「はあはあ・・・まだまだ、いけます」

銀次の両腕は金属バットで殴られ続けたため、内部出血がひどく赤黒くなっていた。

反対にフェイトは重たい金属バットを全力で振り回していたので、手の皮が剥けて血豆がつぶれていた。それだけでなく全身を回転させて遠心力も利用していたので全身の筋肉も悲鳴を上げていた。

「何もかもありつたけの思いをバットに籠めて全力で振れ!!」

「やあああああああああああ」

フェイトの全力の一撃を銀次は右腕で防ぐが、防ぎきれずその時骨が碎ける音が鳴り響いた。

すかさずフェイトは反対に回転しフルスイングし振り切る。銀次は反対の腕で受け止めたがその腕の骨も碎けたと同時に金属バットも折れた。

その事に満足したフェイトは疲労のため地面に倒れかけたが、それを銀次は碎けた腕で掴みゆっくり地面に下ろした。

「全く銀次は本当に無茶するんだから・・・それにしてもちっちゃいのが金属バットを使ったとは言え銀次の腕を砕くとは思わなかったわ。ほら仙豆よ」

「まーな、あんがと」

銀次は受け取った仙豆を咀嚼し飲み込んだ。途端に傷は痕だけ残して全て癒えた。

「ほれ、ちっちゃいのお前も食え」

「あ、あーん」

顔を真っ赤にさせながら大きく口を開けたので仙豆を投入

それを飲み込むとフェイトは即座に立ち上がり金属バットを持つために見たらギョツとした。

金属バットの先が折れて無くなっていた。

「ねえ、リサさん師匠って本当に人間ですか？」

「さあ？私が言えるのは中二病って事ぐらいかしら？銀次が人間かどうかは大した問題じゃないわよ」

その言葉にちっちゃいのはとんでもない人に弟子入りしちやつたと内心想ったとか

「じゃあ今日の修行は終わり次やるのは一週間後」

「その間は何やるんですか？」

「鬼ごっことラジオ体操だ。」

その言葉を聞いてフェイトは拍子抜けした。

第16話

「私が機動六課の隊長の八神はやてやよろしくなあ〜」

今現在六課の隊舎の前で八神はやての、八神はやてによる、八神はやてのためのスピーチが開催されていた。

八神はやての後ろには護衛よろしくヴォルケンリッターが全員おり、隣には高町なのは、フェイト・T・ハラオンが並んでいた。

そんな中私ティアナ・ランスターは同期であり、相棒でもあるスバル・ナカジマが八神隊長の話に飽きたのか念話で話しかけてきた。

最初は他愛も無い物だったけど、スバルがある噂話を言ってきた。

『ねえティアアこの話し知ってる?』

『主語が抜けてて分らないわよ』

『あ、そっかごめんごめん。この機動六課には陸戦ランクSオーバーの銀髪の子供が居るって話』

スバルがふざけたこと言い出した。

『銀髪の子供が陸戦Sランクオーバー?何の冗談よスバル?』

『いやいや、冗談なんかじゃないんだってば、その銀髪の子供はフェイトさんやシグナムさんを模擬戦で倒したって話なんだよ。』

『嘘でしょ!?!どんな魔法を使えばあの二人に勝てるのよ』

思わず聞き返した私は悪くない

『それが魔法は一切使わないで無手で倒したんだって』

スバルの言葉に驚愕を隠しきれない私は驚きのあまり固まる。

『あの銀髪の男の子がそうだよ』

スバルの目線の先には三人の子供が居た

一人は銀髪の男の子で、その右には…幼いフェイトさんもいらっしやる。左には知らない金髪の女の子

男の子は…私の顔をじつと見つめていた。

『ありやりやもしかしたらティアアに一目惚れしたのかな〜』

『そんなわけ無いでしょ馬鹿スバル』

実際にそんな訳があったとはこの時の私は全く気がつかなかった。

「では、長い話に付き合ってもらったところで申し訳ないんやけどここで新たな人材発掘したんで紹介するで〜そこに居る銀髪の男の子……って銀次お前のことや!!!何後ろ確認してんねん!?そんな美味しいキャラやないやろ自分!!!」

銀次と言われた銀髪の少年はしぶしぶながら壇上に向かっていた。

「(銀次とりあえず自己紹介と特技とか趣味くらいは言うんやで)」

「(あんたは俺の母ちゃんか!?)」

「(どあほう何抜かしとんねん。こんなうら若き19歳で空前絶後の美少女八神はやてちゃんを捕まえて母ちゃんってどういうことや!!!!機動六課の隊長だから言うなれば父ちゃんや!!!)」

似非関西弁の人が訳の分らないことを言い出したのでパス一回使用しました。

「え〜俺は坂本銀次10歳趣味は鉄山靠。特技は鉄山靠。好きなのは女の子です。」

「今なんで私のボケをスルーしたんや銀次!?あと趣味・特技とくれば好きなものも統一せな笑えるもんも笑えへんで……せやから銀次やり直しや」

「どこの世界に自分の自己紹介で笑いを取りに行く阿呆が居るんだよポンポコ」

「むつきー……誰がポンポコ狸や!!!シグナム・ヴィータ・シヤマル・ザファイラ戦闘やリイン合体するで!!!」

「……主はやてさすがに初日から問題を起こしてはまずいのでは?」「何言うてんねんシグナム!?ぎゃーぎゃー騒ぐ奴等はどいつもこいつも犬神家の刑にしてやるわ!!!レジアスがなんぼのもんじやい!!!!私はぶげら」

はやては乙女にあるまじき汚い悲鳴を上げると地面に倒れた。

その倒れ方はまさしくライジングサン・タロウであった。

ちなみに撃ったのははやての横に居た今現在目が座っている高町なののである。

何故分ったかって？レイジングハートを構えていれば誰でも理解できるだろ

第17話

ただいま新人隊員達の実力を見るためガジェット戦闘中それを嬉しそうに見ているシグナムとはやて

それを訓練室のすみっこの方でオレはフェイトさんとちっちゃいのを鍛えることになった。ちなみにお手伝いになのはさんもいる。理由は分らない

「じゃあ二人ともなのはさんが魔力弾を放つから金属バットでそれを打つように」

「ハイ」

「ではなのはさんお願いします。」
「まかせて」

なのはさんはそういうと魔力弾を野球ボールと同じくらいの大きさで2つ飛ばす

ブオン

ブオン

ブオン

二人とも空振りが続く

「二人とももつと魔力を感じて!!!!」
「ハイ」

「もつと腰を入れて腰!!!フェイトさんは・・・なのはさんに抱かれないと思わせるように振って」

「にゃ!!銀次君何言ってるの!!!」
「なのはに・・・抱かれる!!!!」

慌てるなのはさんを余所にフェイトさんは顔を真っ赤にしているが目だけはマジだった。

「ちっちゃいの!!!そんなへっぴり腰じゃあお母さん泣いて喜んで抱きしめてくれねーぞ!!!オレの事をお母さんだと思って気合入れろ」

「お母さんに抱きしめられる・・・うん、見ていて銀次。あの空の向こうまでかつ飛ばすから」

ちっちゃいのもやる気は十分のようだ。

「……全く銀次君はいきなり変なこと言っちゃ駄目だよ」

そして、放たれる魔力弾を大胆なスイングで豪快に打ち返す二人
「良いよー今のスイングでなのはさんはびしょ濡れだぜ。ちっちゃいのも良いスイングだった。オレがお母さんだったらもう抱きしめて今夜は一緒に寝てその後ご近所さんに自分の娘を自慢するぜ」
「本当に銀次!? 本当に今のスイングでなのは私を抱いてくれるかな?」

「ああ、もう今のスイングでフェイトさんにぞっこんラブって感じだな。オレが言うんだから間違いないよ。さあなのはさんの胸に飛び込んできな」

「分かった。なのはああああ私を受け止めてーーーーブリッツアクション」

「ちよフェイトちゃん!? くはああああ」

なのはさんの乙女にあるまじき声が訓練室に響いたがオレには関係なかった。

「銀次本当に今のスイングでお母さん喜んでくれるかな?」

「ああ、喜んでくれるさ。ただ、もしかしたらお前の母さんは途轍もないほどシャイだから面と向かっては言ってくれないかもしれないが内心はお前の事を愛しているのは間違いない!!」

「そっか私は愛されているんだね。」

「そうだ愛されている。だから例えちっちゃいのが命令されたからと言ってもやると決めたらそれは自分の意思だ。そして自分が決めた事は必ずやり遂げるんだ。」

「うん、私は母さんためにがんばる」

「それは違うぞちっちゃいの!! お前が望んでいるのは母さんが笑顔で居る未来を作るんだろ? だったらそれは自分のためだ。そうだろ?」
「うん」

「だったら、理由は自分を中心にしないと駄目だ。」

「うん、分かった。銀次ありがとうね。」

その時のちっちゃいのはとても可愛いと思いました。

「銀次ーちっちゃいのそろそろお昼だから食堂に行くわよー」

リサの声が聞こえたのでオレとちっちゃいのは食堂に向かった。
フェイトさん？なのはさんにマウントポジションしていたぜ。

食堂に着くと新人達が固まって食べていた。

若干二名は恐ろしい量の飯を食っている。

「なありサあの量の飯は一体どこに収納されるんだ？」

「普通に考えれば体内なんだけどそれだけじゃあ説明は着かないわね」

「ところで例の件はばっちりかい？」

「ええ、とりあえずフェイトさんの戦闘データは全部はちっちゃいのデバイスに突っ込んだわ」

「さすが天才は違うな!!仕事が速い」

「まーさすがにあの映像を見つけたときはちっちゃいのがかわいそうになったからね」

そう、俺とリサは見てしまったのだ。

なのはちゃんがちっちゃいのをバインドで動けなくしたあとにツインサテライトキャノンみたいな砲撃をぶっぱなした映像を...

「それにしても何がなのはちゃんを駆り立ててちっちゃいのにあんなことしたんだろうな？」

「さあ？もしかしたらちっちゃいのがなのはちゃんのおやつ食べたからじゃない？」

「おやつ食べたただけであんな砲撃するのか？」

「女の子にとっては死活問題よ」

二人がそんな話をしている横でちっちゃいのは最後に食べようと思っていたデザートをヴィータに横から取られて涙目になっていた。

「うんやっぱり他人のデザートはうまい」

それを言ったヴィータは後日バインドで拘束された後、大好物のハーゲンダッツを銀次達に食べられることになった。

ちなみにその時の映像はバルデッシュに収められたとか...

第18話

それは訓練後の事だった。

「ところで坂本銀次さんって強いんですか？」

同じ年齢のエリオがふと言葉に出す。

「どうなんだろうね？」

キャラも首をかしげる

「実際大した事無いんじゃないの？魔力があるわけじゃ無いし毎日変な踊り（ラジオ体操）踊っているし唯の変人に決まっているわ」

二人の疑問をバツサリ切り捨てるティアナ

「いやいや、そんな事ないよ。噂だとフェイトさんとシグナムさんに勝つたらしいし」

「ええ!!フェイトさんに勝ったんですか？」

「それはすごいです」

スバルの話に驚くエリオとキャラ

「所詮噂でしょ？あんな目立ちたがりの銀髪にフェイトさんが負けるわけ無いじゃない馬鹿スバル」

「ちよ、ひどい」

この会話が銀次の運命を決定付けた。

ファースト・アラートの日

俺はいつもの様にラジオ体操をしていたらなのはさんとフェイトさんに拉致られヘリコプターの前に居ます。

「おい、銀次のガキ大将速く乗れお前で最後だ。」

「なあ俺管理局員じゃなくて民間人なんだけど？あと年齢は9歳だよ。」

「にやはは銀次君なら大丈夫だよ。それに私も始めて戦ったのは9歳だし」

「うん、銀次にはエリオとキャラを守って欲しい……ついでにちいさい私も」

「おめーら話聞いて無いだろう!!!」

その後なのはさんとフェイトさんに両手両足を持たれへりに無理やり連れてかれた。拉致はテロですよ。

その後なのはさんが擬音でなんか説明していたけど俺にはさっぱり分からなかった。

なんだよばばーんとやってみようって!!!!

もつと論理的且つ常識的にそれでいて情熱的に言わなきゃ分からないよ

「銀次君が何を言いたいのかなのはにはわからないの。じゃあ先に空を抑えてくるね」

そういうとなのはさんはへりから飛んで変身した。

「じゃあ銀次後は任せた。」

続いてフェイトさんも飛んで変身した。

「今隊長達が空を抑えているから今のうちに行け。銀次のガキ大将あとは任せた」

へりのアンちゃん・・・丸投げジャーマンは止めてくれよ

「行くわよスバル」

「うん」

ティアナさんとスバルさんも普通にへりから飛び出していく

「キャロ」

「エリオ君・・・うん」

こつちの二人はお手てを繋いで飛んでいった。

「つてガキ大将が最後まで残ってどうするんだよ!!!」

「いや、んな事言われたつてこの高さから落下したら多分死ぬぜ」

それを言った瞬間アンちゃんの米神に血管が浮き出した。

「ごちやごちや言わずにさっさといけー」

アンちゃんはそういうと機体を傾けた。

俺は入り口付近に居たので空に投げ出される形になった。

「I Can Fly」



「飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで……♪飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで飛んで……♪周って周って周ってまわーる」

見てください今俺は飛んで……ません。人これを自由落下という歌っては居ますが、実際問題どうすれば良いのだろうか？先に下りていった4人は綺麗に着地決めていたけど……どうやったし？

あ、魔法か……俺使えないじゃん。

このままじゃあ落下の衝撃で体が持たん。

ならば出来る事をやるのみ

「うおおおおお燃えろ俺のコスモよ……ペガサス彗星拳」

身体に全力のオーラを纏った俺に死角無い!!!

そのまま俺はリニアレールの天井をぶち抜いた。

「生きてる。俺生きてるし……っていうか良くあんな高さから落ちて生きられるんだ？」

「ぎ、銀次さん!!!」

「よお、エリキャラロ元気？さつき振りだね。」

「え、えくつと」

「そ、そんな事より後ろにガジェットが」

後ろにガジェット？

振り返って見てみると団子虫みたいな機械が大量に居た。

とりあえず手前の奴をシュートした。

それは綺麗に群れに飛んでいき派手に爆散した。

「す、すごいあんなに居たガジェットを一撃で破壊するなんて」

エリオは目をキラキラさせて俺を見る。

「大した事ねーよ。そんなじゃあとつとと行くぞ」

その後はでっかい中ボスが居てエリオがリニアレールの外に投げ出され、キャラロが何故か飛び降りて、その後竜が飛んできてブレスを吐いた。

中ボス共々焼かれる事になるとは夢にも思わなかった。

その後エリオが技名叫んで中ボス撃破

才能ってすごいって事が良くわかった瞬間だった。
六課に戻ったらリサに慰めてもらおうと心に誓った

第19話

無理矢理参加させられた初任務を終えてへりに乗り込めばティアナさんからは鋭い眼差し、スバルさんは驚きの、エリオからは対抗心、キヤロは尊敬かな？そんな感じで見られています。

「俺何かしたか？」

「何かしたかって問題じゃないよ!!!ガジェットを魔力無しで全滅させることが出来た事に驚いてるんだよ!?!」

「ターミーネーターやT-1000に比べればあれ位大した事無いだろう?。」

「それは映画の話で今は現実の問題を追及しているの!!」

なのはさん・・・10代最後だからって両手をバタバタしているのはいかなものかと思うぜ

「ところでターミーネーターって何?強いのか?」

「フェイトちゃん今はそこに食い付かなくて良いから・・・これだから天然はやっかいなの(ボソ)」

「なのは今何か言った?」

「な・何も言っていないの!!!」

「???」

「そ、そんな事より何で銀次君はそんなに強いのか?」

「強くなければ生きられなかったからな(主に体が耐えられない的な意味で)」

「そ、そんなに過酷な人生だったの!?!」

「え!?!ああ、そうだよ。(一歩踏み込んだだけで全身の骨がバツキバキ。今考えたらスペランカー先生もびっくりの脅威の難易度。今まで良く生きてこれたな俺)」

なのはさんの問いに遠い目線になってしみじみ答える銀次

銀次の発言で六課に戻るまでの間へりの中は重い空気に包まれた。

それから程なくしてへりは六課に着く。

へりから降りるとそこには満面な笑顔で頬を赤く染めて酔っ払っているような八神はやてがそこに居た。

「初任務ぐくろうさんやってなんや空気重いで？なのはちゃんフェイトちゃんどうしたんや？任務は大成功なんやから景気良くはっちゃけないとあかんよ」

はやてはそういうと焼き鳥を食べながらビールを飲んでいた。

周りを見渡すとシグナムが晒し姿で器用に焼き鳥を焼いて、ウィータは酔って居るのか終始グリフィスに「銀次なんであたしのハーゲンダッツを食べたんだ!!!」と絡んでいた。

絡まれているグリフィスは酔いつぶれて寝ているが……

それを見たフォワード陣はさっきまでの重苦しい雰囲気は馬鹿らしくなりそれに混ざることにした。

そして、次の日

機動六課はツケを支払う目に合った。

それはとある人物がブチギレた

「皆さん何考えているんですか!!!特にはやてちゃん部隊の隊長がそんなことじゃあ部下に示しがつかないでしょ!!!」

シヤマルの声が部隊長室で響き渡る

「とうとうすいませんでした」

部隊長室にて説教を受けている居るなのはとフェイトは素直に謝るも

「せやかてシヤマル初任務大成功で、野球かて勝ったんやしこれくらいしたって罰はあたらへんよ。っていうか二日酔いで頭に響くからあんまり大きな声はあかんよ」

名指しで怒られたはやては頭を抑えながら反省しない

「はやてちゃん事件が起きたらどうするつもりなの!!!」

その時はやての視線がするどくなる。

「ふっ当然盾の守護獣ザフィーラを盾にするんやー」

訂正彼女はまだ酔っ払っているようだ。

「はやてちゃん!!!今日と言う今日は許しませんよ!!!」

「お手柔らかに頼むで〜」

その日一日部隊長室でシヤマルの声が響き渡った。

第20話

あの訳の分からない初任務から数日が経過した。

俺は相変わらずマイペースに行動している。

そうそう二つ変わった事があった。

なんとリサが喋る機械を作る資格をついこの間取ったんだ。

まあそんな資格があっても俺らのグループで魔力持っている奴がちっちゃいのだけだから意味は無いんだけどね。

それとちっちゃいのはジュエルシードを探しに未来に来たはずなのに・・・そんなこと忘れて今じゃあはやての部屋で“リングにかける”を読んでるし・・・もしかしてマグナムとファントムを覚える気じゃないだろうな？

たしか剣崎順は高電圧ルームで死に掛けながら編み出したみたいな事が書いてあったが、ちっちゃいのは確か電撃タイプですばやい動きが得意だから・・・腕の筋力を鍛えればもしかすると

そんな事を考えながら俺は機動六課の建物屋上でお昼寝を貪っていた。

目が覚めると辺りはすでに暗く成っていた。

ミッドチルダの空を見上げればそこには無数の星が煌く夜空があり、地球から見る夜空よりもそれは遥かに美しかった。

「綺麗なものね。ミッドチルダから見る夜空は地球と違って汚れて無いから」

「あれリサ居たの?」

「全く夕食の時間になっても来ないから探しに来たのよ。そしたら自分一人でこんな良いもの見ているなんてズルイじゃない。それにちっちゃいのも居るわよ」

「そうだよ。銀次私の事忘れないでよ」

「ははっ悪いな。それにしてもこの綺麗な夜空を見た所為かなんだか少しだけ分かった気がするぜ」

「分かったって何が?」

「決まってるだろ。発頸だよ。」

俺はそういうと右手を上には伸ばし人差し指を上に向けてリサとちっちゃいのに向けてにやりと笑った。

「??」

「おつと急がないと夕食が無くなるぜ二人とも」

俺はそれだけ言うと駆け足で屋上を出て行った

「あ、待ちなさいよ銀次」

「置いてかないでよ」

リサもちっちゃいのも銀次を追いかけて屋上から出て行った。

さて食堂に着いた。

俺がさつき考えた事が正しければ俺は発頸を使えるはず、それを試すために俺はコップに水を半分まで注ぎ、両手で掴む。

コップの水は微動だにしない。

そりやそうだ。コップの水は今まさに力を受けていない無力な状態なのだから、ならば俺も全身から力を抜く、これが同調

そして大きく息を吸い、吐き出した。解放

「破アア」

そして見事俺の試みは成功し、コップの水は全て飛び出した。

ただ、誤算が有るとしたら初めての試みだったので錬度が低かったことと、たまたま真上を飛んでいたリインフォース・ツヴァイさん?にかかってしまった点は誠に申し訳ないと思う所存です。

だからと言って部隊長室に呼び出すのは職権乱用じゃないでしょうか?

「うううひどい目にあっただすう」

そこにはタオルでグルグル巻きのずぶぬれのリインさんとグラサンを掛けてシグナムのレヴァンティンを肩に担いでやくざみみたいな感じの八神はやてが居た。

「銀次何やってんねん。リインが風邪引いたらどう責任とんねん!!!」

「いや、あの、ごめんなさい、でもそんな怒ること無いじゃん」

「誰が喋って良いゆうた?とりあえず銀次は次の任務強制参加やから

な!! 覚悟しときい!!!」

謝ったのに怒鳴られた。しかもレヴァンティンでほっぺぴちぴちされた。

「そうですねっ覚悟するですうっ」

「リインさん……ぺちぺちおでこたたかないで

「……俺民間人なんだけど」

「なんか文句あるんか?」

「い、いえ無いです。」

俺はそれだけ言うと部隊長室から出て行つた。

何故はやてさんがあんな口調だったのか俺には分からないが……机の上にはミナミの帝王が置かれていた事だけは事実であった。

第21話

「はあくホント嫌になるぜ。なんで俺が任務に参加しなきゃいけないんだよ。お金だってもらえないのに・・・」

「銀次その任務なんだけど私も行くことにしたから気を落とさないで」

そう言ったのはブルマ姿のちっちゃいのだった。

胸にはひらがなで「ふえいと」と書かれているのがチャージングポイントだ。

しかし、やっていることは俺の腹にひたすら左ジャブを繰り返している。

それも魔力で体を強化しているので案外痛い。

プレシアさんに会ったらまずお宅の娘さんは一体どういう教育をしているのかと小一時間程問い詰めてやる。

「ハアアアアアアアギヤラクテイカー」

ちっちゃいのが魔力を左手にため出した

その所為か左手がスパークし始めた。

「ちよ・・・ちよつとタンマちっちゃいのそれはシャレにならん」

俺の制止の声など知ったことかと腕を振り上げやがった。

「ファントムーーーー」

その時俺は見た。

ちっちゃいのの後ろに無数に生み出された幻影の銀河を

その光景を見た俺は意識を失った。

☆☆☆☆

気が付くと俺は見知らぬ建物の前に居た。

横にはジーパンに無地のTシャツその上に革ジャンを着てるちっちゃいのもといフェイトと黒のカーゴパンツとだぼだぼのTシャツを着たりサが居た。

「なあともフェイト、リサここどこだ？」

銀次としてはギヤラクテイカーファントムを打てるようになった

フェイトを認めたという意味で名前を呼んだのだが、そんなことを知らない二人は大きな声を上げてしまう

「銀次が名前を呼んだー!!!」

俺が名前を呼んだらリサとフェイトは驚きやがった。

「海鳴に居たときは名前を呼んでいただろうが！」

ズビシと手刀をフェイトの頭に落とす

「あう」

「で、もう一度聞いてやる。ここはどこだ？」

あまりにも痛かったのかフェイトは涙目になり頭を摩っていたのでリサが変わりに答えた

「ここはホテルアグスタよ」

「そんなドラクエの村人みたいな受け答え誰がしろといった!!」

「銀次が何を言っているのかわからないわ」

リサはいつもの呆れた目で見つめる。

何故だドラクエは一般的でこの小学生でも分かるゲームだろうか？。はやてさんなら絶対に伝わったはずなのに一体あの人は何をしているんだ？

俺がそう思った時だった。

目の前に訓練中にみた団子虫もどき・・・もといガジェットだっけ？が10体現れた。

「私がやるから銀次とリサは下がって」

フェイトはそういうと左手にテーピングを一瞬で巻いて構える。

「脇を締めて・・・挟り込むように打つべし打つべし打つべし」

高速移動魔法を使い一瞬で間合い詰めガジェットにジャブをくり出し通り抜けたフェイト。

フェイトが構えを解くと、後ろに居た10体のガジェットは一斉に音を立てて爆発した。

爆風がフェイトの金髪を撫でる様に通り過ぎる。

この時銀次が思ったことは

「(つい最近までは唯の魔法少女だったのにリング男のバイブルにかけるを読ませたら拳闘魔法少女にランクアップとか・・・なんだ次はジェットアツ

パーでも覚えるのか？それともハリケーンボルトか？でも雷光明王流転拳も捨てがたいし・・・ああ俺は一体どうすれば良いんだ」

色々なロマンが銀次の頭の中を駆け巡っていた。

そんなことを知らないフェイトは・・・

「うん、大分いい感じで慣れてきたかな？この任務が終わったら今度はマグナムの練習だ」

もはやジュエルシードの事などすっかり忘れていた。

だから気が付かない

今後ろに10個のジュエルシードがあることに

「あら、こんなところにジュエルシードが10個も・・・まあ良いわ。そろそろ翠屋のシークリームを補給したかったのよね。銀次・フェイト帰るわよ。」

リサはそういうと妄想中の銀次とフェイトを掴んでジュエルシードを使用した。

そして三人はその時代から消え去った。

後に残るのは10体のガジェットと地面に無駄に達筆で書かれた文字だけが残った。

それを後ほど発見したフォワード陣はなんとも言えない顔をしていた。

ちなみに書かれた文字を見て泣いたのはヴィータだけであった。

第21話 銀次は御用になったのです。

気が付くとそこは見慣れた我が家の玄関

玄関先にはリステイ警部・・・？

何故彼女がここにいるんだ？

俺が思考を巡らすよりも速くとなり居たりサとフェイトはこの場から居なくなっていた。

後ろを見るとフェイトがリサを抱えて空を飛んでいる。

なるほどこれが非行少女か・・・ってこれはちよつと古いな

そんなことを考えていたらいつの間にかリステイ警部が目と鼻の先に居た

「リステイ警部近いですよ。」

両手を前に出して距離を取ろうとしたら、ガチャリと音がした。

あ、これはアカンパターンや

「銀次君つかまえたー♪」

「あの〜リステイ警部何で手錠掛けたの？礼状は？そして罪状何？」

冷や汗掻きつつ尋ねるとリステイ警部は洗惚な笑みを浮かべながら答えた。

「僕が君を捕まえるのに礼状なんか必要かい？ちなみに罪状は僕を一週間ほったらかしにしたことだよ。」

「めっちゃ私的な事ですよん。というか一週間も経ってるの!?今何日ですか？」

「5月10日だよ。じゃあ行くよ留置所愛の巣にね。」

「マジか・・・」

そうして俺はドナドナよろしくまたもや留置所に入れられた。

全く持って意味がわからなかった。

ちなみにその三日後に身元引受人に恭也さんとなのはちゃんが来てくれた。

俺が帰るところをハンカチを噛んで悔しそうにしているリステイ警部はそろそろ職権乱用は止めて欲しいと思う所存です。

「この後忍達とお茶会やるんだけど銀次も来ないか？」

「え!? めんどくさいから良いよ恭也さん」

「アリサちゃんにすずかちゃんも居るんだよ銀次君。後サプライズも用意しているから来て欲しいの!!!」

「なのはちゃん・・・驚かそうとしている人にそれ言っちゃだめだよ。逆に斬新過ぎてびっくりだよ」

「にや!!! 今言った事は忘れるの銀次君」

「忘れろって無茶振りにも程があるでしょ? って何しているんです恭也さん石なんか持ってどうする気ですか?」

「い、いや石で本気で殴れば銀次の記憶ぐらい消せるかなーつと」

「あんたどんだけシスコンなんだ!!! 御神の剣士にそんなことされたら、記憶が無くなるどころかさすがの俺でも死んじゃうわ!!!」

月村家に着くまでの間そんな心温まる会話をしていれば、時間などもあつという間に飛び気が付けば月村家の玄関に着いていた。

ちなみになのはちゃんは歩きつかれて恭也さんにおんぶされていた。

その時俺はふと思った。

この運動音痴の娘っ子がどんな猛特訓すれば未来のなのはさん並みに動けるようになるのだろうか? というかそもそもあの世界は本当に未来だったのか? 平行世界の未来って言われた方がまだ納得できる。

「・・・を聞けえええ」

熱気溢れる女の子の声の音が聞こえたから歌いだすのかと思ったら、目の前にアリサが居て殴りかかってきた。最近の女子はアグレッシブだなと思いつつながら、それを俺は・・・体操選手顔負けの空中三回転お捻りでアリサの頭上を越え、すずかの真後ろに着地を決めた。何故かって? 安地だからに決まってるだろjk

「よう、すずか一週間と三日ぶり? 身長伸びた? 体重増えた? 手ぶらで着たけどなんか文句ある?」

「うん、銀次君10日振りだね。あと女の子に身長と体重を聞くのはデリカシーが無いよ。誘ったのはこつちだから手ぶらで着ても文句

「は無いよ」

「俺の辞書にデリカシーは無いから、あとで広辞苑からコピペしとくよ。じゃあエスコートよろしく」

「普通は逆じゃないかな？」

「たまには逆も有りだろ？」

俺とすずかは話しながら家の中に入っていった。

後ろでは血走った目をしたアリサを必死に宥めているのはちやんと「なるほど」とつぶやいている恭也さんが居たが気にしちやいないよ。

第22話 狐はくーくー猫はにやーにやー

すずかに案内されて部屋に上がるとそこには見渡す限り猫・猫・猫・猫・猫・猫・猫とメイドさん

何故だ？前回入ったときは猫と黒縁メガネ君なんぞ一匹も見なかったぞ。

「すずか前回屋敷に来たときは猫と黒縁メガネ君は見なかったけど・・・」

「あの時はみんな私の部屋に避難させてたからだよ。それと同じクラスの岸本君だよ銀次君」

「ふーん、そうなんだー。そんなことより」「銀次（君）ーーー私たちを置いていくな（なんてひどいの）ー」「ようやく来たかアリサとなのはちゃん。ところで恭也さんは？」

「お兄ちゃんは忍さんの部屋に行ったよ。そんなことより先に行くなんて酷いよ。せっかくサプライズに岸本君呼んだのに」

「全く銀次の所為で計画が台無しじゃない!!」

「ああ、めんごめんご」

「まあいいわ、すずかそれじゃあお茶会を始めましよ」

「うん、じゃあファリンお願いね。」

「かしこまりました。それでは皆さんお飲み物お持ちしますが何を飲まれますか?..」

「二私はいつもので良いよ（の）」「二」

「じゃあ俺も高町達と同じので」

三人娘と黒縁君は同じものとは・・・全く個性のかけらもありません。

「銀次様はいかがなさいますか?..」

「玉露の梅昆布茶つてある?それと「ぐぎゆるるる」悪いんだけど何か食べ物もお願いして良い?三日間何も食べて無くて限界なんだよね。出きれば赤い狐が食べたいんだけど駄目ですかね?..」

「え、ええ、分かりました。至急ぐ用意いたします。」

ファリンさんはそれだけ言う慌てて部屋を飛び出した。

「フアリンさんあんなに慌てて大丈夫かな？」

「た、たぶん大丈夫だよ」

その後ガシャーンって音が聞こえたけど本当に大丈夫なのか？

10分後

フアリンさんは頼まれた品を持ってくる事に成功し、配膳し終わったら部屋の隅でガッツポーズを取っていた。

それから三人娘と黒縁君達がわいわい楽しげに話していた。

途中なのはちゃんが無言で来たイタチだっけ？フェレットが猫に追いかけてられてなのはちゃんと黒縁君にSOSの信号を送っているように見えたが気のせいだろう。

そして俺が麺を食い終わり油揚げを食べようとしたときである。

『のじゃあああああああ、わ、わしなんか食べてもおいしくないんじゃない？』
「ひえええ銀次、フェイト、リサ助けてたもれー！ー！ー！ー！ー！」

この声は未来に置いてきた天弧の声？

そう思った時だった。

「あ、ユーノ君が飛び出しちゃった。私行ってくるの」

「待って高町俺も行くよ」

「あ、ちよつと、待ちなさいよ。なのはに隆」

アリスの静止の声も聞かずに二人は部屋から出て行った。

「全く何なのよ一体」

ぶんぶんしているアリス他所にすずかはしたり顔で笑う

「わかってないなーもしかしたらなのはちゃんに春が来たかもしれないんだよ。ここは親友として暖かく見守ろうよ」

「え?!もしかしてなのはと隆って・・・うそだー！ー！全くそんな様子無かったじゃない」

すずかの発言に顔を真っ赤にして興奮するアリス

やっぱり女の子の子と言えど他人の恋話は蜜の味

「あ、フアリンさん二人が正気に戻ったらちよつと散歩してくるって行っておいて」

「はわわ、分かりました銀次様」

銀次はそれだけ言うとお揚げを箸で摘みながら外にでた。

銀次が月村家の庭という名の雑木林に入って数秒後。

にやあくにやあくと遠くの方から猫の声が近寄ってくる。

その方向に目を向けると子狐形態の天弧がクウー！ー！ー！！！！つと泣き声をあげながら銀次に飛びついた。

「お、おい天弧なんでお前がここにいるんだよ。」

「そ、それはじゃな六課の油揚げを食い尽くしたのがはやてにバレテ怖かったので逃げてきたんじやよ。つて今はそんなことより化け猫が出てきたんじや銀次わらわを助けてたもれ！！！」

天弧がそうまくし立てて銀次の頭の上にしがみ付く。

その時自分の頭上が突如暗くなったので上を向く

そこには天弧を追い掛け回していた。でつかい子猫が跳んでいた。

「つてあぶねえ」

それに気が付いた銀次はその場からすばやく離れて回避する。

「にやああく」

地面に着地すると子猫は銀次を見据える。

銀次も子猫を見てどう動くか考える。

そんな中誰よりも先に動いたものが居た。

それは常識を超えたスピードで銀次が箸で摘んでいた油上げを奪うとすばやく銀次の頭に戻り油揚げを頬張る。

「おい、天弧お前マジぶざけんなよ汁が垂れてんじやねーか！！！」

「もきゅもきゅ、な、なんとこの油揚げの美味しいことか、はぐはぐ、生きててよかったのじやく」

「聞けやこの駄目狐があ！！！」

天弧の発言で銀次のムカツキ度がただいま80%を超えた。

銀次は頭を振って天弧を振り払おうとしたが、しかしその所為で油揚げの汁が銀次の目に不幸にも入ってしまった。

その瞬間を子猫は見逃さず銀次に飛び掛る。

しかし、子猫は銀次に届くことは無かった。

「……フォトンランサー」

少女の声がつぶやかれると電撃の魔法弾が子猫に直撃し、子猫は元の大きさに戻りその横には青い菱形の石ジュエルシールドが落ちた。

「なんでお前がここにいるんだ？フェイトー……!!!」

「えっと……天弧の声とジュエルシールドの反応がしたからだけど？」
「ああ、そうなの？いやぁー助かったよ。この馬鹿狐が俺の頭の上で油揚げ食べるから頭がべたべたするんだ。悪いけどなんか拭くもの持っていない？」

「これ使って良いよ銀次君」

そういうとさすがが銀次にハンカチを差し出す。

「おお、サンキューすずかお前良い嫁さんになるぜ。……ところでなんで外にいるの？」

「それはあんなにどしんどしん音がすれば誰だって気になって見に来るわよ。で説明してくれるんでしょうね？銀次そこにいる子も含めて」

アリサはニヤニヤ笑いながら銀次に詰め寄る。

周りを見ると目をグルグルさせて気絶しているのはちゃんと黒縁君と金髪の少年と恭也さんと忍さんが居た。

ちなみにすずかはフェイトをめっちゃにらんでいた。

「や、やばいよ銀次あの子すっごい怒ってるよ。わっこつち見た。」

「わしはお揚げさえ食べれば何でも構わんぞ」

フェイトは銀次の後ろに隠れて天弧はどっしりと構えている。

この時銀次が考えていたことは唯一つ

説明役はリサのはずなのになんで俺がしないといけないんだよ。

この日銀次の胃がストレスでマツハになったのは仕方の無いことだった。

魔法ばれなの!?

さあー始まりました説明会今回私たちの話を聞いてくれるという方々はこちら

高町家の大黒柱の土郎さんと長男である恭也さん・・・桃子さんと美由紀さんは生憎と都合が悪いとのこと。

次は私のクラスメートのアリサ・バニングスとメガネ君となのはちゃん

そして最後は場所を提供していただいた月村家の方々・・・主に忍さんとフェイトをめぐっちゃ睨んでるすずかちゃんとノエルさんとファリンさんです。

フェイト!?俺の背中に隠れてそ〜つと顔を出しては引つ込めるを繰り返してる。

うん、例えるならワニワニパニックを想像して頂けると分かりやすいと思う

だが、それを繰り返すことによつてすずかちゃんのテンションゲージがうなぎ昇りで上がって行く。

「さて、まず何から説明したものか・・・とりあえず、結論から言おう」
周りが静まり返る。

「俺もよくわかんねえんだ。」
その途端周りの人たちが全員すっこけた。

悪いな皆。転生者だからって頭が良い訳じゃあないんだよ!!!!

その後フェイトが俺の代わりに拙いながらも身振り手振りで行く説明した。

「・・・という訳で私はジュエルシードが必要なんです。」
おつといつの間にかフェイトの説明は終わったようだ。

「ふむ、なるほど魔導師にしか封印は出来ない、か。まあ銀次君が着いているのなら危険も無いな。」

「じゃあ銀次君これからもがんばってフェイトちゃんを守るのよ」

士郎さんと忍さんは俺に投げました。

「え、ああ、そうですね。」

これにて一見落着かと思いきやなのはちゃんがふるふるし始めた。それに合わせてツインテールも奇怪な動きをし始める。

「ちよつと待つの!!!ジュエルシールドはユーノ君の物で危険な物なの!!!だからジュエルシールドをユーノ君に返すの!!!銀次君!!!」

すごい高級感溢れるテーブルをバンバン叩くのはちゃん。

「え!?!俺?何で?つかユーノって誰よ?」

「あ、僕がユーノです。」

そういうと金髪の少年がおずおずと手を上げる。

ふむ、見るからに男の娘だ。しかし、可愛いさだったら俺のほうが上だ。

「ハンッお前の物だからなんだってんだ。これは俺が毛むくじやらを倒して手に入れた戦利品だ。つまり俺の物だどうーゆーのーあんだーすたん?」

俺は鼻で笑ってユーノに人差し指を突きつける。

フェイトも一緒になって人差し指を突きつける。

ユーノは涙目になった。

「坂本いい加減にしろ!!!」

「うるせえメガネ。黙れメガネ。そしてメガネ。だからお前はメガネなんだ。」

「メガネメガネってうるさいんだよ。だったら俺と勝負しろ!!!」

つい最近発願を使えるようになったこの俺に戦いを挑むとは愚か者め!!!

貴様が完成した我が鉄山靠の最初の犠牲者だ。

「良いだろうそれで納得するならば相手してやる。」

メガネの挑戦を快く承諾した俺とメガネは月村家の庭に移動した。

「セイバーセットアップ」

メガネ君がそういうと蒼い光に包まれてそれが消えると蒼い騎士

甲冑に身を包んで現れ手にはなんかかつこよさげな西洋の剣を持って現れた。

「坂本デバイスはどうした？」

「デバイス？ああ、持ってないぞ。まあいいや準備が出来たならかかって来いよ。」

「何故だ？その容姿なら踏み台のはずで魔力もSランク位ありそうなのに……」

「何ぶつぶつ言ってるんだ？速くかかって来いよメガネ」

「メガネって言うなー」

岸本はそう言うとき空を飛ぶ。

「ブルーシューター」

岸本が空中で剣を振ると回りに拳大の蒼い魔法弾が多数出現し全てが銀次に向かう。

それを棒立ちで黙って観ていた銀次の頭に吸い込まれるように魔法弾が当たる。

無論銀次の頭は後ろに跳ねる。

後ろに跳ねたところをタイミング良く狙い済まし魔法弾を当てる。

それからは一方的で岸本は誘導性を捨て直射のみで魔法弾を放ち続ける。

しばらく打ち続けるとあたりは砂煙に包まれる。

「なんだたいしたこと無いじゃないか、この勝負僕の勝ちだ。」

当てたときの手応えからそう判断した岸本だったが、砂煙が晴れたとき驚愕を隠せなかった。

なぜならそこには開始から一歩たりとも動いていない坂本銀次が試合開始の時と同じように両の足で立っていた。

「はあく全く持って同感だ。メガネの言葉を返すぜ。たいしたこと無いじゃないか、この勝負俺の勝ちだ。」

「なあ!?ならこれならどうだ約束された勝利の剣」

岸本の剣から光の一撃が銀次めがけて放たれた。

光は一瞬で銀次を飲み込む。

その破壊力により地面にはクレーターが出来ており、その中心には

仰向けに倒れてる銀次がいた。

「はあはあさすがにこの一撃には耐えられまい」

岸本も約束された勝利の剣を撃つため大量の魔力を消費したためか肩で息をしている。

「ふうーまあなんだ？無駄とは言わないがその程度じゃ俺には勝てないぜ。」

銀次はそれだけ言うとは膝を丸めて後転し、そのまま腕の力だけで逆立ちしそのままゆつくりと足から地面に付けて立ち上がった。

「なんだよ、なんなんだよおまえはぁーぁーぁーぁー」

その様子を見た岸本は恐怖・驚きと入り混じった声で叫ぶと残った魔力を全て身体強化に充て銀次に突っ込む。

そのスピードは速く一瞬で銀次の眼前に飛んだ。

「わざわざ俺の間合いに入ってきて来てくれるなんて・・・なんて馬鹿な奴だ。」

しかしその言葉が岸本に届く前に岸本の意識は既になくなっていった。

岸本が最後に見たのは銀次の背中に宿った鬼の貌であった。

4年間

雨の日も風の日も休まずただ、ただひたすら感謝の鉄山靠を行っていた銀次

ネテロ会長は一日一万回と制限を付けていたが、銀次は違う

銀次は最初の頃は一万回と制限を付けていたがあるときふと考えた。

よくよく考えれば感謝に制限を掛けるっておかしくね？と

そう考えた銀次は以降自分が満足するまで鉄山靠を続けるようになった。

だからこそ銀次の背中には鬼の貌が宿るべくして宿った。

バカはバカ故にバカげた事をやってのける

「じゃあ銀次転移するよ」

「あいよー。リサ留守番よろしく」

「わかったわ。」

今何してるかって？これからフェイトの家に行くんだよ。

この前の戦闘？んなもん俺の勝ちだよ。

いくら魔力が馬鹿みたいに多くなったってそんなものは関係ない!!!

強い奴が勝つ。コレ大地の掟ネ

まあいきなり金髪翠眼になったら突然馬鹿みたいに強くなってびっくりして思わず超闘気斬りハイパーオーラ切り(手刀V e r)をしてしまったけど……まあ問題無いだろう。

問題だったのはフェイトの掛け声がやたらとうるさかったのとすずかの眼の色が赤くなってひたすら俺の頬から流れる血をぺろぺろしてきたことだ。

まったくこれだから中二病は困るんだ!!!

「あ、銀次仙豆忘れてるわよ?」

「なんでフェイトの家に行くのに仙豆が必要なんだ?」

「良いから持って行きなさい!!!」

強引にリサに手渡された仙豆をポツケに入れる

「じゃあ行って来ます。」

「行って来るよ」

「あいむびーばっぐ」

こうして俺とアルフとフェイトは旅立った。

気が付くと俺は見知らぬ研究室っぽいどこかの部屋にいた。

あたりを見渡すと一緒にいたはずのアルフとフェイトが居ない。

やっぱりフェイトはほんこつだった。

あとで母親のプレシアに文句を言わないと気が済まない

そんなことを考えているときだった。

『おにーちゃんだれ?』

少女の声が部屋に響く

「だ、誰だ出てこーい。ゆ、幽霊なんぞこわくねーぞ」

別にビビッてねーし、声が甲高くなっちゃったのは俺が子供だから出し

上下左右見回して見たがどこにも居ない

「な、なんだよ。誰もいねーじゃねーか!!!俺をビビらすなんてフェイトめやるじゃねーか」

『おにーちゃんとりあえず後ろを見ようか?』

さび付いたブリキのように後ろを振り返るとそこにはすっぽんぽんのフェイトが透けていた。

「おい、フェイトお前が幼女で露出狂だって事知っていたけどさすがに全裸はまずいだろ?季節的にまだ肌寒いから服着ろよ」

『幼女じゃないもん。アリシア今年で31歳だもん』

幼女なのに幼女じゃないとは此れいかに!?

誰か名探偵コロン呼んでくれ

そして俺に説明してくれ

☆

『・・・ってなことがあったんだよ。っておにーちゃん泣き過ぎだよ』

アリシアがそういうものの仕方ないじゃないか

「うっう・・・わずか、五歳で、この世を去るとか・・・残酷すぎる!!」

だから俺はこの日この時この瞬間決意した。

そんな時であるどこから鞭の音と少女の声が響いた。

「ま、まさかママがフェイトに酷い事を!?おにーちゃんフェイトを、妹を助けて!!」

「わかった。場所を案内してくれ」

「うん、こっちだよ。急いでおにーさん」

アリシアはそういうと音のする方にまっすぐ向かい壁をすり抜けていった。

「やっばこっぞって時はお頭が幼女ねーか!!!ちい緊急事態だから仕方

が無い」

俺は壁を拳で壊しながら進んだ。

☆

これだけの時間を与えて、たった13個のジュエルシードしか集められ無いなんて本当にこの失敗作は私をイラつかせるわ。

「ああ、フェイトお母さんは悲しいわ。たった13個しか集める事が出来ないなんて、これはお仕置が必要ね」

「え？なんで？う、動けない。これはバインド!？」

私はフェイトをバインドで縛り、鞭で何度も何度も叩く

「フェイト、あなたは、大魔導師、プレシアの娘、なんだから、この位の事、出来なきやいけないのよ!!」

叩かれた部分は赤く腫れ上がる。

でも、おかしい私は以前にもこうして何度もフェイトにお仕置きした。

その時の傷が無くなっていた。

「い、痛い、止めて、お母さん、痛いよ、助けて、助けて、銀次ー」

鞭で叩かれたフェイトが銀次と叫んだ瞬間、研究室の方から壁を壊す音が聞こえた。

フェイトの声に反応するように壁を壊す速度もどんどん速くなり、

“それは”最後の壁を壊し私の前に現れ、フェイトに当たるはずの鞭を自身の体を盾にして守った。

「銀次、守ってくれた。」

「フェイトを守る位朝飯前だぜ。とりあえず仙豆だ。」

「うん」

“それは”緑の豆をフェイトに食べさせた瞬間私は驚いた。

何せ私が鞭で叩いた痕が綺麗さっぱり無くなったのだから・・・

ならその豆を研究すればジュエルシードが無くてアリスシアを生き返らす事が出来るかもしれないのだから

☆

俺は傷だらけのフェイトに仙豆を食べさせた後、プレシアさんを観る

特に老けてる様には見えないが顔色がかなりまずいし、何よりオーラがほとんど無い

「坊や賤の邪魔をしたことはこの際不問にしてあげるわ。フェイトに食べさせた豆を渡すのならね。」

プレシアはそれだけ言うのとデバイスをこちらに向ける。

「止める魔力を使うな。こいつが欲しけりゃくれてやる。」

「物分かりが良い子は好きよ。でも、妙なことしたらただじゃすまないわよ」

「わかった」

『おにーちゃん』

「銀次」

「お前から心配すんな。プレシアさん一つ良いですか？あなたに取って一番重大な事です。」

「何よ？」

「この豆・・・仙豆って言うんですがこれを解析したところであなたの求める事は出来ませんよ？」

「そんなことどうでも「だから!!!俺がジュエル・シードを使ってアリシア・テスタロッサを生き返らす」・・・なんで坊やがアリシアの事を知っているの？」

「今そんなことは関係ねえー俺がジュエルシード使って生き返らす。それだけだ。あんたはそこで黙っておとなく見てな」

「何を言い出すかと思えば・・・それは子供のおもちゃじゃないのよ。それに願うとネジ曲げて都合の悪いほうに叶えて、人が使えば取り込まれるだけよ。」

「全ての人が取り込まれる分けじゃねー!!!弱い奴が取り込まれるんだ。」

俺はそれだけ言って自身の首から提げているジュエルシードを両手で握り締める。

「や、やめなさい」

その光景を見たプレシアは慌てて止めようとするが一歩遅くジユエルシードから魔力があふれ出し、銀次を飲み込んだ。

想定外すぎた現実

生き返らせえろ

ジュエルシー드가発動し俺を取り込む。

何のために？

そんなのは決まっている!?

使用者の願いを正確に叶えるためだ!!!

では何でジュエルシードは願いを歪ませて叶えるのか？

それは使用者に邪念が入るからだ。

ならどうすれば良いか？

バカになれば良い。

バカは迷わなねえ

こうと決めたら一直線だ。

だから・・・

「さっさと生き返らせえろ」

俺を取り込もうとするジュエルシードの魔力を自身のオーラで押し返す。

オーラは感情だ。

感情が強ければ強いほどオーラも強くなる。

その結果オーラと魔力が混ざり強烈な光が発生して部屋を照らす。

「目が、目がああああ」

『みなぎってキターーーー』

「か、身体が、あ、あついいいいいいいいいいいい」

声を聞く限り、とりあえず全員無事みたいだな。

光が収まったので俺は目を開く

目を見開いた先には目を押さえてうずくまるフェイトとアルフ。なぜか裸のアリシアと背丈の合っていないだぼだぼのドレスを着た黒髪の美少女プレシア？が居た・・・

「ママを幼女にしてどうするのよ!!!あとなんで私はフェイトより身長が低いのよ。私言つたよね。今年で31歳だって!」

「うっう・・・うわああああああん」

アリシアがそうまくし立てると、隣にいたプレシア？はびっくりしたのか泣き出してしまった。

「こら、アリシア！幼女を泣かすんじゃない」

「ちよつとまって私が悪いの？この事態を引き起こしたおにいちゃんが元凶なんだよ。むしろ私に謝って!!ほら謝って」

アリシアの地団駄。

ふむ、美少女の地団駄は最高だぜ!!

「過ぎた事は振り返らない。それがハードボイルドって奴だあああああああ。」

その時不思議な事が起こった。

原因は多分いっぱいあると思うが：：ピンポイントで何故俺が立っていた場所の床が綺麗に無くなり俺は落ちた

「は、ハードボイルド過ぎだよwww」

アリシアの笑いを堪えた声が響き渡る。

しかし、その場所が危険であることに変わりはない

「アルフ!!母さんと姉さんを連れて転移するよ。」

「え?!銀次はどうするんだい?」

「銀次の事だから虚数空間に落ちた位じゃ死なないでしょ。そんな事より私は母さんを愛での!!それが私の使命にして生きる意味」

フェイトはそういうとプレシアを抱きしめる。

背景に百合の花が咲き乱れる

その光景を見てドン引きするアルフとアリシア

しかし、その場所が危険であることに変わりはない!!!

重要な事なので二回書きました(b y作者)

その後フェイト、アリシア、プレシア、アルフの四人は無事に時の庭園から脱出に成功し、今では坂本銀次のふしぎな家での生活が始まった。

そして、数日後学校に来なくなった銀次を心配して三人の女の子が銀次の家を訪れる事になった。

バイストンウエル？いいえ海鳴市です

銀次の家は大変な事になっていた。

庭ではなのはとフェイトが戦闘を行っていたが、未熟なのはではフェイトに勝てるはずも無くTKO

リビングではアリサ・ローウエルとアリサ・バニングスの二人による舌戦を繰り広げていたが、あらゆる面で天才性と経験を積んだローウエルに幼きバニングスは敗北

そして、銀次の部屋に突撃しようとしていた吸血鬼すずかは番犬アルフのバインドにより簀巻きにされベランダに干されていた。

その光景を見ておろおろしていたふれしあは誤ってお茶をこぼし泣き出す始末

「お兄ちゃんが帰ってくるまで私がしっかりしないと・・・」

アリシア31歳の悲壮な決意が運命を決定付けた瞬間だった。（無論ストレスで胃がマツハそして入院）

そんなカオスな事になっているとは知らない銀次は・・・

「・・・・・・・・・・はら・・・へっ・・・・・・・・た・・・・・・・・」

およそ72時間ほどフリーフォールを体験中

体力はばつちり！眠気も無い！あるのは食への飽くなき探究心

極限状態を強いられる銀次の脳裏に走馬灯が走る。

自分が今まで食べてきた物が脳裏を駆け回る

仙豆、たこ焼き、お好み焼き、焼きそば、はやて？・・・はやて!？
「そ・・・う・・・だ・・・は・・・や・・・て・・・な・・・ら・・・何・・・
か・・・食・・・わ・・・せ・・・て・・・く・・・れ・・・る・・・は・・・ず・・・
だ・・・」

極限状態の銀次が正気なはずも無い。

そして銀次が持っているジュエルシードが反応しないはずが無かった。

銀次はジュエルシードの魔力に包まれると虚数空間から消えた。

「もしもし海鳴警察署ですか？坂本課のリスティ警部お願いします。」
「ここ海鳴では常識であった」

類は友を食わせた

「ふく食った食った・・・さすがはやてだ。めちやめちや美味かったぜ。」

「おくそう言って貰えると嬉しいんやけど・・・たかだかインスタント食品（緑の狸）でそんなに絶賛されるなんて思いもせんかったで？しかし、銀次君一つ疑問何やけど、なんでその複雑骨折している手でふつうに箸持ててるんや!?痛くないんか?それともほんまは折れてないんか?」

「いやいや、しつかり折れてますがなく。ホレさわってみ」

俺はそれだけ言ってはやての前に手を伸ばす。

するとはやてはおそろのおそろ俺の手を触り

「ふん!!」

この馬鹿狸全力全開で握りやがった。

「おい、折れてるんだからもっと丁重に扱えや。複雑骨折している手を思いっきり握るなんてけが人に対してやるもんじゃないぞ」

「ってホンマに折れとるやん!!!というか痛くないんかそれ!」

「だから言ったじゃん折れてるって、あと痛い痛いけど別段そこまですで大した事はねーよ。じゃお腹も膨れた事だし俺はそろそろお暇するぜ。」

「え!?もう帰るんか?まだ12時半やで速過ぎるやん」

「知らないのか?帰宅部のスローガンは『俺たちには・・・帰る家があるんだ』だぜ」

「それはフカヒレやろ!」

「まーまー細かいことは気にすんなよ。お礼と言ったらアレだけど銀次特性カードをプレゼントしよう」

俺はその辺にあった八神家のメモ用紙を一枚拝借しさらさらっと書いてはやてに渡した。

「なんやねん銀次特性カードってこれ家のメモ用紙やろ!」

「まゝ気にすんなよ」

「まあええわ。で、内容は・・・(出きる範囲の事なら)どんな事でも

一度だけなら願いを叶えます。BY銀次ってなんやねん子供か!!!」

「失礼な!!!俺は子供だよ!?!子供で何が悪い!!!」

「開き直った!!!まあええわ、じゃあ早速使わせてもらおうで」

「おう、どんとこい」

「この家に今日から住んで」

「やだ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「自分出きる範囲なら何でもするゆうたやんか!!!なんやだましたんか!?!」

「だって帰宅部のスローガンに反発してるから仕方ないね。」

「銀次君一人暮らしなんやろ!?!海鳴市に住んでる人はみんな知ってるんやで!!だったたら何の問題もないやんか!!!」

「問題しかないわボケナス。俺は俺の家を捨てる気は無いぞ。だが、まーはやてが家に泊まる分には全然かまわないけどな。部屋ならまだあるし」

銀次は知らなかった。

今現状自分の家にテストロッサ家全員が住んでおり、既に部屋が無い事を

「なら今日は銀次の家に泊まるで〜ホレ、道案内せいや」

「ああ、それくらいならお安い御用だ。カードは次にとつときな」

そういうと銀次ははやてをおんぶし八神家を出た。

銀次に取ってはいつもの事でもはやてにとつては恐怖以外の何者でも無かった。

はやての「どひやあああああああ」という女の子に有るまじき悲鳴をBGMにして、銀次

は50kオーバーの速度でガードレールの上、塀の上、屋根の上、電柱の上をびよんぴよん跳んで跳ねて前宙、ロンダート、バク宙やりた
い放題

しかも一本下駄でそれを行っているのにもかかわらず、まったく振

動が無いのだから銀次の身体能力は計り知れない。

この時はやてはただ、ただ無事に着くことを祈る事しか出来なかった。

その後はやての祈りが通じたのか、奇跡が起きて馬鹿が止まったのか、馬鹿の家に着いたのか、はやてには分からなかった。

なぜならばやては既に目をぐるぐる回して気絶していたからそんなはやての状態に気が付くわけも無い銀次はある家に着いた。

というか自分の家にだが……

客観的に観ておかしい所が多々あった。

何故すずかがベランダに干されているのか？

何故庭になのはちゃんやんが仰向けで倒れているのか？

何故フェイトはサガット見たいに腕を組んで高笑いしているのか？

世の中というか我が家も不思議で溢れていると思う銀次であったが、気を取り直してドアを開けるとそこには涙目のアリサと高笑いをしているリサが居た。

「何してんだお前ら？」

銀次が疑問を口に出しリサが答えようとした瞬間

「それh「ストップだ。ジュエルシールド不法所持の疑いで同行してもらおう。坂本銀次」……誰？」

上を見上げると小さい男の子が黒い格好で空を飛んでいる。

また魔法使いか……

「僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。さあ行くぞ」
クロノはそれだけ告げると銀次をバインドで拘束した。

拜啓

まだ見ぬお父さん&お母さん&お姉さん……事件です。

家に入れません。(泣)

ようこそ――アースラ 《紳士の社交場》

まばゆい光が無くなるとそこはどこかの近未来的なメカニックな場所だった。

周りを見るとなのは、アリサ、すずか、フェイト、アルフ、はやて（気絶中）、アリシア（ストレスで胃がマツハ）、プレシア（睡眠中）、リサがいた

「さあ、艦長がお待ちだから速く行こう。きりきり歩け坂本銀次」

何故俺だけバインドで縛られて命令されているのか分らないが：まあこの際よしとしよう。しかし、はやては一体何時のまにアルフに持たれたんだろ？

「なあ、俺だけ扱い悪くね？」

リサに話しかけるも

「今まで生きてきた中で良いこと何かあった？」

頭を捻って考えて見たが二度目の人生で良いことは・・・

「リサの体を隅々までじっくり」ちよつとなんて事思いだすのよ!!!」それ以外は特に思い出さないなあ〜」

リサが顔真っ赤にして騒ぎ出す。

そして不穏な影も動き出す

「その話じっくり聞きたいな銀次君」

後ろからがしつと肩を掴まれ、強制的に振り向かされると目が真っ赤になっているすずかが居た。

「お任せろ。」

俺はそれだけ答えるとすずかの耳に口を寄せ、アナゴボイスで語りかける。

その時の俺が思ったことを超リアルに事細かく伝えた結果

目どころか顔すらも真っ赤になってボンって音が出るくらい茹だったすずかの出来上がり♪

ついでにリサも茹だった。

時間というものは集中すればかくも速く過ぎるもの・・・

話が終わる頃には既に艦長室に着いていた。

クロノさんが艦長室に入る前に周りを見渡す

「ところで高町「なのは!!」名前は知っているよ?高町さんバリアジャケットを解除してもらっていいかな?そこのフェレットも元の姿に戻ったらどうだ?」

「ううう分ったの」

「あ、そうだった」

なのはちゃんは桃色の光に包まれると元の色気の欠片もないトーレナーにまるこちゃんはいているようなスカートに戻る。

ユーノ君も民族衣装というなのファンキーなカッコになつていた。たぶんこれが異世界の最新のファッションなのかもしれない。

現にクロノさんなんて肩に刺が着いてるし・・・おそらく核の炎に包まれたのかもしれないな

そんな事をつらつらと考えていたらぷしゅーっとドアが開く音がした。

中を見て一瞬だが時間が止まった。

艦長室では恭也さんが一心不乱に小太刀で盆栽をカットしていた。

その隣では涙を流しているグリーンヘアの女性の足を茶髪の女性が突っついていた。

周りの人たちは割れ冠せず仕事をしている。

否、若干であるが前かがみ気味であり、皆目を瞑っているが口の端が笑いを堪えている。

なるほどココが紳士の社交場だったか・・・

その光景を見て我に返ったクロノさんがグリーンヘアの女性を慰める。

「エイミイ!?!かあさんに何やっているんだ!!!」

「いや艦長が足痺れたっていうからちよつとね」

茶髪の女性エイミイはそう言ってさらに足を突つつく

「うっう・・・クロノオオお母さん足痺れちゃたよお」

まあ外国人じゃあ正座はきついよな

なのはちゃんが兄を止める

「お兄ちゃんなにやっているの!?!」

「いや、この盆栽が無造作に伸びていたのが気に入らなくてつい」

「自分の家じゃないんだから自重して欲しいの!!」

「う、すまん」

なのはちゃんに怒られて素直に謝る大学生

「ねえ銀次なんであのお兄さんは自分より弱い白い子に謝っているの?」

その光景を見て不思議に思ったのか質問するフェイト

「ああ、恭也さんって言うんだけど・・・シスコンだからね。お前と一緒で」

俺がそういうとフェイトは悲そうに顔を歪める

「つまり恭也さんもプロジェクトFの遺児なの?」

「ちやうわボケ娘」

プレシアが絡まない限りフェイトのポンコツは具合は改善されな
いんだろうな・・・

一人ごちる銀次であった。

なのは俺の魂だ!!目ん玉かつ開いて良く見やがれ
!!!これが御神流師範代高町恭也の本気だ

リンディ艦長の足の痺れがようやく取れた。

そのことにクロノさんもほつとしていたに違いない。

そして話し合いが始まる。

まず事の発端であるユーノ君がジェルシードを地球に21個落とし、その回収に一人で現地に赴いたと

「そして封印に失敗し、さらにジェルシードにフェレットにされるなんて尽いてないよな? 拳句の果てに運動神経がマイナス方向に振り切ってるなのはちゃん巻き込むだもんなあ。よかつたなここが裁判所じゃなくて、有罪確定だぜ?」

「違うからね?!僕はジェルシードに願った訳じゃなくて魔法でフェレットになったんだからね!!っていうか銀次も僕が人間に戻るところ見ていたじゃないか!!!」

「運動神経がマイナスになんて振り切つてないの!ちよつと苦手なだけなの・・・それに確かに最初は巻き込まれたけど、今は私の意志でやっているの!」

ユーノは息を荒げ銀次に突っ込みを入れ、なのはちゃんはなんだか分らんが何かを決意したみたいだ。そういえば昔から何故か良い子ちゃんに拘っている変わった子だと思つたが・・・ま、所詮は他人の家の子だ。俺には関係ねーな

「まあユーノの言い分は良いとして、なのはちゃんはそれで怪我しちゃつたら大変なんじゃねーの?ねえ恭也さん!」

「そうだな、まあもし何かあつたら、その場合はユーノの命と原因にはキツチリけじめを・・・さて、そういえばなのはがユーノをつれて来たとき額に傷跡があつたな。あの時は転んだと言つていたが、詳しく聞こうか!!!」

ゾクゾク!!!なんだ?今背筋に急激な悪寒が走つたぞ?

「そ、それはジュエルシードとは関係ないの!!封印し終わって飛んで

さて、現状だ。

俺の正面には現代に甦った忍者のような剣士が居る。

鋼のシスコン番長こと“高町恭也”さんだ

普段だったら俺と恭也さんの実力はどっこいどっこい何だが・・・
今日に限っては非常にまずい。

剣士は守る者が居れば強い

そして兄は高町恭也高町なのは妹の高町なのは見ている前ではおよそ3倍の力が出ている。もし
かしたら5倍かもしれないが・・・

じゃあ俺はというと念能力を使えば身体能力だけは互角に持ち込めるかもしれないが・・・あの神速っていう訳の分らない奥義を使われたらと思うと震えが止まらない。

「ハアアア」

恭也さんの気合の入りまくった剣筋が・・・って首狙いかよ!?!
「ぬおおおおお」

俺はそれを上体を逸らし何とか避けるも前髪がはらりと切られていた。

「もらったぁー」

そして、もう一方の小太刀が振り落とされる。

「やらせはしないいいい」

俺は小太刀が体に触れた瞬間に体を横に回転させて避ける。

そしてそのままの勢いで胴回し回転蹴りを放つ

死角から美しい弧を描いた俺の踵が恭也さんの顔面に当たる・・・

ことはなかった

「無駄だ」

一瞬にして影も形も無くなり、俺から少し離れた場所に恭也さんはいた

「もはや神速というより瞬間移動じゃねーか」

マジで愚痴の一つも零したいぜ。

こっちははなっから念能力を使っているのに動きなんて影ぐらいしか見ない。

大して向こうはまだまだ余裕がある

さて・・・どうしたのか？

死に際の集中力も発動させて過去の出来事を思い出す。

後の先を取る？・・・んな事やったら俺の首が飛んじまうわ！考えるな感じるんだ？・・・斬られて死んじまうわ!!見えないものを見ようとする？・・・速すぎて見えないのに何をつて・・・あつた一つだけ方法が、しかし間に合うのか？違うな出きなかったら俺に未来は無い。

「やるしかないなら・・・やるしかない」

両手の平にオーラを集める。

イメージするのは妖怪仕置人の渡辺威狩

開け、開け、開けええええ

「何をしているのか知らんが無駄だ。」

恭也さんが殺気つと共に切りかかった瞬間だった。

今までほとんど見えない動きが俺には止まって見えるようになった。

右の小太刀で首を狙い、左の小太刀は脇腹を切りつける動き

俺はそれを生身の腕で受け止めた。

「なっ!!あの速度を止めるとはやるじゃないか・・・」

恭也さんが驚いたのは一瞬だったがすぐにまた離れた。

「言っておくけど恭也さん・・・今の俺はさっきまでの俺より16倍強いぜ」

今まで散々ボコられたんだ。たっぷり仕返ししてやるぜ。

「ほうそれは面白い冗談だ」

不適に笑う俺を見て恭也さんもまた目をギラギラと輝かせた。

寝てる子を起こすな!!!

銀次と恭也が過激な戦いを行っている時だった。

「た、大変ですリンディ提督!!海でジェルシードが六つ同時に発動しました。」

「なんですって!!すぐに映像をまわして」

大きな画面が空中に現れる

当然その場にいる者はみんな見る。

映像では六つの竜巻が荒ぶっていた。

「た、大変なの!!高町なのは出撃するの!!!」

「君は話を聞いていたのか!?危ないからここは僕たちに任せてくれ」

「で、でもものには力があるし・・・それに早くしないと海鳴市に迷惑がかかっちゃうの」

「だから素人の出る幕じゃないだ」

クロノとなのはが出る出ないと言い荒らそう。

二人のやり取りがうるさかった所為か、睡眠中のぷれしあが目覚めた。

「うろううるさいな」

「あ、母さん起きたの?」

寝起きのぷれしあも映像を見て驚く

「な、なにこれ映画!?!」

「あ、違うよ。ジェルシードが暴走してね竜巻が起きたんだ。今管理局の人たちが解決するからもう少しだけ待っててね」

すぐさまフェイトが説明をする。

しかし、それを聞いて納得しないのがお子様であるぷれしあだった。

「なんで待たないといけないの?私はずばばーんってやるからフェイトデバイス貸して」

「か、母さん危ないことはだめだよ?」

ぷれしあをなだめるフェイトだったが・・・

「良いから貸して!!!」

「はっハイ」

哀れぶれしあの強い口調によりバルデツシュを差し出すフェイトだった。

バルデイツシュを強く握るぶれしあから途轍もない魔力が開放させれる。

「プレシアさん何をやる気ですか!？」

最初に異変に気が付いたのはリンディだった。

そして次にクロノとなのはもぶれしあを見て、冷や汗を流す

だが、ぶれしあは止まらずにデバイスを振り落とす。

「さんだーれーじー♪」

舌つたらずな言葉とは裏腹に凶悪な魔法が完成する。

次の瞬間映像の中で暴れる竜巻に画面いっぱい雷が降り注ぐ

数秒だったろうか、それとも数十秒だったのか定かではないが雷が終わった後そこにはジュエルシードによる災害は綺麗さっぱりなくなっていた。

だが、一番の問題はそこでは無かった。

エイミイさんが青い顔をしながら

「た、大変だよクロノ君!!!」

「ああ、すさまじい魔力だったな。竜巻が吹き飛んだところなんかはじめて見たよ。」

「測定したらSSランクはあつたけど……って、違うのそれもそうなんだけど……別タブで見ていた銀次君と恭也さんが真っ黒焦げになっているんだよ。」

「な、なんでだ!？」

エイミイはそう言って模擬戦室を映し出すとそこには二人の黒い物体がぶすぶすと煙を出していた。

「にやああああ、お兄ちゃーりーん」

その映像を見てなのはが叫んだ。

すずかとアリサとはやては気絶

フェイトはあわわわしている。

アリシアとリサは大爆笑

加害者ぶれしあは再度寝た。

△△△△△

数日後

そこには元気に走り回る銀次と恭也さんの姿があった。

あの後リサが持って来ていた仙豆を口移しで食べさせて貰い二人は九死に一生を得た。

なお銀次と恭也は二人そろって肩をすくめて同じことを言っていた

「もう雷はこりこりだ。」

そんな二人は今日も今日とて譲れない何かをかけてブツカリあっていた。

6月4日ははやての日

その日八神はやてはそわそわしていた。

初めて出来た友達に自分の誕生日を祝って貰うために、それとなくそして大胆に告知した。

〈回想〉

「なあ〜銀次君。私明日は誕生日やねん。だから・・・私の事を崇め奉って祝って欲しいやけど」

ぐつつふ美少女はやてちゃんの上目遣い＋涙目のコンボやでえ〜お馬鹿の銀次君を釣るなんて朝飯前やあ！

内心では腹黒な事を考えていた。

それに大して銀次はやてを一瞥して、ため息を吐いて答えた。

「明日は・・・予定がなんも無いから良いよ。面倒だけど」

その一言ははやてに取ってかなり複雑であった。

回想終了

なんや思い出したらムカムカしてきた。なんで誕生日の私のため息つかれなあかんねん。

しかもなんで私は銀次に君なんて付けてるんや!?呼びすてでええやん。

思っている事とは別に料理を作り始めるはやてであった。

時刻は17時を過ぎた頃だった。

はやては目の前にある大量の料理を見て、正気に戻った。そして、自身の才能に喜びと恐怖を抱く。

無論料理はプロ顔負けの出来であるが、それとは別に冷蔵庫の中身は綺麗さっぱり無いからである。

「まあ〜作ってしまった物はしゃくないし・・・銀次君が全部食べてくれるやろ・・・ってまた銀次に君って付けてもうた。」

そんなときにピンポンとインターホンが鳴った

はやては玄関に向かいドアを開ける。

「遅いで・・・ぎん・・・じ・・・くん?えっと自分なにしてんねん?」

そこには首根っこを捕まれ暴れる二匹の猫と服がボロボロで顔が若干赤く蒸気している何故か色っぽい銀次がいた。

「ういーやべえぞーこの猫変身してんぜー」

「やばいのは銀次君の方や!!なんや酔っ払っているんか?っていうか小学生の分際で飲んじやあかんやろー」

はやての叫びに二匹の猫もさらににやーにやー叫び激しく抵抗をする。

しかし、猫がどんなに暴れても銀次は平然としており、業を煮やした猫は銀次の腕を爪で引っかく

「ああん、痛えじゃねえか」

「にやにやああああああああ」

哀れ猫の爪は銀次の腕を引っかく事は出来たが、その代償は大きく爪が剥がれてしまった。

「まあーなんでもいいやはやてはやく中入ろうぜ。」

「うえい!!せ、せやなこっちやで」

「ああんお邪魔しやつす」

こうして八神はやての誕生日パーティーは始まった。

五時間後そこにはもはや（大量の料理）何もなかった。

ただ、リビングに酔いつぶれてるはやてと二匹の猫・・・元い二人の大人リーゼロッテとリーゼアリアと銀次が居た。

そのそばには翠屋のシュークリームが転がっていた。

~~~~~

おまけ

銀次が酔っ払っていた理由

前日にはやてから誕生日をすると聞き、翠屋に向かい桃子さんにシュークリームを頼んだ。

そのとき桃子さんに悪魔的な悪戯心が芽生える。

「銀次君・・・この服を着てくれたら良いわよ」

そう言つて取り出されたのはフリルが大量に着いたメイド服

「なんで？」

「かわいいのが悪いと桃子さん思います。」

無論美人に弱い銀次が目をキラキラさせる桃子の頼みを断る事はせず、さつさと着替えに行った。

銀次が戻ってきたときカウンターには桃子の姿は無く、何かをやり遂げた美由紀の姿があった。

「あれ、桃子さんは？」

「うん？ちよつと用事があるつて言つてたよ。それにしても銀君メイド姿もかわいいねえー」

「でしょ!?!でしょ!?!めつちやファンキーじゃない!?!」

「いやいやモンキーでしょ」

「いや〜バイベでしょ〜つて邪魔しちや悪いからもう帰るね」

「うん、また来てね。」

銀次が翠屋を出てから5分後、厨房では顔を真っ赤にして倒れている桃子と士郎が発見された。

二人のそばにはシュークリームとアルコール度数96%を誇るスピリタスが空っぽの状態で転がっていた。



目が覚めたら偉い事になっていた件

あく良く寝たー。

なんやお酒ってあんなに気持ち良く眠れる物なんやなー。

はっはっは誕生日だったから、はやてちゃんもはっちやけちやったんやな。

だって、目が覚めたら黒いパツツンパツツンの薄着でピンクと金と赤で銀の四人が私に膝立で頭を下げている。

・・・その後ろには逆さに釣るされてる銀次とアリアとロツテうーん、どうやら幻覚が見えてるようやな！

「お目覚めになられましたか主。我ら闇の書の守護騎士ヴオルケンリッターが来たからにはもう安心です。この不届き者の不法侵入者を直ちに排除します。」

そう言くと、ピンクはどこからか炎を纏った剣を取り出して銀次に向ける。

「恨むなら自分を恨むんだな。」

私が止めるまもなくピンクはそれだけ言うた銀次を切ってしまった。

ピンク髪もといシグナムは困惑した。

回避された訳でも、防がれ訳でも無い。

渾身の一撃を叩き込み、ずしりと手応えもあるのに関わらず、切られた当の本人は今だにすやすやと寝息立てている。

「なんて頑丈な奴だ。ならばヴィータ」

「任せろシグナム。今すぐアイゼンの頑固な汚れにしてやる」

赤髪のもとい少女ヴィータはどこからかゲートボールに使われるようなハンマー取り出す。

「ちよっ!!ちよつとまっつてえくな。」

さすがにそれを見てまずいと思ったはやては急いで止めるも、振るわれたハンマーは銀次の顔面目掛けて振るわれた。

「あぶねーじゃん」

パリンと何かが割れる音と銀次の声が聞こえたのは同時だった。シグナム達は目を疑った。

鉄槌の騎士ヴィータの一撃を片手で止めている。

目の前の銀次に魔力を使った形跡は一切無い。

ならば、答えは一つ

生身の体で岩をおも壊す一撃を止めたのだ。

その事実が気が付くとシグナムは獰猛に笑い、銀次に剣を振り落とす。

「やめい言うってんのが聞こえないんかあゝ!!」

はやての声が響き渡り、シグナムは振り落とす剣を止めるも、一瞬遅く銀次の頭に直撃した。

~~~~~

その後は守護騎士全員2時間ほどはやてによる説教が続いた。

「まあゝみんな反省したから銀次君許したってくれへんか？シグナムとヴィータも謝罪しなさい」

「む・・・すまない」

「・・・悪かったな」

シグナムとヴィータは銀次に謝罪するもその顔は不満たらたらであつた。

「まー次からは気を付ければ良いんじゃないやね？」

「な、何言ってるんねん!? 銀次君シグナムに斬られて、ヴィータにハンマーで殴られたんやで!? 私が言うのもアレやけどもつと怒つてもええんやで」

「つつつてもなあゝ。別段怪我も何にも無いし問題ないつしよ？」

「いやいや、自分十分偉い事になってるで・・・」

はやての言葉道理に銀次の体には未来シグナムにより袈裟切りにされた痕と今回シグナムに逆袈裟に斬られたため、×字の痕がくつき

り残っているのだ。

「まあ、死んで無いから問題無し!!はいこの件は終了じやあ俺はそろそろ帰るぜ。」

「そのボロボロのシャツ着て帰るんか?リステイ警部呼ぶ?」

はやてがうきうきしながらスマホを握ると銀次はげんなりしながら答えた。

「いや、それは勘弁して欲しい・・・あ、そうだはやてなんかTシャツない?」

「Tシャツ位ならあるけど、女物のしかないで?」

「うん?問題ないべ。おそらく身長は俺の方が低いし、かわいいし、やせてるし、あとかわいいし」

「ちよお待とうか?自分今なんでかわいいって二回言ったんや?なんや重要な事やから二回言ったんか?あんまり調子乗つてるとしباكで?」

銀次の発言に自称超絶美少女はやてはしづかにキレる。

「主はやてなら私にお任せを」

銀次をぶちのめすチャンスだと思いシグナムは進言するも

「シグナムは黙ってて」

年齢9歳の少女とは思えない低い声により、シグナム驚き黙ってしまった。

「ええやろう、そこまで言うならまたびつくりさせたる!!女子力高いはやてちゃんなめんなよ」

はやてはそれだけ言うのと財布を手取る。

「で、どこに向かうんだ?」

「商店街や」

はやてと銀次は商店街に旅立つ。

黒いピッチピチの守護騎士を共に連れて・・・

次回予告

事件が終わっても少女達の戦いは終わってはいなかった。

不屈の心を胸に秘め、気になるあの子にOH砲AN撃ASHI撃するの!!
リリカルマジカル高町なのはがんばります。

理想の世界を守るためなら、修羅になるのも厭わない!!
拳闘少女フィジカルフェイトがんばります。

バカと真面目は水と油

それは普通の人が見たら異様な光景であった。

車椅子の少女を先頭にそれを押す白髪の少女のごとき少年。

その後ろは黒いパツツンパツツンなスーツの美人二人・幼女・犬耳
としっぽをはやした筋肉質な男性

一般的な感性を持つ人なら、思わず2度見するレベルのものであつた。

しかし、ここ海鳴市では違う

羽を生やして空を飛ぶ警察

神妙不可思議にて可愛い退魔剣士

お揚げを食べる事に異常な執着を見せる化狐

大福が好きな電撃を操る狐

猫又の少女

戦闘民族高町家などが居る

そう言った観点から見てみると彼らはさほど大した事はなく、驚かれる事は無かった。

ただ一人を除いて

「な、なんでヴォルケンリッターが坂本と一緒にいるんだ？」

少年特有の高い声、年齢の割りに高めの身長、黒髪、黒縁メガネの岸本隆がスーパールの前にいた。

その声はタイミングが悪く、場が静まり返った本の一瞬に発せられたため、八神家と銀次にも届いた。

当然、初めて会う人に自分達の正体が知られている事にシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマルは警戒心を高め、自分達の主であるはやてを守るように前に出ようとしたが、それよりも早く銀次が行動を起こした。

不自然に腫れ上がった右手の一指し指を岸本に向ける。

その動作に誰もが緊張した。

事実、指を向けられた岸本はびくつと体を震わせていた。

そして、その様子を見ながら銀次は告げた。

「入り口で止まんじやねーよ馬鹿!! 入るか退くかどつと決めろやボケナスが!!!」

岸本は涙目になって入り口から退いた。

買い物も終わり一同お店を出てはやての家に向かう

はやてはとうとう我慢出来ずに銀次に声をかけた

「なあ銀次君ちよつと聞きたいんやけどええかな?」

「なんだよ八神? 難しいことはわからないぞ」

「そんな、難しい事でもないんやけど・・・後ろにおける黒めがね君は銀次君の知り合いなんか?」

聞かれた銀次は後ろを振り向く

そこにはさつきお店の入り口を塞いでいた岸本が居た。

手にはデバイスという名の西洋剣を握り銀次を見ている。

「いや、ただのクラスメイトだ。たぶん家も同じ方向なんじやねーの? 知らんけどね」

「あれ? おかしいなあ、私も聖小に一時期通っていたんやけど何時から武偵みたいな制度になったんや? というかそんなニュース聞いてないで? シグナム達は何か知ってるん?」

「すみません。主はやて私達は今日始めて闇の書から出て来たんで、その、この辺りの事は詳しく無いです。」

シグナムがそう言うとはやてもそういやそうやったね。はやてちゃんうっかりしてもうた。てへぺろとごまかすのであった。

だが、そんな空気も一瞬にして無に返した。

岸本を中心に結界が張られ全員が閉じ込められたのだ。

「貴様一体何が目的だ!! 事と次第によっては斬る」

「待ってくれシグナム。君達はその男にだまされているんだ!!!」

「なんだと!?! 我らの仲間であるザフィーラを愚弄するか?」

「なんて野郎だ!! ふざけたこと言いやがってアイゼン出番だ。」

「仲間を愚弄するなんて許せません。」

シグナム、ヴィータ、シャマルは同じヴォルケンリッターであるザフィーラが馬鹿にされたと思いい激怒する。

その様子に対応を間違えたと思い岸本は即座に弁明する。

「ち、違うザフィーラの事じゃない。そこにいる坂本銀次の事だ。こいつははやてを洗脳しようとしているんだ。……きつと、間違いない。だって踏み台みたいな髪の毛の色しているから絶対間違いない。うん」

最後の方になつてくるともはやただの思い込みであつた。

「……銀次にそんな器用な事出来る訳無いだろうが、変な事いうな。なあ銀次お前もなんか言つてやれ……よ」

岸本の言い草に飽きたなヴィータはそう言つて振り返つた。

そこにはいつ準備したのか紐の先に札束を付けてはやての目の前で左右に振っている銀次の姿があつた。

「さあ、八神はやてよ面白いアメリカンジョークを言え」

「む、無茶苦茶やで銀次君!!!!そもそもアメリカンジョーク自体がつまらないやんけ。」

しつかり反論するはやてで合つたが目は左右に揺れる札束に釘付けであつた。

「お前をかばつたあたしがバカだつたよ!!!!」

ヴィータ怒りの大上段唐竹割りは銀次の脳天に直撃。

銀次はなすすべなく一撃でヴィータに敗れた。

うわようし、よつよい

倒れた銀次の背に足を乗せ鼻息を荒くするヴィータ。

その光景を啞然と見つめる岸本

そして、その光景を一心不乱にスマホで取り続けるはやて

「よくやったで、ヴィータ・・・それにしてもまさか銀次君を倒せるなんてほんまこの幼女強かったんやな？」

「おう、一対一の戦いに置いてベルカの騎士に負けはないぜ」

そう答えるヴィータだが、やはり主にはめられるのはうれしいらしく顔がニヤけていた。

「そうだな、私も将としてうれしく思うぞ」

そこで、しやしやり出るシグナム

しかし、それを温度を感じさせない瞳ではやてはシグナムを見た。

「何言ってるねん。自分銀次君起こす事も出来ひんかったやろ？そんな者を将とは呼べへんやん。せやからシグナムは今日から烈火の騎士やで」

「な、なんだと（ですって）!?!」

はやての言葉にそれまで黙っていたシャマルとザフィーラは驚く

シグナムはその言葉に一瞬で呆然自失になった。

「手な訳で今日からヴィータは鉄槌の将やで、頼めるか？」

「任せろはやて!!!あたしがこの身に変えても絶対に守ってやるからな。」

「んっふっふ。じゃあ任せただく、じゃああとはツイッターで・・・」
そういうとはやては先ほど撮った写メをアップし、一言つぶやいた。

『銀次敗北なう』

その結果世界中からとんでもない奴らが海鳴市に終結することになるとは夢にも思わなかったはやてであった。

☆

「た、大変よ。すずかとなのはこれ見て」

「どうしたのアリサちゃん？」

「銀次のバカが赤毛の幼女に負けた画像がツイッターで流れているよ」

「な、なんで一体どういうことなの？」

「私にもわからないわ。でも、画像を上げた仔狸のコメントに銀次敗北なうって書いてあるから何かしら巻き込まれた可能性はあるわね。時間も10分前で・・・ってこれスーパールの近くじゃない行ってみましょうですか」

「待つてアリサちゃんいく前にフェイトちゃんも呼ぼうよ。もしこの画像が真実ならかなり危険なの」

「そうね。あの娘がいれば安心ね。」

アリサは納得したのか首を振る。

しかし、すずかは首を横に振る。

「あの娘はまだ家の子猫に対して行った事を謝って無いからやだ」

非殺傷設定だかなんだか知らないけど魔法を子猫にぶつけた件はまだ許してないすずかであった。

そして、その言葉にそういえばそうだったと思い出すアリサ

「じゃあ、その件もこのさい謝らせてやるの。」

なのははそういうと鼻息を荒くして、両手をぐつと握る。

どうやら本気のようにだ。

☆

とある男がそれを見たのは偶然だった。

赤いおさげの幼女が地面にうつぶせに倒れている白髪の少女の上に足を乗っけている画像

ほんの少しだけ気になり調べたのがきつかけだった。

だが、いくら調べても赤いおさげの少女については「何も判らない」ということが判った。

大して地面に倒れている白髪の少女だと思っていたら、実は少年だった。

この少年を調べたらなんと自分の知り合いの息子だと判明した。
男は娘がいることは知っていたが、息子が居るとは知らなかった。
だからこそ、男は知りたいと思った。

坂本ジュ李と坂本銀次

戦ったらどっちが勝つか？

男の胸に去来するのはかつて最強と呼ばれた化け物を倒すために
自らが作り上げたもの

通称深道ランキング

男は口角を少しだけあげて、作戦を練る

ブレーキの存在しない暴走マシン（ただし一人乗り）

なのは、さすが、アリサ達はフェイトに助力を求めるため銀次の家に向かった。

三人が銀次の家についたときすでに画像が上がってから30分は経過していた。

「ねえほんとにフェイトちゃんにお願いするの？」

この期に及んでもさすがはフェイトを呼ぶのに抵抗を示す。

しかし、そのすすかの言葉をぶった切ったのはアリサだった。

「あたりまえじゃない!! さすがにこうしている間にも銀次が……まー無事なんだろうけど……ちよつとぐらいは心配になるでしょ？」

当初は、彼女自身も当初は倒れた銀次の画像を見て動揺していたが、今思い返すとあの銀次が幼女に殴られた程度でどうにかなると思えず、言葉尻がどんどん弱まっていった。

「う、うん。そうだよ。何事もなければいいんだけど……」

心優しきすずかは銀次の無事を祈るも

「ぐだぐだしている暇はないの早く呼び鈴押してすずかちゃん」

なのはの急かす声に押されすずかは慌てて呼び鈴を鳴らす。

ピンポンつとどこの家庭でも鳴る一般的な音が響く

そしてパタパタと走る音が聞こえガチャつとドアが開く

ドアを開けた人物は目的のフェイト・テスタロッサその人であった。

「えーつとどちらさま？」

「フェイトちゃん!! きっかけはジュエルシールドなの。だから始めよう最初で最後の全りよっひ!!!」

なのはの言葉は最後まで言われる事はなかった。

何故ならフェイトの左拳がすでに鼻先にあったから……

「二人とも馬鹿なことしてないでやめなさい!!!」

アリサの怒声が響くとフェイトはなのはに突きつけた拳を下げる。

それを見てほっとするなのは

「全く二人とも今争っている場合じゃないでしょ?」

「う、うんごめんなさい」

「まあいいわ。そうだフェイトこれを見て」

アリサはそういつてフェイトに画像を見せた。

その瞬間温度が下がった。

「ねえこの赤髪の子はどこにいるの?」

底冷えするような声を出すフェイトは無表情であった。

人は怒りが限界突破すると無表情になるというが、今現在のフェイトはまさにその状態であった。

そんな状態のフェイトに声をかけられたアリサは涙目で語る。

「ヒイ!!い、今はわからないですけど、この画像の場所が近くのスパーだからその周辺にはいると思います。」

「じゃあ、みんな行くよ」

フェイトの冷たい声が辺りに響くとなのは達は涙目でそれにしがって着いていった。

そして、画像が掲載されてから50分後、現場にたどり着くとそこには・・・

地面に仰向けに大の字になって倒れて荒い息を吐き、大きな胸を下させ顔を赤くするシグナム。その姿はナチュラルにエロかった。

そして、同じく倒れている岸本

二人に言える事は疲労困憊で動けないということだ。

そのそばでは面白いことが言えなかったはやてがシヨボーンと落ち込んで、シヤマルとザフィーラが懸命に慰めていた。

そして被害者で有り、加害者でも有る原因を作った張本人はこう語る。

「ひっぐ、ひっぐ、もう、勘弁してくれー」

ヴィータは銀次に肩車されており、頭に顔を埋めてガツチリしがみ付き体を震わせてガチ泣きしていた。

その光景を見たはずかとアリサは、若干だがイラつく

当然である心配をしていたのに、いざ現場に着くと当の本人は幼女とキャツキャウフフ嬉しい恥ずかしい肩車をして楽しんでいたのでから・・・

もし、そんなこと言われたら、ヴィータは声を大にして否定していただろう。

だが、実際はあまりにも怖かったため、ヴィータの口からこぼれるのは泣き声だけであり、そんな風に思われるとは露ほどに思っていなかった。

そんな中なのは「銀次君一体何があったの？」と心配し、声をかけるも銀次からは「何、大したことは無い。ちよつと風を体現しただけだ」と言つて意味の分からないことでなのはの頭を混乱させた。

そしてフェイトは泣いているヴィータをただ冷たい目で見続けた。

坂本銀次は悪い子なの？

「坂本おおお前は屑だ!!外道だ!!俺が知っている転生者の中でも邪悪な存在だ!!!」

岸本は唾を飛ばすがごとく、腹のそこから声を響かせ、怒鳴りつける。

それも色んな色のバインドに糞虫みたいにされて地面に横たわりながら

「お、おう。さすがにそこまで言われると俺も傷つくんだが・・・」
「まあなんにしても主の催眠を解いてもらっていいか?」

シグナムはそういうとある方向・・・八神はやての方に指を向ける。そこにはつまらないアメリカン・ジョークを自分で言っては落ち込みを繰り返す少女、もとい八神はやてが居た。

「H A H A H A っってなんやねん。全然おもしろくないやんけ!」

割と大丈夫そうに見えるはやてだが、そばでシャマルとザフィーラはオロオロするばかりで役に立たない。

「全くはやての部下を名乗るんならば、たとえ意味不明な事でも、つまんなくても笑う努力ぐらいしろよな」

銀次はそういうとはやての正面に立ち、一指し指をはやてに突きつけてくるくる回し、呪文を唱える。

それは三日に一回のペースで嫌な事が起きるとある金持ちのバイクチームのリーダーである岡ミドリ(30代でカツラ)に同じバイクチームである床屋の伊藤(仮)がかけた魔法の言葉。

「忘れろー忘れろー」

「てめーふざけるなあああああ」

銀次の行動にとうとう堪忍袋の破裂した岸本が魔力を開放し、バインドを一瞬にして破り銀次に殴りかかろうとした瞬間

「忘れた!!!」

百万ドルの夜景も霞みそうな程の笑顔ではやてはそう宣言し、歌いだす。

「たっぬきがでったぞ〜♪。たっぬきがでったぞ〜♪」

その場の空気が凍りつく、誰もが奇怪な目ではやてを見る。岸本も振り上げたこぶしをどこにぶつけなければいいのかわからない。

そんななかあつけらんかとはやては銀次にどこまでも普通に話しかける。

「なんや銀次君？はやく家まで車椅子押ししてーな。私の夕飯食つてくやろ？そーういえばなのはちゃんたち何時からいるんや？」

「えっと・・・今さっきだけど？はやてちゃんさっき言つてもが？」

聞かれたなのは答えようとしたが、途中でフェイトの手により途中で口をふさがれる

「うん？さっき？何のことや？」

頭を捻って考えてみてもさっきまでの黒歴史ははやての頭からきれいさっぱり抜け落ちているので？マークが頭上に噴出す。

「ちよつとなのは!!はやてはどうもしてないわよ。ね、すずか？」

「う、うん。いつも通りのはやてちゃんだったんじゃないかな？・・・よくわかんないけど？」

「??まゝ些細な事やしええか、じゃあ皆家に行くで」

そして一同ははやてを先頭に動き出す。

「たっぬきがでつたぞ〜♪。たっぬきがでつたぞ〜♪」

はやての奇妙な歌とともに・・・

はやては家に着くと早速料理を作りキッチンに消えた。

そのためリビングにはシグナム、ヴィータ、シヤマル、ザフィーラとなのは、フェイト、岸本がまるで対立でもするののかのようにテーブルを挟んで睨み合っている。

そこに銀次は我関せず、はやての部屋にあった漫画を勝手に拝借して待ったり寛いでいる。

その銀次の両サイドにはまるで借りてきた猫の様におとなしく座っているアリサとすずかが居る。

ただ、二人とも銀次の腕に抱きつく形ではあるが、それほどまでに目の前の音無き無言のにらみ合いは二人の精神を削るものであった。

「(はやて (ちゃん) はやくもどつて来なさいよ (来て))」

まあ二人の少女の願いは案外早く叶ったわけではあるが・・・

「みんなーカレー出来たでー銀次君配膳手伝つてやー」

「おお、わーったよ」

銀次はそういうと立ち上がる。

すると銀次の腕に抱きついていて二人も当然立ち上がる分けて・・・

「わ、わたしも手伝うによ」

「う、うん人数が多い方が速く終わるもんね。」

そして三人はリビングに向かう

三人は見た。

少し大きめなお皿に湯気が出ている熱々のおいしそうなカレーライス

「銀次君一人でイケルやろ?」

はやての指さした先には一皿のカレーライスがある。

「いや、俺中国雑技団でも何でもないんだけど?」

「まあまあええから腕伸ばしてなー」

はやてはそれだけ言うのと銀次の頭に一皿、両肩に一皿づつ、両腕に三皿づつ。計9皿乗せる事に成功した。

「まあ乗つけた私が言うのもなんやけど、落としたりただじゃ済まさんからね。」

はやての目がマジな事に気がついた銀次はただ、ただため息を一つ吐いたのだった。

とはいっても、脅威のバランス感覚を誇る銀次に取っては別段何一つ恐れる物がないので問題なくリビングに歩いていった。

なお残りの二皿はアリサとすずかが仲良く持つてきている。

リビングに戻った銀次の姿を見た一堂はそれぞれがすばらしい反応をしていた。

中でも岸本は頭に皿を乗せている事に酷く激怒しており、銀次に怒

鳴り散らす。

「坂本お前が今やつていることは食に対する冒瀆であり、作ってくれたはやてに失礼だろうが!!」

「そのはやてが俺の頭に皿を乗つけた張本人なんだが?」

「うるさい! どうせお前が何かやつたに決まっているんだ!!」

「あくもく、それでいいよ。めんどくさい」

銀次はそう言いながらも器用に皿をテーブルに置き、最後に頭の皿を自分の前に置いた。

「ほら、シグナム達も聞いたろ? 結局こいつは最低の屑野郎なんだ。だけど安心してくれ俺が必ずはやてを救うから」

ドヤ顔を披露し、シグナム達に振り返るも・・・

「お前は一体何を言っているんだ?」

話の流れが一向にわからないシグナムは単純に聞き返し

「もう、ほっといてカレーだっけ? シグナムも食べようぜ。ギガうめえから、な?」

「そうですよ。私こんなにおいしい食べ物初めてですし」

「うむ、うまい」

シヤマルとヴィータとザフィーラはカレーに夢中だった。

「坂本また催眠術をかけやがったな!!」

「元凶ははやての作ったカレーで間違いないだろ? つーかメガネは何かに付けて俺を悪者扱いしようとするけどなんでなん? もしかして、この前鉄山靠したことまだ根に持ってるの? あれだって先に手を出したのはお前だから俺は悪くないぞ? それとも覚醒して強くなった後なのに、手刀一発で敗れたのがそんなに気に入らないのか? 自分の弱さを人のせいになしないで貰いたいものだね。」

「違ってお前が踏み台転生者で悪だからだ!!」

「踏み台? はまー良いとして、俺が悪ってどういうことだ?」

「かなり前になのはのショートケーキ銀次君食べたの」

「なのはちゃん今良い所だから黙ってようね。諭吉上げるから静かにしているんだよ」

銀次は懐から財布取り出し諭吉一枚を取り出し、なのはに渡す。

なのははそれを受け取り自分のポケットに突っ込む。

あまりにも自然に行う買収行為にみんなのなのはを見る目が変わる。

それに気がついたなのは「違うのく違うのく今月はちよつとピンチだったから、銀次君に融資してもらっただけなの。お金は死ぬまで借りてるだけだから問題ないし・・・」

まごう事無き悪はなのはであった。

そんな空気を払拭するためか、アリサがこの前の体育授業を思い出した。

「そういえばあんた体育の授業で握力計壊したわね。」

「か、軽く握っただけで壊れるとは思わなかったんだ。今じゃ諭吉が飛んでいったのは良い思い出。」

そしてすずかのターンに変わり

「校舎の時計に弾丸ランナー決めたもんね。」

「あれは正直反省したし、だから俺の金で業者呼んで速攻で直してもらったんだから良いじゃん?・・・じゃん」

目がしどろもどろになっている銀次

「そういえば銀次君って前科持ちなんやろ?」

最後に超特大級の爆弾をぶん投げたはやて

「ほとんどしょ、書類送検だからセーフだし、保釈金にはちゃんと色付けてるし、問題ないだろ?」

「悪なの」

「悪だわ」

「悪だよ」

「でも、うちは悪でもかまわへんよ。この前助けてもらったし・・・」

「そっだよ!!!俺意識がほとんどなかったけど、大型トラックに鉄山靠かましてはやて助けたし、俺可愛いし正義だし」

「まあ結論から言えば悪っちゃあ悪やろなく。でも害は無いらしい・・・ま、ええんちゃうん。身近にそういうやかましいのが居てもおもしろいやろ?」

この日この場所に居たものは悟った。

八神はやての心の広さは鋼のシスコン番長と同等と言う事に・・・

お前にとっては未来の事、私にとっては過去の出来事

実は俺ってかなり幸運なんじゃないのだろうか？

今はただのちんちくりんでしかないはやてだが、将来は誰もが認める子狸になるし、なのはちゃん家に行けば無料でうまい飯が食えるし、フェイトは世界を狙えるから将来的には困らないし、リサのあんちくしょーはよくわかんねー事言ってるけど、天才だからしようがない。

なればこそ、多少の苦も苦じゃなくなる。

「ふぎけるなあ!! フェイトオオオ私のシュークリーム返せええええええ」

「銀次が言った!! 食卓とは神聖にして戦場でもある。お前は戦場で後ろから撃たれたに過ぎない。」

無理だよ。転生してから俺碌な目にあつてないもん。黄門様は人生楽ありや苦もあるさつて言ってるけど、俺人生辛くて苦しみが多すぎなんだよ。ストレスでかなり胃がキュンキュン言ってるもん。

「ぶっ潰す!! アイゼンでぐっちやくぐちやになるまでぶっ潰す」

「ゾットは言った!! 言葉は無粋押し通れ」

フェイト余計な事言うなよ!! 岸本君めっちゃこっち見てるじゃん。白目向いて金色のオーラが出ているんだけどこれどういう状態なの？ いや、確かに言ったことはあるけど・・・おれなんか基本全部なのはちゃんに盗られてるんだけどね。

「てめーだけは生かしては置けない。原作がこんなに捻じ曲がったのも俺が関わる事になったのも全て坂本お前の所為だ!!」

「そんな事俺の所為にされても困るんだが? というかこの件に関しては俺は全く、全然、これーぽっちも関係無いし」

ぶっっちゃけ原因は未来のヴィータだから今のヴィータには全く持って関係は無いのに、やっぱりフェイトは許せなかったのか・・・ デバイスを取り上げられた上にバインドで電柱に縛り付けられて、目の前ではやての作ったうまそうなケーキを全部食われたんだもん

なあ。

挙句言った言葉が“他人のデザートを食べるのはうまい”だもん。

まああの時はフェイトが大泣きしちゃって大変だったんだよなあ

）

「まくヴィータちゃんデザートぐらいで大騒ぎしちゃだめなの」

「じゃあなのはの貰うわ」

言うが速く、なのはの皿からさらっとデザートを驚頭し、むしゃむしゃと租借し喉に落とし口の周りに付いたクリームを舌で舐めとつたヴィータは言った。

「ん、フェイトの言った言葉が正しかった。他人のデザートを食べるのはうまい」

「ふええんなのはのデザートがあ〜〜」

哀れ弱者は全てを奪われるの巻

「お、おいヴィータさすがに謝った方が良いぞ」

「銀次のも貰うぜ」

そう言うのと今度は俺の皿にまで手を伸ばしたので少しお仕置きする事にした。

その昔とあるグレートティーチャー鬼塚先生はジェyson君と呼ばれた筋肉ムキムキの人物にデコピンをしました。

その結果ジェyson君は意識不明の重体になりました。

この俺坂本銀次の全力の限界の一步先まで全てを出し尽くす至高のデコピンを受けたヴィータはどうなるか？

試して見よう

「おい、ヴィータ少しばかりお茶目が過ぎるぜ？」

「間抜けが悪いんだっつべげら」

バアゴンつとデコピンの威力とは思えない音が響き渡り後ろの壁をぶつ壊し吹っ飛んだ。

「やっべーやりすぎた。はやてごめんね。」

「何してくれてんねん!!!」

目の前には視界一杯の鉄の塊が振り落とされていた。

一時間後

頭蓋骨陥没したヴィータはシャマルの尽力により奇跡的に一命を取り留めることができたが、しばらく口を利いてくれる事はなかった。

いや、反省はしているんだけどね。

終わる日常、始まる非日常

「銀次君家の壁は今どんな感じなんや」

「ああ、今恭也さん……なのはちゃんのお兄さんにボードを斬って貰ってそれを嵌めて、壁紙を張り直せば終了だな。」

「成る程わかったで、ただ何でなのはちゃんのお兄さんは小太刀でボード斬ってるんや？おかしいやろ」

はやての指差した先には回転剣舞6連を披露している黒装束の恭也さんと黄色のボンボンを持って応援しているなのはちゃん。そしてるろうに剣心を読んでいるアリサがいた。

「剣術道場の師範だからじゃね？切断面も綺麗だし、一ミリもズレが無いから問題ないべ」

そういう問題やないいと頭をかきむしりながら抗議するはやてだが、銀次からしたら何が問題なのか理解できずただ、苦笑いしか出来なかった。

そんなところにシグナムがお茶を飲みながら歩いてくる

「ふむ、なのはの兄上は相当剣の腕が立つと見える。是非とも手合わせを願いたいものだ」

「止めとけ、幕末の京都を生きた人間じゃないと相手にならねーよ」

「ふつ私とて古代ベルカから戦い続けてきた武人だ相手にとって不足にはならんさ」

シグナムはそれだけ言うのとレヴアンティンを取り出し恭也さんに向かって走り出した。

「なあはやて……俺がお前さんの家族？に対して口を出すのはどうかと思うんだが、今日辺り家族会議開いた方がいいんじゃないか？」

「せ、せやな」

はやてはそれだけしか言えなかった。

二時間後

そこには見るも無残な壁は無く、今では綺麗な壁が出ていた。

匠の剣術により、綺麗に切られたボードは銀次が運び壁に差込み、シヤマルとザフィーラにより壁紙を貼り付けて終わりを迎えたのだ。「皆さん本日は我が家の修理本当にありがとなく。お礼つて言つても料理ぐらいしかできへんけどおなかいっぱいたべてつて」

「何困つた時はお互い様さ。俺でよければいつでも手伝いに行くさ」「はう、恭也さん男前すぎる!」

その光景を少し離れたところで見ていた他の人たちは

「何が女つけが無い男だ。あのイケメンフェイスであんなことさらつて言えるんだから、真性のたらしじゃないか・・・ちくしょー実にうらやましい。」

「でも銀次君も知つてるとおりお兄ちゃんあれがデフォルトなの。でもなのはと同じ年のはやてちゃんにもそう言うとは侮れないの」

「二人ともはやてが恭也に惚れたと思つているの?」

「当然そういう流れだよアリサちゃん・・・私としてはかなり複雑だけどね。ところで銀次君は私の事好きにならないの?」

「俺!?!まあすずかの事は案外好きだよ?ただなあゝ知つての通り俺転生者じゃん?前世とあわせれば恭也さんより上だからロリコン判定になるのかどうかが案外気になるんだよね。」

「銀次君は中二病だから大丈夫だよ?」

すずかの言葉に一体何が大丈夫なのか首を傾げる銀次であった。

「うぐう、ああ」

「はやてどうした!?!はやて」

そんなとき突如はやてが胸を押さえてうずくまり、それを近くで見ている恭也がはやてを見る。

「銀次お前が持つている仙豆くれ!!」

恭也さんが銀次に叫ぶように言うも、銀次から非情に冷酷な言葉が返つてきた。

「ごめん、今持つてない」

恭也ははやてを抱えて病院に行くか、銀次の家に行くか少しだけ迷つたのは仕方の無いことだった。


~~~~~

「なはは、みんなごめんなあゝ心配かけて」

「もうびつくりするじゃないはやて」

「そうなのお兄ちゃんも血相変えて病院まで運んでくれたんだからね」

「でも、大事が無くてほんとによかったよね」

「ま、私もしばらくしたら退院できると思うし、もう大丈夫や」

病室の中ベットの中でからから笑うはやてと心配するアリサとす  
ずか

病状自体はたいした事無いと告げられ二人は安堵のためか笑顔に  
なった。

だが、今現在病室には居ない他のメンバーは屋上で話し合いをして  
いた。

「おい、シャマルもう一度言ってみろ!!!」

「待つのはお前だ銀次」

銀次が激怒しながらシャマルに詰め寄ろうとしたが、恭也さんに抑  
えられた

「だ、だからこのままだとはやてちゃんが闇の書の所為で死んじゃう  
の・・・それも年内までしか生きられない」

「そ、そんな!?なんとかならないのかよ!」

「主が苦しんでいるときに何も出来ないとは自分自身が不甲斐ない」

嘆くザフィーラは拳を握りすぎて手から血が零れていた。

「そうだ。魔力蒐集すれば、闇の書を完成させれば、治るんじゃないの  
か?」

ヴィータが継る思いで口にするも

「だが、それは主はやては望んでいない。」

「はやてが死んでからじゃおせーんだよシグナム。」

ヴィータの言うようにははやてが死んでからでは全てが手遅れにな  
る。

「じゃあ、決まりだな。俺もはやてには恩が有るから死なれちや寝覚めが悪い。もちろん恭也さんも手伝つてくれるよね？」

「ああ、今日知り合ったばかりとは言え、俺もはやての友達だ。友達を助けるのに理由は要らないだろう？」

「・・・なぜ、そこまで気障な台詞がスラスラ言えるのか、激しく疑問なんだが、ところでなのはちゃんはシャルと一体何を話しているんだ？」

「おい、シャルまさかなのはからも蒐集する気じゃないだろうな？」

「ええつと、なのはちゃん何だけどAAAランクの魔力だから、その、ね？」

「大丈夫なの私もはやてちゃんを助けたい」「じゃあはじめるわね」え？

「なのおおおおお」

「すごい、すごいわ、ほんとにすごい勢いでページが埋まっていくわ」  
本当にすごいのはなのはちゃんの同意を得た瞬間に行動に移したシャルだよ。

蒐集が終わった後そこにはぐったりしているなのはちゃんとマジか!? すごいすごい言ってるヴォルケンスと能面のような、悪鬼のような形容しづらい表情の恭也さんが居た。

ちなみにこの後我が家で寛いでいたぷれしあとフェイトもしつかり蒐集されました。

時は超えた、空も翔けた、あとは八神はやてを救うだけ

はやてを救うために魔力蒐集を初めて六ヶ月が経過した。

と言つても、なのはちゃん、フェイト、ぷれしあのおかげでだいぶ・・・いや、かなり余裕があったみたいだから、実際はたいした事はしていないんだが・・・つつても、俺は両手が複雑骨折しているから強制入院させられて結局何もして居ない。屋上の話し合いが終わった後に何食わぬ顔で病院内歩いていたら普通に医者にとっ捕まれたんだけどな・・・

些細な出来事だ。うん

まあそんな中でも入院中にリサがお見舞いに来てくれた。

「おお、リサ久しぶり〜元気してた？」

「あなたは一体どこの坂本銀次ですか？」

「どうやら俺は記憶から抹消されていたようだ・・・」

「全く銀次が何ヶ月も家に帰らないから、とうとうアリシアの胃袋が我慢の限界超えて大変だったのよ。それにアルフがアリサの家に行っただけ帰り帰ってこないし・・・ま、それはどうでも良いわね。」

「一体全体何が原因でそんなことになったのか激しく疑問なんだが・・・」

「端的に言えばフェイトがプレシアに46時中べったりしている光景は人として、姉として、かなりキツかったみたいよ。瓜二つだから余計にね」

「めんどくさいから一発拳骨でも落とせば」

「そしたら今度はアリシアに矛先が向いてね・・・その結果アリシアは胃に深刻なダメージを受けたのよ。」

悲しい事件だった

「まーアルフはアリサの家に居るんだろ？ペットの放し飼いは条例違反だった気がするが、まーアルフだし問題ないべ」

「そうね。私にそっくりなプリティでキュートでクールなあの子の家

に居るんだから、何も問題は無いわね。」

近い未来俺とリサはその事を激しく後悔するのだったが、このときの俺達には知るすべもなかった。

「ところで、銀次はなんで入院している訳？」

「お前の目には両腕までがっちり固定されているギブスが見えないのか？複雑骨折しているからだよ。」

「それが何だっけと言うの？普通の人なら仕方が無いけど、坂本銀次にとっては複雑骨折程度言い訳にも為らないわよ何かあるんでしょ？」

「・・・実ははやてもここに入院しているんだ。」

「というと、闇の書事件ね。」

「俺は詳しい内容は見てないから、分からないがどうにかしたいと考えてる。」

「奇遇ね。私もはやてには借りがあるから手を貸してあげるわよ。それにそのためにデバイスマイスターの資格も手に入れた訳だしね。」

「さっすが天才様だ。頼りになるぜ」

「忘れたの？私はアリサ・ローウエルよ」

100万\$の笑顔で語るアリサに不覚にもドキッとしたのは恋愛素人ゆえに仕方なし!!!

おまけ

アリサがお見舞いに来た次の日

涙目のなのはちゃんとユーノ君が俺の病室に来た。

「ふええん、フェイトちゃんにまた負けっちゃったの。」

「なのはは良く戦ったよ。でも接近すればギョラクティカ・フアントム。離れるとギョラクティカ・マグナムと付け入る隙が全く無いしデバインシューターはすり抜けるしどうなっているんだい銀次？」  
「そりゃまあ、天才剣崎順が編み出した原理不明のスーパーブローだからなあ。アレ破ったのは後にも先にも高嶺竜児ただ一人だし・・・」

「え!?アレ破ったの?どうやって?」

「確か高嶺竜児の左のブーメラン・テリオスと剣崎順の右のマグナムが打つかってそれぞれの手がお釈迦になった後、右のウイニング・ザ・レインボーとフアントムが打つかるんだが、ウイニング・ザ・レインボーが勝ったんだよ」

「よく分からないけど、フェイトちゃんに勝つにはテリオスとレインボーが使えれば勝てるんだよね？銀次君なのはにテリオスとレインボー教えてほしいの」

ふんすといきこんでいるところ悪いけど無理でしょ

「アレも原理不明だから無理。というか使えるのは高嶺竜児と大村竜童の二人だけだし・・・」

それを聞いた瞬間すごい勢いでツインテールが垂れ下がった。

なのはちゃんの感情と連動しているとも言えるのだろうか？

そう、思ったらがばつと顔を上げて涙目でにじり寄ってきた。

こりや恭也さんもシスコンに為るわけだ。

「じゃあフェイトちゃんに勝つためにどうすれば良いの銀次君」

聞いて来たからには答えてあげるのが世の情け!!!

「逃げられないように縛って砲撃でもしたら？」

「そっかバインドでグルグル巻きにすればすり抜ける事は出来ない！なのはこの方法ならきつとフェイトにも勝てるよ」

「じゃあ、さっそくフェイトちゃんに全力全壊の一撃ぶち込んでくるの！」

なのはちゃんとユーノはそれだけ言うとは病室を飛び出していった。

翠屋のシュークリームの箱を持って・・・

「せめてお見舞いの品は置いて行って欲しかったなあ〜」

無いもの強請りはしようがないから、寝るしかねえ

数時間後、カーテンを閉め忘れたため起きてしまった。

なんでまぶしいか窓を見たら一目瞭然！満月の代わりに空中に巨大なピンクの球体があった。

「な、なんだアレ!?!月からマイクロウエーブでも出てるのか？サテライトキャノンは確か青白い色だったような気がするけど?」

ポケにポケを重ねていたら、ピンクサテライトキャノンが下に向かって発射されたああああ

だが、そのとき不思議なことが起こった。

なんとピンクサテライトキャノンに向かって銀河を彷彿させる無数の隕石が・・・あ、対消滅した。

次の日なのはちゃんとフェイトが包帯ぐるぐる巻きで病院に搬送された。

そして何時地球に来たのか分からんがクロノさんとリンディさんがいきなり俺の寝ているところに来て説教し始めた。

眠くて適わないところに来たから「ああ〜はいはい。そうですね〜そうですね〜」って流したら、二人揃ってフライング・ボディプレスしてきた。

使っているベットがぶっ壊れたんだが、俺の所為じゃないよ!!!だからナスさん財布から諭吉取っちゃだめー

## 聖なる夜に戦いのゴングは鳴る

なのはちちゃんとフェイトの戦いから数日が経過し、本日はクリスマス。

なのはちゃんはフェイトとの勝負が相打ちになったのが、うれしかったのか魔法にどっぴり嵌って暇さえあれば空き缶をディバインシューターで撃って遊んでいた。

その様子を見ていたヴィータが何をとち狂ったのか、魔法弾を飛ばして邪魔したり、なのはちゃんの3時のおやつを食ったりやりたい放題やっていた。

たぶん、あれが騎士の可愛がりなのだろう。

子供だからと言って手を抜かない!!

何時だって自分の欲望に忠実、それがヴィータの信念なんだろう

そしてフェイトの方は相打ちになったのが気に食わなかったのか、病院の屋上で縄跳びをただひたすら行っていた。

時折「私は麒麟・麒麟児なんだ・・・」とぶつぶつ言っていたが、いやいや麒麟児は剣崎麟童だからね。お前はフェイト・テスタロッサだから、性別から何から何まで違うからね。

その日はザフィーラがフェイトの足元で白目を向いて倒れていた。盾の守護獣とか言っていたから、フェイトのサンドバックになっていたのだろうが、少女の拳に敗れるとは愚の骨頂なり。

だから水の入ったバケツをぶっかけて強制的に起こして上げた。

フェイトの拳ぐらいでいちいち倒れんじゃねーよ!!

ガッツが足りねえんだよ!!!ガッツがよく!!!

何? ジャブの威力じゃなくて、まるでフェニッシュブローみみたいだった?

だから、ガッツが足りねえんだよ!!!

てめえに今からゲッターガッツを注入してやるから、覚悟決めろやあああ

その後ザフィーラに鉄山靠をおこなったのは言うまでもない

とまあ、そんなことがあり、結果的に二人とも強くなったみたいだ





師が良くやる地獄縛りだ。

「さて、なんで俺なんだ!! ユーノにアルフにクロノや恭也だって居るじゃないか!？」

何か急に岸本が喚きだしたが、もしかしてびびってんのか？

男がびびって良いのはホラーとお化け屋敷だけだ！

「いや、これには深い訳が合って」この中で使えないし一番弱いからだよ」「なっ!？」・・・銀次はつきり言ってやるな」

「クロノさん・・・はつきり言ってやるのも優しさです。」

俺がそういうとクロノさんは深く溜め息を吐いた。

全くスーパーサイヤ人だとかなんとか良く分からない事言ってたけど・・・元ネタがドラゴンボールだったとは知らなかったぜ。だって俺ピッコロ大魔王編までしか見てないしな

「お、俺が弱いはずないだろう!?なんてったってスーパーサイヤ人はノーマル状態の50倍強いんだから・・・」

「50倍だろうが100倍だろうがお前自身がへっぽこだったら関係ないだろう」

事実すずかの家でやりあった時だっっていきなり金髪になってすげえ形相で突撃してきたから、びっくりしてハイパーオーラ切りで迎撃したらこいつ死にかけてたからな

「てな訳で黙って蒐集されろや」

「じゃあそんなわけで、シャマル行きまーす♪」

シャマルはニコニコしながら岸本のリンカーコアから容赦なく魔力を奪う

「ぐああああ」

岸本の絶叫じみた悲鳴が響きわたる。

「なあ、なのはちゃんやっぱり蒐集されたとき痛かった?」

「リゼロのスバル君が言ってた心臓をぎゅって驚頭かみされる感覚が一番近いと思うの」

なのおおおおってギャグ見たいに叫んでいたし、プレシアなんかすーわーれーるーってふざけてたけど、案外やばかったんだね。

フェイト? あいつは歯を食い縛って耐えたよ。

やっぱりそう考えると岸本って・・・

「やっぱり岸本はひ弱だな・・・」

そんな中魔力蒐集が終わったのか、はやてに変化が起きた

身長は高くなり胸が出て腰は引き締まりお尻も出て・・・マンドム  
ですなあ

髪は銀髪に変わり、背中に黒い翼が生えて、顔がリスティさん：  
だ・・・と

なんか俺の方を見ている気がするから、横に動いてみたが、目線は  
俺に一直線。

何だか偉い睨まれている気がするけど俺はまだ何もしていないは  
ずだ。

「坂本・・・銀次」

「うん？呼んだか、美人のねーちゃん？」

何故俺の名前をこのねーちゃんは知っているんだ？

「坂本銀次いいい」

そんなことを考えていたら、目の前にねーちゃんが現れ、ゴンって  
音とともに俺は殴られていた。

これぞ達人技!?フルコンボだドンツ

管制人格・・・どう見てもリインフォース曹長（大型種）に殴られて強制的に空を見る羽目になった。

思った事は夜空に浮かぶ北斗七星に寄り添う死兆星が見える事と顔が痛いつて事だ。北斗の拳だと見えたら死ぬって言われてるけど、現実だと見えなくなると死ぬらしい。まー実際は知らんけど、あと管制人格の拳は以前アルフに顔面パンチされた時より遥かに痛いけど、泣かない!!だって男の娘だもん。

「はああああ」

「ぐふううう」

そう思っていたら今度は左の肝臓<sup>リバーフロー</sup>打ちをされた。今度は思わず声が出てしまった。

幕ノ内一步に殴られた挑戦者は多分マジで苦しんだんだろうな・・・  
どうでも良いな

まあ、アレだ、二発つてことはわざとだよな？

ならこの坂本銀次容赦せん!!

両腕に力と気合いを込めてギブスを壊す

現れた腕つて言うか手の骨は完治しているが、なんか力加減が出来ないけど、まっなんとかなるだろ

そう思つて顔を上げた瞬間に打ち落<sup>チョップ</sup>としの右ストレー<sup>グライ</sup>トから左のスマッシュと繋がり、右手でアイアンクロー<sup>ト</sup>されました。

ああ、脳汁がほとばしるんじやああ

さらに止めとばかりに左手に魔力を溜める。

「あ、あれつてなののはの!?!」

「う、嘘でしょ!?!」

使つてる本人が言うんなら間違いない

驚くなのはちやんとフェイトとニヤツと笑うリインフォース曹長

「二デイバインバスター（なの）二」

声が重なつた瞬間に俺は砲撃と共に暗い夜空に吹っ飛ばされた。

俺ぐらいじゃないかな？何度も紐なしバンジーをした奴は・・・そ

れとも岸本が言っていた原作のアニメとやらはこんなにも紐なしバ  
ンジーをするようなクレイジーでエキサイティングなアニメなのだ  
ろうか？俺の知って言うアニメでこれと為を張れるのはエア・ギアぐ  
らいしか思いつかないんだが？

地面に叩きつけられた俺の腹に即乗り、管制人格はクレイジー・ダ  
イヤモンドばりの速さで殴りかかってきた。ただ残念な事にドラド  
ラーは言わないけど

「無駄無駄無駄無駄あー」

うん、間違いなくはやての影響だ。

みんな大好きDIO様！ちなみに俺も大好きだ。

全く関係無いけれど、アリサとすずかはやはり紳士って事でジョナ  
サンが好きで、なのはちゃんは承太郎が好き、意外にも恭也さんは  
ジョセフがお気に入りです。フェイトは康一君が好きって主人公じゃな  
いんかよ！

話しがそれだが、六連コンボ決められて言うことじゃないけれど、  
俺はぶつちやけ痛いの嫌なんだよね。耐えられるから耐えてるけど、  
とまあ、そんなわけでパシッパシッと拳を掴んで止める

「なっ!?!」

止められた事に驚いてる見たいだけど、不意打ちで殴られれば誰  
だって直撃するのは当たり前田のクラッカー

「スロー過ぎてあくびがでるぜってケンシロウなら言うけど、俺的に  
はかなり速いパンチだったぜ！まあ、見えてたけど・・・ねー」

ブリッジで管制人格を押し上げ、両脇に両足を通してそのまま転が  
す。そして俺は腹筋で起き上がる。

目の前には管制人格のお尻が突き出される

これこそ、秘技マンぐり返し

「高町家において古来より伝わる。悪い子供に対して伝統的なお仕置  
きを今からお前にしてやる！なのはちゃんこいつの足をバインドで  
固定しろ！」

「合点承知」

なのはちゃんのバインドで管制人格の足は固定された

「こんな物すぐに「そうはさせない」ひゃう!？」

スパンつと一発叩くとかわいい声がこだまする

昔テレビで見たとある部族が発狂しながら太鼓みたいな打楽器を素手で叩いていたから、あんな感じでやってみよう

両手にオーラ<sup>愛</sup>を込め……

「ふるえるぞハート! 燃え尽きるほどヒート!! 刻むぜ魂のドラムウウウ」

「い、いやああああん♥」

スパパパパパモミスパパパパパン

数分後

「あ・・あ・・う・・あ・・あ・・♥」

気がついたら、はやてと管制人格がお尻を抑えてビクツビクツてしてた。

「はあくいい気分だった。手に吸い付くような感触に良い弾力それに大きさも申し分無い。こいつはいい尻ドラムだったぜ。また叩かせてくれや」

「は、はいご主人様♥」

ご主人様呼びとはわかってらっしゃる。

思わずお尻なでなでしてしまった。

周りを見るとクロノさんと恭也さんは顔を下に向けて体育座り、すずかとアリサが手で顔を隠しているが指の隙間から見ていたのか顔を赤くしてキヤーキヤー言ってる。

「ねえなのは、なのはの家ではアレが普通なの？」

「さずがにお母さんもあんなスパンキング技術は無いけど、やっぱり悪い事をしたらお尻ぺんぺんされるのは当たり前前の事だよ。事実私もお兄ちゃんもお姉ちゃんもお父さんも例外なく経験したもん。銀次君はぺんぺんされていけないのが未だに納得いかないけど」

(私銀次の家に住んでよかった)

なのはちゃんとフェイトは何やら深刻な話をしているみたいだし、

岸本はいまだに地面に這いつくばってもぞもぞしている。これにて一件落着かな？

## 花咲く頃に会おうぜ

半年後そこにはミッドチルダで裁判を行っている俺が居た。

「判決を言い渡す。第97管理外世界出身の被告人坂本銀次は質量兵器を使用及びロストログリアであるジュエルシードを所持し利用、死刑に処す」

俺の横で歯を食い縛っているクロノさんとリンディさん

「ふはは、坂本銀次！やっぱりお前のような踏み台屑野郎はこの世界には要らない存在なんだ!!」

高笑いをして俺を指差して言いたい放題言ってくれる岸本・・・人に指差してんじゃねーよ。へし折るぞこのやろー

「と、言いたいところだが、アリス・ローウエル博士が闇の書を直すと断言した。そのためにはお前の体が必要だと言っていたので無期限のコードスリープの刑に処す事にした。ローウエル博士これだよろしいか？」

いつの間にアリスは博士になったのだろうか？

「ええ、構わないわ」

「な、なんだと!?また、お前は原作を壊すのか坂本!!!」

まあ、岸本がギャーギャー言ってる所まで打ち合わせ通りの展開なんだけど・・・何で俺が犯罪者になったのか・・・それは大体アリスとアインフォースと岸本のせいである

半年前

アインフォースの尻を太鼓に見立てた即興プレイから1日たった後、皆ではやての家に行きはやて特性のお好み焼きを食べていたとき、アインフォースは今にも泣き出しそうな顔をはやてに向け重い口を開いた。ちなみにヴィータがソースではやてのデフォルメ顔を書いて、さあ食べようとしたときだった。

「・・・我が主とご主人様、どうやら私は死ななければいけないみたいだ」

アインフォースの悲しげな声にはやての握るソースが勢いよく飛び出しシャマルに降り注ぐ

「キヤー!?ソースが、ソースがああ!」

反射的に思わず身を振ったシヤマルを誰が責める事が出来るだろうか?

だが、悲劇はこれだけでは終わらなかった。

シヤマルが身を振った為に切り分けもしていないお好み焼きにかぶり付こうとしたヴィータにぶつかりお好み焼きは宙に浮かびザフィーラの餌置けに着陸した。

「こんな・・・こんなむごい事が許されて良いのかよおお」

「ぐふふふ、普段なのはのおやつばかり食べてるヴィータちゃんだもん。天罰が下ってもおかしくないの!」

まさかガキ大将ヴィータに訪れた悲劇!?いや、これこそ因果応報・・・!!天罰!圧倒的天罰

「さあ出すの今までその小さな体に貯めたなのはの怒り、憎しみ、恨み、絶望、希望、おやつ・・・全部吐き出すの!」

今このテーブルに置いて凄まじい追い風を身体と心で感じ取ったなのはヴィータに追い打ちをかける。

この瞬間こそが下剋上の時、今を逃してはいけない!!

なのはの直感がそう告げた時だった。

「な、何でや!?ようやく辛いことが終わったのに何でそんなこと言うんや?」

はやての声が響き渡る。振り向くと涙を耐えながら叫んでいた。

「夜天の書のバグがあるからです我が主」

「ま、まさかヴィータ達もなんか!」

「いえ、騎士達は大丈夫です。ですが私の中にあるバグは半年ほどで復活して、また暴走してしまうのです。だから、「イヤヤ」・・・主」

「私が、私が絶対に何とかしてみせる。だからリインフォース消えちややだあああ」

両親を失い、それまで天外孤独だったはやてにとって守護騎士達は新しく出来た家族であった。

そして、過ぎた期間が極端に短いリインフォースも例外なくはやての新しい家族であり、それがたかだかバグ程度で失う事を許容する



ことが出来るほどはやては大人じゃない

「辞めろはやて！リインフォースだって本当はつらいんだ。でも、覚悟はしてきたんだ。覚悟を決めた人間には憐れみも同情も侮辱になるんだ」

ロック・リーの名言を悲しげに言う岸本

「なんや、それ「じゃあ侮辱してやるよ」銀・次君？」

「また、お前が出るか坂本銀次！」

「へっへっへっまあ熱くなるなよ。人間誰しも生まれたからには必ずいずれは死ぬんだ。それが寿命なのか病気なのかはたまた自然の災害或いは事故。これ等だったら嫌が応でも人は納得できるんだ、けど事件だったら話は別だぜ？この意味分からない訳じゃあないだろ」

銀次が言っている事は過去に起こった闇の書事件である

「ですがあの時は私の意志とは無関係で仕方なく」

「そうだぞ坂本！夜天の書の暴走は仕方がなかったんだ」

「いやいや、それは加害者側の都合で合って被害に合った人には全く関係ない話だろ？だから夜天の書が直ったって事実が広がればはやての名前だって広がるだろし、そうなりや被害者ヅラした奴らのはやてに言葉に出来ないようなあーんな事やこーんな事やそんな事までしちゃうかもしちゃうかもよ？」

例えばバグが無くなり無害になろうが、管理局で罰を受けたところで被害者ヅラした奴らが納得するかは別の話である。

「そ、そやで非力で美少女なはやてちゃんは無力やから捕まったらとんでもないことになるんやで！その辺りリインはどう考えているんや」

美少女+捕まえる||エロ同人誌的な展開を脳内でシユミレートした結果

銀次はスケベ顔になった。

はやては顔を手で隠していやんいやんしていた。

「・・・優秀な守護騎士になのはやフェイトといったお友達がおりますのでそう簡単には行きませんよ」

それを見ながらも絞りだすように告げるリインに銀次は現実を突

きつける

「それでは彼方をご覧ください」

銀次が指さした場所では、なのはを地面に倒しお好み焼きをもきゅもきゅ食べてる幸せそうなヴィータと自身のお気に入り服の服にソースが付いてしまい唾然としたシヤマル。

ヴィータに切り掛かろうとするもシグナムに邪魔される恭也。

我関せずお好み焼きを食べるザフィーラ

「それでもお前は大丈夫だと胸張って言えるか？」

「すみませんでした。」

「分かればよろしい」

リインの心からの謝罪に銀次もほっこり

「なんや釈然とせんがリインが納得したのなら良しとしよう」

「しかし、いくら私が前向きになったところで半年以内で暴走するのはもはや避けられない事実です。」

「そ、そうだ。リインフォースは助からないんだ。それなのに甘い戯れ言を言つて希望を持たせるな！このドクスがあ!!」

空気になってた岸本は突如我が意を得たりとばかりに銀次を批判し、更に罵声を浴びせるのを忘れない。

但し暴力は振るわない。振るったら最後、銀次の鉄山靠が音速の壁をぶち壊して迫るからである。

「昭和の脱獄王は言った。『人間のつくった房ですから、人間がやぶれぬはずがありませんよ』とこれを俺がアレンジすれば、人が夜天の書作り、人が夜天の書を壊したのなら、それを直すのも又人なりつてな・・・ま、リサがどうにかするだろうから気楽に行こうぜ」

困ったら天才に任せれば良い

そして任せた結果が冒頭の八百長裁判である。

「銀次あなたが次に起きる頃には私たちはもう大人になっているわ」

「なるほど、逆浦島太郎かあゝ」

「だから、安心して眠りについてね。銀次が稼ぐ10年を決して無駄にはしないから」

「へへ、期待しながら待つてるぜ。あ、そうだはやてに伝言頼む」

「何かしら？」

「花咲く頃に会おうぜ」

この日ミッドチルダの裁判に置いて、ロストログア不正使用および最悪のデバイス闇の書の主である1人の少年がとあるデバイスと融合し、氷付けになった。

その情報は瞬く間に次元世界中に伝えられ、管理局は更なる名声を得たのだった

時に人は過ちを犯す

「クックック、ようやく坂本のバカが原作から退場したか、しかし凍り漬けになった状態でというのが気に入らない。あわよくば死刑にされて死んでくれたらよかった、が・・・ま、管理局に其れを望むのが無理なことか、なんやかんやで二次創作物だとドン引きするほどブラックなのにな」

「マスターこれで物語も原作通りに進むのでしょうか？私にはここまですぐでイレギュラーな事が起こったのであれば正常になるとは思えません」

「奴がこれで原作に関わる事がなくなっただけ？問題なんてもう無いさ。ただ、リインフォースを助けられなかったのは正直悲しいが原作でも助からなかったんだ。これに関してはしようがないだろう」

「なら、アリシアとプレシアに関してはどう思いますか？あれは愚者が助けたそうですが？」

「その点だけは良くやったと褒めてやりたいところだが、英雄王ギルガメッシュの“王の財宝”を使って蘇生したんだろ？他人の物と自分の物の区別が着かないのがそもそも屑なんだ。勝手に使って良い代物じゃないのにそんなことも分からないからあいつはほんとに屑野郎なんだ!!」

岸本の価値観では原作に登場しない白髪的美形キャラは全員踏み台屑野郎という認識であった

そして踏み台転生者は全員“王の財宝”を持っていると思っっているのだが、なんとというはた迷惑な勘違いであろうか・・・実際には銀次はFateを知らないのだ。

岸元と銀次は同じ転生者では有るが、そもそも同じ世界ではないのである。

なお、銀次が転入仕立ての時は髪の毛が真っ赤だった事は岸本の口グには残っていなかった。

「仮に刑が終わったとしても、10年以上も凍り漬けになっていたなら闘う事はおろか日常生活だってままならないはずだし、そうなれば

テスタロッサ家や八神家も愛想を尽かすのは当然の事だ。」

全身複雑骨折している状態でも痛みに眉一つ動かさずに普段通りに生活できる銀次が果たしてそんな状態になるかは疑問ではある。

「ならば、その時に坂本に言ってやる『お前みたいな体が不自由で元犯罪者が彼女達に付き纏うな消えろ!』ってな!そして、原作が終わったら俺がヒロインを総なめしてやるぜ!」

「マスターその発言は踏み台ですよ」

「!？」

自身のデバイスに鋭いツツコミを受ける岸本であった

^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^

そして次の日

「プレシア・テスタロッサだよ〜よろしくね♪」

「アリシア・テスタロッサです。ハア〜ナンデワタシマデ」

「フェイト・テスタロッサです。趣味は拳闘で、目標は鴨川源二の鉄拳を越えること」

元気いっぱいなプレシア

最近退院したばかりの疲れきったアリシア

我が道を一步一步踏みしめて行くフェイト

「私は八神はやてやよろしくしてな〜」

車イスではあるが今日から復学を果たしたはやて

クラスに美少女がそれも4人も入って来たことに男子から拍手喝采が巻き起こるが、その時岸本に電流走る

坂本銀次の席に目も眩む程の狐耳としっぽを生やした美少女が座っていたのだ。

本日クラスに新たな転入生としてテスタロッサ一家と八神はやてが来てクラス内がフィーバー状態にもかかわらず

岸本の耳に入らず、ただ狐耳の美少女“天狐”をずっと見ていた。

程なくしてクラス内も落ち着いていたが、テスタロッサ一家とはやてがなのは達と合流できたのはお昼頃であった

「それにしてもフェイトちゃん達が転入してくるなんて驚いたの！」

「・・・むしろ何で今まで学校に通ってなかった事に疑問を持たなかったのよ私は・・・」

「でも、銀次君は居ないんだよね」

なのはは驚きつつもフェイト達が転入してきた事を喜び、アリサは自身の違和感に疑問を感じ、すずかの言葉で空気が重くなるも

「むふふ、そのためにわっちが銀次の代打で出席しているのじゃぞすずかよ！さあ、寂しいならわっちの胸に飛び込むが良いぞ」

両腕を広げ、小学3年生にしては豊たかな胸を弾ませて慈愛の表情を見せ「うえるかむなのじゃ」とのたまう天狐

やはり同じ人外同士であるためか、はたまた天狐のカリスマ性に依るものかは不明だがすずかは天狐の胸にダイブする

そんな光景を見てはやては罪悪感の為か言葉がこぼした

「やっぱり私が悪いんやなあ」

結果としてははやてを助ける為に銀次が犠牲になったのだから、はやては心を痛めているのだ。

「あ、違うのはやてちゃんを責めている訳じゃないの」

「そうよアイツは何時だつて自分の勝手気ままにやるんだからはやてが気にすることは無いわよ」

「ち、違うんや銀次君が氷漬けになる原因は私がリインフォースを助けてつて銀次君にお願いしたからなんよ」

「二ど、どうゆうことなの（よ）」

「私が以前銀次君からご飯のお礼にもらったお願いメモ用紙を見せてダメ元で頼んだら快く引き受けてくれたからちよちよいのチヨイだと思ったら、まさか10年間のコールドスリープの刑になるやなんて思わなかったんや」

はやては懐から以前銀次が書いたメモ用紙を取り出しアリサとすずかに見せると二人はわなわなと身体を震わせる。はやては何かしら嫌な予感が働いたが、動く事が出来なかった。

「二どご飯のお礼でこんな素敵な物を貰えたの!？」

銀次の事が大好きなすずかにとっては食事のお礼がこんな素敵な物だとは思わず動揺を隠せなかった。

「うぐぐ、そのメモ用紙があれば銀次を意のままに……はっ！もしかしてなのはも似たようなの貰ってるんじゃないでしょうね!？」

「どうなのなのはちゃん正直に答えて欲しいな?」

この中で一番銀次との付き合いが長いなのはにアリサ・すずかによる獣の眼光がなのはに突き刺さる。

「にやっ!にやのは諭吉しか貰った事ないの!だから無罪なの!そう言えばママは肩叩き券を貰ってたし、パパは指圧の券を貰ってたぐらいな」

何故なのはがここまで動揺しているかは無論すずかとアリサの眼力……だけではなく、過去に銀次から巻き上げた大量の諭吉により贈与税が発生し、それが警察にばれて厄介になったことがあるからだ。

これには銀次も驚き、お詫びの記しとして後日高町夫妻に送ったのである。

ちなみに銀次に肩を叩かれた桃子は次の日絶好調だったと言う、しかし士郎は「指圧の心は母心……」とのたまう銀次に嫌な予感を感じつつも、任せた結果「やべえ2・3ミリポイントが外れた!」の発言とともに指圧による失敗で15ポイントのダメージに力が3下がり、何故か満腹度が30%下がったのであった

井の中の蛙大海を知らず、されど空の深さ（青さ）を知る

天狐ちゃんが転入してから俺は脇目も降らずに修行に励み小学校を卒業し、中学校に入る頃には俺は更なる強さを手に入れることが出来た。

管理局に囑託魔導士として入った事により、実戦経験も大分積み重ねることが出来たのが、一番の要因であつたのだろう

まあ、なのは達も魔導士として活躍してみたいなので、強くはなっているだろうが、それでも俺の方が強いに決まっている。

今の俺ならば坂本を殺す事なんて赤子の手を捻るようにたやすいのは想像に難くないからな

これなら俺は天狐ちゃんと付き合う事が出来るだろうし、なのは達を守ることもたやすいだろう

だから、分かりやすく『Dimension Sports Activity Association』通称D S A A ようは魔法戦競技のチャンピオンである現次元世界最強のフェイトに戦いを挑んだのだ。

「やあああ」

フェイトの鋭い左のジャブが俺の頬に突き刺さる。

避けたはずだったのに……思った以上に伸びるフェイトの左のジャ

ブ

スピード？違う拳の位置はそのまま前に出たのか！

まずい距離を詰められると ギョラクテイカ・マグナム G M が飛んでくる

公式戦でも行われたフェイトの戦術

まるでお手本のような綺麗なワン、ツーでありそれゆえに防ぐ事が非常に難しいのだが

「ぐっまだだー」



男である俺ならジャブを耐えてあえて距離を潰せばギャラクテイカ・マグナム G M 打てないはずだし、打てても威力は半減するから反撃のチャンスになる。それに一発、たった一発だけでも入れば形勢はひっくり返るはずなのだ。

それなのにフェイトは決め技であるギャラクテイカ・マグナム G M を潰されたのに、涼しい顔をしながら俺の拳を蹴りを避けるだけじゃなく、あるかないかの一瞬すら見逃さずカウンターを決めてくる。

「うおおお」

「遅いよ」

こうなれば形振り構ってなどいられずに本気の一撃を振るうもフェイトに触れる事はただの一度も叶わず、逆にカウンターを決められる寸前でゴングが鳴り試合は終了した。

「そこまで！試合はフェイトの判定勝ちだ。また、一つ強くなったなフェイト」

「まだまだ目標には程遠いけどありがとう恭也さん」

「フェイトちゃん強いの！」

「銀次の弟子って言うのは強ち間違いなかったのね」

「ふふん、フェイトは私のご主人様だからね強いのは当たり前だよなのは」

「左だけで勝つなんて凄いよフェイトちゃん」

「ふふ、ありがとうみんな」

「ところでわっちのお揚げはまだかのー」

「ふふふ、天狐ちゃんは花より団子なのね」

「何を言っているすずか!? わっちは団子なんぞ食べれんぞ」

「そういうことじゃないわよ！」

上からなのは、アリス、アルフ、すずかがフェイトを誉めちぎりフェイトもまんざらでは為さそうだった。

だが、天狐ちゃんが俺に興味を全く示していないのが悲しい

「な、なあフェイト何で俺にギャラクテイカ・ファントム G F を打たなかったんだ？」

打たせないように対策をしてきたが、フェイトは打つそぶりさえみ

せずに最後まで終了ただのジャブしかしてこなかった。これは対策が有効と見ていたが、現実は違った。

「ファントムを打たなかった理由？ 必要が無かったからだよ。あの程度のジャブで出鼻を挫かれる相手にファントムを打つほど私は鬼じゃないよ」

「なっ!？」

「岸元は確かに力も才能もあるし、何より銀次と同じ転生者だから強いのは当たり前なんだ」

「そ、そうだよ俺には力も才能もあるから強いし坂本のカスに負ける筈がないんだ」

「そうだ、そして俺は誰よりも努力をしている自負がある！」

「銀次君は惰性で生きている所があるから仕方がないの」

「それってだめじゃない」

「けど、銀次が強いのはたしかだよね」

「人外よあいつは理屈が通じないじゃない！」

「で、話は変わるけど銀次と恭也さんが本気で闘ったらどっちが勝つと思う」

「お兄ちゃんかな？」

「恭也さんでしょ？」

「恭也だろ」

「恭也さんかな？」

皆がみな恭也さんの名前を上げるのは当たり前だ。

坂本が勝つなんてあり得ないからな

だが、フェイトと恭也さんの意見は違った

「多分だけどギリギリのところまで恭也さんは銀次に負けるよ」

「嘘だろ!？ 恭也がカスに負ける筈ないだろフェイト」

あの戦闘民族 T A K A M A T I が負ける？ フェイトは冗談のセンスがないな

「いや、フェイトの言うとりだ。行き着くところまで行けば俺はギリギリのところまで恐らく負けるだろうな」

「な、何でだ!？」

「命を賭ける事は意外と誰でも出来るけど、銀次は命を捨てる事が出来る。それゆえに相手は銀次の狂気に吞まれてほんの僅かな揺らぎが生まれる」

「勝負の瀬戸際で一瞬の迷いは命取になるからね」

「守りたい人、生きようとする意志は何よりも力を与えるが、それゆえに死者には勝てない。何故なら死者は恐れるものは何一つ無いから、どんな人であれ行き着く所まで行けば必ず揺れる」

「だから、銀次に勝つには圧倒的なまでの力か或いは同じ考え方の狂人じゃないと無理だよ。多少の差異なら無理矢理に揺らして覆しちゃうからね」

「それはあいつの転生特典により得た物だから本人の実力じゃないだろう！」

「そうだ、あいつの転生特典である王の財宝なら何かしらの秘薬的な物があるはずだ！」

「畜生が！ドーピングするなんて卑怯じゃないか！」

「銀次の転生特典？ああ、リビングいっぱい敷き詰められた福沢諭吉さんと冷蔵庫にぎゅぎゅっと押し込められた豆だけど・・・あれは傷を治すだけでそんな効能なんて無いのだけだ」

「え!?!お金と豆？他に剣とか槍とか色々な武器を飛ばしたりとかしていなかったか？」

「うーん、私は見たことないけどなのははどう？」

「私は諭吉ちゃんしか見たことないの」

「俺も見ることないな。前に忍の家で銀次の秘密を無理矢理に吐かせたが、そんな話は聞いてないしな」

「じゃ、じゃあイツがうそをついてるだけじゃないのか」

「それはない（の）（わ）（よ）」

「そもそも銀次はバカだから嘘をつけない」

「皆からの一斉の批難に岸元は衝撃を受けたが、フェイトの一言により、若干ではあるが溜飲を下げる事が出来たのだが、よくよく考えてみるとそのバカに負けた自分はバカ以下になるんじゃないかと思いい、やっぱり腹が立つのであった。」

## 幕間 不思議の国のリインフォース

主はやて如何お過ごしでしょうか？リインは今ご主人様の夢の中で修行しております。

夢の中・・・本当に、ここは夢の中なのだろうか？

いや、夢であつて欲しい！こんなのが現実であつてたまるものか！

「おじやる丸様！今日こそはこのオカメ姫と一緒に寝るのです」

「い、嫌じゃ！我のことはほつといて欲しいのじゃ！この化け者め！」

「おじやる丸様！何度言えば分かるのですか？このオカメは女性でございます！」

「お、女!!お前のような女がいるか!!北斗神拳伝承者として退治してやるのじゃ」

「平安京のおなごを甘く見てはいけませんぬ」

「北斗神拳奥義北斗百裂拳」

「あーたたたたたたたたたた、ほわっちやあー」

「消える消える消える消える消える消える消える消える消える消えろーろー」

二頭身位の二人の小さな子供が戦い始めると一瞬で筋肉ムキムキの某世紀末救世主に変化した

悪夢だ、悪夢が私の目の前にやって来たのだ

「おーい、リインフォース！南斗水鳥ラジオ体操の時間だぞ」

後ろでは角の生えたヒヨコとご主人様が無心に手を交互に振っている。

「リインフォース酷いっぴー！おいらはヒヨコじゃない！サザエでございますーすー」

「ぶはは顔と声がそっくりだww」

「私の心を読むな!!」

「ぴええ」

ご主人様が笑顔なのはうれしいが、乙女の心を読むなど言語道断！

怒りそのままにデイバインバスターをヒヨコにぶっぱなした私は悪くない

「き、きすけー」

ご主人様が叫ぶが時既に遅し、地面に横たわりこんがり焼けたヒヨコのサブレが出来上がった

「・・・ビーム突っ込みなんてアニメの世界だけだと思ってたけど現実に来るやつもいるんだな」

「次郎君、意外と世間って広いようで狭いからメルヘンの国でも使えるやつは居るんじゃない？ほら、あそこの二人だって天破活殺撃つてるし」

ご主人様が指差す方向は勿論おじゃる丸とオカメ姫である

「あんなのがメルヘンの住人な訳ないだろ！」

全くである。

だが、何故飛べない・泳げない半魚鳥の訳のわからん中途半端な生物がご主人様に突っ込みを入れているのだろうか？とりあえず撃つておこう

「デイバインバスター」

「甘いわ！南斗水鳥拳奥義飛翔白麗」

くっ!? 飛べないはずの次郎が跳んだだと！

だが、魔導師相手に空中戦を挑むとは身の程を教えてやる

ご主人様の見ている前で無様を晒すがいい

どんなに高く跳んでも、重力に縛られたものはいずれ落ちてくるのが道理である

「響け終焉の笛！ラグナロク」

哀しみをしり、愛をその胸に刻んだ者のみが会得することが出来る北斗神拳究極奥義無想転生ならば避ける事が出来ただろうが、何者にも成れない所詮次郎君では焼き鳥？

焼き鳥？いや、焼き次郎はリインフォースの嫉妬の炎に焼かれたのであった。

「・・・ひっでえーや」

その光景に銀次も思わず声をもらしてしまったのは仕方がなかった

た

虎の尾は踏んではならない（戒め）

その日管理局内は大いに荒れていた。

「クロノくん今言ったのはほんまなんか!？」

「ああ、ゴールドスリープされていた銀次が居なくなっていたんだ。ご丁寧に映像も残してだ！」

歯を食い縛り耐えているクロノだが、拳を強く握り過ぎて血が滴っているのだ。

10年前の裁判からクロノは自身の無力を嘆いていた。

弁護席に立ちながらも何一つ弁護を赦されず。

寧ろ死刑に成らない程度に重い罪に課さなければならぬ

しかも、被告人であった銀次本人に土下座までされて頼まれてだ。

執務官として、人して、やってはいけなかったと後悔ばかりしてい

る日々だが、それでも銀次が守りたかったものは・・・

「クロノ君映像送ってくれへんか？こっちで必ず見つけ出してぶちのめすわ」

だいぶ過激になっていたのであった。

もし、この光景を銀次が見ていたら遅い反抗期かなと遠い目をしながらつぶやいていただろう

「ああ、その時は僕も必ず参加させて貰う」

クロノ提督が艦隊を引き連れて、三期に登場することが確定しました

そんなことは露知らず岸本は苛立ちながら管理局内を歩いていた

「ちくしょー何ではやては俺を機動六課に誘ってくれなかったんだ！」

グチグチと文句を洩らしているが、それはむしろ当然である

なのは、フェイト、はやて率いるヴォルケンリッターといった超一流の魔導士が全員枷を外した状態で部隊の運用を行ってしまったのだから・・・

それに対してミッドチルダの地上の英雄レジアスが猛反発したの

は当然である

だが、交渉役で来たのがはやてではなくアリサ・ローウェルだったのが、レジアスの運の尽きであった

やれ予算が足りないと言えば、金（無論銀次の）ならあるからむしろ要らないわよと突っ張られ

近隣部署からクレームが来たらどうするんだ！

役に立たない部署なら潰してあげるわよ？そうすればなけなしの予算も少しは回るんじゃない？

そもそも高い魔力持ちはリミッターを付けるのが決まりだ！何かあつたらどう責任を取るつもりだ！

うるさいわね！部下のミスは上司の責任なんだから、なんかあつたら最高評議会に文句を言いなさい！そもそも試験的な運用なのだから何かがあつてくれないとデータが取れなくて困るのよ。そんなことも分からないからあんたはメタボなのよ

魔力持ちやレアスキル持ちには弱者の気持ちかわかるまい

ずいぶん甘つたれた事をいうのね。自ら鍛える努力をしないものが強くなれる訳が無いじゃない

傷ついて、血を流して、骨を折って、漸く強者になれるのよお分かり？

だが、それをするには時間が足らん！そのためには質量兵器が必要ではないか

だったらその辺に転がっている石でも投げなさいよ

それでは格好がつかないではないか

自身の腹見ていえメタボ

レジアスがあー言えば、アリサはこー言う

会話のレベルは極めて稚拙ではあるが、驚異的なレスポンスの速さに狼狽える事も無く案も出しているので一応かろうじて建設的とも言えなくもないやり取りではあつたが、レジアスが最終的に折れる形で話は着いたのであつた

なお悪口はご愛敬である

そして、岸本がそんなやり取りを知っているはずがなく、仕方がな



いので三期に備えて地上に配属してもらい偶然を装って助けに行く  
作戦を考えたのは言うまでもない

それではこちらの映像をご覧ください

はやてとなのはとフェイトの三人はクロノから送られてきた映像を確認するため、隊長室にて映像の確認を行っていた。

報告を受けた時は顔を真っ赤にしていたクロノであったが、はやてに映像を送る時にはクロノの顔色が真っ青になっていた。

その時ははやても少しばかり疑問に思ったが、気にせずに隊長室にて映像の確認を行うことにしたのだ。

「じゃあ、映像を流すで」

「絶対に銀次を助け出すんだ」

「そ、そうだねフェイトちゃん」

そして、氷漬けになった銀次が消失する映像が流れた

画面中央に氷漬けになった中華服を着た美少女顔の馬鹿野郎が幸せそうな顔で眠っている

5分経過

10分経過

今の所異常は特に見当たらない

「何や、まだ変わらんやんちよつと早送りするで」

はやては映像を二倍速にしようとした瞬間だった

画面中央の銀次を覆っていた氷に突如罅が入り氷が砕けてしまっ  
た

「なんや、一体何が起こったんや」

驚くはやてをよそに映像は流れ続ける

突如氷から解放された生物が無事であるかなど決してあり得ない

「誰か速く銀次を助けてあげて!!」

はやては叫ぶ

しかし、この映像は既に過去の出来事であり、過去を変える事など不可能である

そんな事は分かり切っている。だけど、それでも、それでもはやては叫ばずに居られなかった

「あ、銀次が動いた」

「なんでやねん!!」

「やっぱり銀次君バグキャラなの・・・」

映像の中の銀次はもぞもぞと動き出している

まるで身体の調子確かめるようにゆっくりとそれでいて大きく深呼吸を行い、腕を胸の前で交差したり、上体を反らし、廻し、ジャンプといった奇妙な行動が映されている

それはまるでラジオ体操を行っているとでもいうのだろうか・・・

「せやから何でラジオ体操してんねん！きっしょいわ!!」

「まー銀次だから」

「銀次君とラジオ体操は切っても切れない関係だから」

すずかとアリサから聞いたなのはが語る銀次のエピソードの一つ

前世において夏休みの宿題は何一つやらなかった銀次君だけど、夏休みのラジオ体操だけは雨が降ろうが槍が降ろうがたった一人でもやり続けたと鼻高々に自慢していた。

その話を聞いたすずかは微笑ましい笑顔で銀次を見つめたが、アリサは真顔で「あんたバカアゝ!?!」と言い放った。

士郎、恭也、忍、美由紀の4人に目を向けた銀次だが4人からも目を反らされた。

涙目の銀次を見てすずかが恍惚の表情をしていたかどうかは別の話

そして、身体の調子確かめた映像の銀次は部屋の中央でカメラを正面に胡坐をかいて、右手の甲の部分に額を載せていた

「あ、私わかったこれ困っている奴だ」

「確かに目が覚めたら監禁されとる訳やし困るのもしやーないなあ」

「ちなみにこれって罪状的にどうなるのかなフェイトちゃん」

「うーん外的要因じゃないけど・・・割れた原因が判明しない事には銀次を法的に助けるのは難しいかな」

「まー銀次君やし弁護しづらいなあ」

「そうなんだよね。他の人なら他の要因も考えられるけど・・・銀次君だと、そもそも原因が銀次君だからね」

三人が三人共銀次に対し間違った信頼をしていた。

なまじ坂本銀次を知っているだけに彼女達が正解にたどり着くことは無かった。

そして、さらに映像は流れて

異変に気が付いた看守が銀次の居る牢屋に殴り込みを行い、射撃魔法を乱射したところで映像は途切れてしまった。

「な、なのはちゃんこれどうしよっか?」

「わ、私しーらない」

「そ、そんなくせや、フェイトちゃんなら銀次に勝てるやろ? 現次元世界D S A Aのチャンピオンやし」

「うーん、エアマスターが発動しなければ勝てるかな?」

「エアマスター?」

「あ、そっか二人は念能力を使う銀次は知っているけど、エアマスターモードは知らないんだ」

「それやったら、私だってウォン・フェイフォン張りの酔拳を使ったところ見たで」

「それはジャツ〇ー・チェン? それともジェツ〇・リー?」

「ジャツ〇ーや!!!」

その後フェイトが酔拳2とワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナを借りて研究したとかしてないとか

ちなみに氷が砕けた理由はクロノの魔法が10年でピッタリ砕けるようになっていた為であった事がジェイル・スカリエッティの手で科学的に解明されたのであった。

ちなみに、クロノだけは映像を見て気が付いてしまったのだ。

確かに差は縮まったよ・・・1mmくらいは

クロノから送られたビデオを確認してから一週間が経過した。

あれ以降、銀次の消息が掴めない為か、はやて達率いる機動六課（おもに隊長陣のみ）にイライラが溜まっていた。

そのストレスを発散するかの如く新人達に厳しいトレーニングを行う

そして、夜にはそれが罪悪感となり、自責の念に駆られる  
まさに悪循環

負のスパイラル!!

苦悩は続く・・・終わらない。  
まるで覚めない悪夢である

だが、新人達はそんな隊長達の苛立ち・ストレス・苦悩など気づかず

今日も元気に仙豆を食べてトレーニングを行い、実力をメキメキと付けている。

そのおかげで機動六課の食事費用が大分抑えられており、これにはレジアスも思わずニツコリしていたとか・・・

### 会話休題

食事を終えて午後の事務作業に取り掛かろうとなのは、はやて、フエイトがデスクに座ると事務の人が電話口で怒っていた

「もういい加減にしてください!!」

「・・・切らないでええ」

電話口からは少年のような声が切実に訴えているが  
事務の人が大きな声を上げて電話を切った。

ガチャ切りである。

異様な事態に面喰らうも、何があつたのか確認しないといけないのが  
役職持ちの辛い所

はやては意を決して事務の人に何があつたのか確認する

「ど、どうしたんや？大きい声出して何か変な事言われたん？だったら私が電話主調べ上げてブレイカーぶち込んだるで！」

「はやてちゃんそれだったら私も手伝っても良いかな？」

「まってなのは私もライオットザンバーの試し撃ちしたいから付いてくよ」

ああ、なんてアツトホームな職場なんだろう

事務員の方にも親身なれる

機動六課はまさにホワイトな職場である

なのは達の言葉に感動したのか、事務員の方はたどたどしくも電話であった事を伝える。

その電話は一週間前から決まってお昼の13時頃と15時頃に鳴る

どちらも年端も行かない少年の声である

内容はジャイロ・スパゲティなるやばい科学者に捕まったから思わずぶっ飛ばしてしまっただがとのこと

「ジャイロ・スパゲティ？何のことだろ？」

「明らかに悪戯電話だよね」

「でも、一週間も前から決まって同じ時間に掛けてくるのは質が悪いやん」

うーんと考えつつも答えが出る事は無いのでとりあえず今度かかってきたらはやてに電話回すように伝えて、逆探知後にスターライトブレイカーをぶちかます事が決定した。

なお、上にははやてが演習の為に報告するとの事

そして、時刻は15:00になった

事務の人がはやてに電話を繋ぎ、悪戯小僧との真向勝負と相成った「機動六課隊長の八神はやてです」

「うん？八神はやて？あーはやてかあー俺だよ俺銀「隊長逆探知成功しました」

きて」

仕事の出来る女シャーリーの早業によりわずか1秒にも満たない

時間で電話主の少年の居場所は特定されたのだった。

「私の知り合いにオレオレ言ってる奴はおらん今からぶつとばしてやるから覚悟しとき」

はやてはそれだけ言うと言話を切った。

切る直前に電話口からは「何故!？」という声がか細く聞こえたが些細な問題だろう

30分後

とある無人惑星に置いて超凶悪犯が居るという体で機動六課と陸の英雄ゼストと海の提督クロノと呼ばれていないのどこから湧いてきた岸本がとある施設の上空に居た。

皆がみな自身の最大の魔法を放とうと魔力を溜めていた。

そして、放たれる6名の混ざりあった極大の魔力が眼下の施設に向けて放たれた

建物が崩壊する

大地に大穴が出来る

SSオーバー級が何名も居るのだ

当然の結果である

後は業務妨害を行い事務員に精神的ダメージを与えたド畜生捕まえて終わり

皆が皆そう思っていた。

施設のある一部分だけが不自然に残っており、何名かは地面に伏せていたが一人の見覚えのある少年だけは何事も無く両の足で立っていた。

生き残りともみると否や、岸本はすぐさま突撃し、エクスカリバーを振り下ろす

機動六課には呼ばれなかったものの管理局最強の呼び声高く、原作知識を活用し陸の英雄ゼスト隊の窮地を救った彼は昔に比べて強くなった。

依然性格はあまり変わってはいないものの、常に危険な任務をこな



したことにより、実力も付いていた。

そんな岸本の直感が警報を鳴らす

アレはまさに強者である。

原作には存在しなかったイレギュラー

なのは達では絶対に勝てないチート転生者

ならば彼女達を守るために俺が戦う

「俺は負けない！約束された勝利の剣」

勝った。至近距離からの！約束された勝利の剣に当って無事な訳

が無い

岸本はそう確信するも、いやに聞き覚えのある声が聞こえた

「お前は全く学ばないなあメガネ」

目の前の少年は迫りくる光の壁に大地を強く踏み背を向ける

「鉄山靠！」

魔力による爆発が起き、煙に辺りが包まれる

煙が晴れたそこには、白髪の風に靡かせた坂本銀次とやっぱり倒れ

ている管理局最強の岸本がいた。

10年という永い月日が経つも両者の実力には未だに大きな差があつた。

オ（おれじゃない）ア（アリサがやった）シ（知らない）ス（済んだこと）運動

なのは達による魔砲攻撃（誤字に非ず）により、ジェイル・スカリエツティが建てた新築の家は崩壊した。

たまたま、銀次が居た部屋にナンバーズ達も含めて全員居た為、怪我は無いがこれからどうやって生活すれば良いのかとローンの返済が終わっていないスカリエツ・・・めんどくさい、スカさんで良いやスカさんはさめざめと泣いている。

泣いてるスカさんを慰めてるのはウーノただ一人

武闘派の子たちはまるで親の仇を見るような目で相手を睨み付ける。

「何故だ！何故私のローン45年の家が粉々にならねばならぬのだ！」

全くである。

原作に於いては史上最大の犯罪者であったが、この世界に於いては犯罪者では無かったのだ。

全部きつちりと書面にて命令された事に関係各所に確認した上で行っていた。

ならば、スカさんが悪いのでは無くスカさんにそういった仕事をさせた上司が悪い事になる。

つまりアリサ・ローウェルとレジアス・ゲイズが悪い

だが、今回の悲劇の原因は機動六課の事務局長が悪いんだけどさてどうなる？

どうする？八神はやて

「え〜つと、まあ色々と言いたいことはあるんだけどさあ・・・とりあえず、管理局に何度も電話したのにその度に悪戯扱いされて切られたんだけど納得出来る説明してくれるか？」

怒れる銀次の問いかけに管理局側の人達は皆一斉にはやてを見る。

自身に視線が集まった事で逃げ場を探して、はやては空に顔を向け

る

雲一つ無い、澄み渡った青空に、鳥たちが優雅に飛んでいる。

出来る事なら魔力の限り飛んで逃げたい

しかし、逃げたら最後

銀次は飛べはしないが跳んでくる。

「(ああ、あかん。なーんも言い訳が思いつかへん)」

はやての気持ちは分かる。分かるが、怒っている人間にする対応では無い事は確かである。

「ぐあああああ」

故に銀次がイラつき足に力を籠めると踏まれている岸本の悲鳴が辺りに響く

「てめーらデコピンされてーのか!!!」

かつて銀次のデコピンによりヴィータに深刻なダメージを与えた至高の一撃

あれを見た事があるものは受けたとは思わない

なのはだけは視線で私の所為じゃないもんと訴えかけてたが、銀次に伝わっていなかったので声に出す

「全ては八神はやての責任です」

なのはは瞬時に自身の上司を銀次に売り渡した。

その行動にフェイトとはやては驚愕する。

「は〜や〜て〜」

銀次の圧が更に上がる

オーラが噴き出し、大気が揺れる

「(あかん、死んだかもしれん)」

そんなとき、ヴォルケンリッターであるシグナムやザファイラははやてを守る為に前が出る

はやてはその光景に涙が止まらない  
しかし

しかし、である。ヴィータは動かない

否、動かないのでは無く動けない

銀次に対してトラウマがあるヴィータが行動出来るはずが無い

「すまねえ」

ヴィータが自身の不甲斐なさを呪いはやてに向けての謝罪だったが、奇跡はおきた。

「ヴィータは許す」

銀次の言葉に一瞬だが、場の時間が止まった。

「すまなかつた。銀次」

素早い状況判断

流石艦隊を率いる男は違った

「良いんですよ。クロノさん間違いは誰にでもあります。」

間違えたら謝る！

そして、それを受け入れる許容の心

歪みねえなおい

そして、クロノの行動を見て答えを知ったものは続くように謝る

それまでぶんぶんしていた銀次も思わずほっこりするも、背後から視線を感じて振り返ってみると

目を真っ赤に腫らして未だに涙が止まらないスカさんがこっちを見ている。

「ぐす、一体私は何をしたというのかね!!ちやんと管理局にも許可を得て行ったのに・・・その仕打ちがこれとはあんまりではないか・・・まだ保険だつて入って居ないのだから」

「ドクターもう管理局とは縁を切りましょう」

「聖王のクローンだつて、倫理的に問題があるつて言うのに無理やり作らされたのに・・・」

「何だ?!?ヴィヴィオはもう誕生している!!」

スカさんの眩きに原作厨の岸本がガバつと起き上がる超反応を示す

「あれ?手加減はしてなかったんだが、意外と元気だな眼鏡の奴」

10年の間に銀次の予想をよりもほんの少しだけ強くなっていた岸本ではあつた

「あんなんでも一応管理局最強の一人やからな・・・まー私には劣るけ

ど」

「二応銀次と同じ転生者だからね。強くない訳が無いよ。私には劣るけど」

「だけど私が主人公みたいだから結局は私が最強だよね。お兄ちゃんが無条件で味方だし」

「なのはちゃん、私には頼りになるヴォルケンリッターがおるんやで」  
「二人とも何を言ってるの？頂点は常に一人！数に頼っている奴は中途半端だ。」

はやて、なのは、フェイトによる最強談義は大いに盛り上がってはいたものの、この後始末をどうつけるのかに管理局の大人組とスカさん一家の話し合いが行われた

#### 後日談

なおGOサインを出したはずのアリサ・ローウエルはいつの間にかいなくなっており、アリサが使用している部屋に入るとベットには銀次の娘と記載されている紙をおでこに張り付けられた幼気な金髪の少女が縄でグルグル巻きにされていたところを銀次により発見され、そしてその光景を運悪く見知らぬ職員に見見されてまたもや牢屋に戻る事になったとか

そして机の上には置手紙があり内容を確認した職員が慌ててレジアスに渡したところ

これを見たレジアスは緊急入院の為しばらく地上本部が慌ただしくなったのは言うまでもない

## 河は船を運ぶが時に船を覆す

あの日から大分日が経ったが皆さん如何お過ごしでしょうか？

私坂本銀次は何故こうなったか過程が全く不明だが、結果としてまともや氷漬けになりました。

何故だつて？

それは俺が聞きたいよ

なんで童貞なのに自分よりも遥かに年上の娘がいて、その上年上の娘には二人の姉妹がいる状況になつていいのか意味が分らない。

前代未聞の裁判が繰り広げられて、遺伝子も全く一致しなかったのに負けました。

いや、おかしいよ

なんで決めてが”家族の絆は血の繋がりだけじゃない！もつと熱い魂なんだ！”

セリフはカツコいいけど俺、ヤツてないのに氷漬けにされてんだよね。

しかも、事実上のお父さんになっちゃった。

分かつていることはこれ刑事裁判の内容じゃなくて、民事裁判の内容容なんだけどなあゝ

まあ世界が違えば法律も違うし負けは負けだ。

受け入れようこの敗北

負けたときこそ胸を張れ！勝敗より大切なものを失わないため・・・つて、俺何も失つてねーな

だつて気が付いたら、四年経つてるし・・・

四年かあ・・・知らない土地で俺はこれからどうなるんだ？

というか俺はテスタロッサ家とどう向き合えば良いんだ？

もつと言えば俺は美由紀さんと結婚出来るのか？

現実的に14年もたつて居れば彼氏ないし恋人位出来そうだよな。

しかし士郎さんと恭也さんは男に厳しいからそういつた関係はまだ無いかもだけど、自分自身は見た目9歳（中身は23歳、前世を含めると36歳）である以上果たしてチャンスがあるのか考えるも答え

が出ない永遠のテーマとかしたので、考えるのを辞めた。

「ご主人様の想うが儘に行動すればよろしいかと」

「想うが儘って言ったって、突然あなたが好きだからって言うって成功するのは正しいケメンに限るからね。俺は唯の可愛い男の娘なんだ。ところで何で俺は男の娘なんだ？」

「それはリインにも分からないです。」

「だよなあ。で、リインよ何時になったら俺を離してくれるんだ？もうかれこれ2時間位あすなる抱きされていて正直腰が痛いんだけど」「リインなら後365日余裕ですね。」

「離せえー」

オーラを纏って脱出しようと試みる銀次と無尽蔵の魔力による身体強化に加えて、極めた関節技術を駆使したリインの戦いが始まる

#### 4時間後

何故かボロボロになっていた身元引受人であるノーヴェが来た事を伝えようと看守が銀次を呼びに部屋に行くと、パン、パンと何かを叩く音と女性の喘ぎ声が聞こえてきた。

看守は動揺した。

当然だ。ここは刑務所である。

ここの部屋の主である銀次の事を看守は当然知っているし、見てもいる

看守は銀次を見てはため息つく毎日であった。

何故彼は女性では無いのか？

これは神の仕業か、悪魔のいたずらか

看守は枕を濡らす毎日で合った。

そんな悶々とした気持ちを心に秘めつつも今日で最後になるこの日

看守が見た光景は

美少女（リイン）が真実のポーズで圧倒的に可愛い上半身裸の男の娘（銀次）にお尻をパンキングされていた。

い  
看守はその光景に何か哲学めいたモノを感じたのかは定かではな



ここで会ったが100年目

リインに高町家のお仕置きしている間に看守の方が来られてたので釈放されたけど何故か看守の人は前かがみになっていたのか、そして時々“うつ”と声を漏らしていたけど疑問が尽きないがようやくシヤバの空気が吸えるのなら大した事は無い

栗の花の匂いが漂っていてリインが潤んだ瞳で俺の事を見ている・・・というか抱き着いているが、もういいや

待合室に着くとそこには怪我したノーヴェと知らない銀髪の少女とティアナさんがいた。

「ティアナさんどうしてここに？」

はやる気持ちを抑えつつも彼女に声をかける

ああ、俺には美由紀さんと心に決めた人がいるのに、  
なんて、なんて卑しいんだ

「坂本には関係ないわ！」

バツサリ切られた！

切ったティアナさんが悪いのか？

切られたおいらが悪いのか？

とりあえず、邪魔にならないように通路の隅っこで体育座りでもしているか

「ティアナ！兄貴が何したっていうんだ！無実の罪で有罪扱いされても黙って受け入れたんぞ」

「うるさいノーヴェ！そのせいで私は4年間フェイトさんに散々愚痴られたんだからね」

それは俺の所為じゃねーよと声を大にして言いたい但し事は既に終わった事なので、黙っていることにしよう

「ご主人様・・・悲しいんですね！リインのここ空いていますよ」

リインはそういうと両手を広げ胸を張る

「それはまたの機会で」

「ふふ、恥ずかしがらなくても良いですよご主人様！何ならリイン

が今この場で手取り足取り腰取り尻取り・・・」

「何故あなたがここにいるのですか闇の書!!」

知らない銀髪の少女が割って入ってきた。

何ならファイティングポーズもとっている

「な、何か目が血走ってるけどリインの昔の友達?」

リインに顔を向けるとリインも困った顔をしていた。

「いえ、知らない子ですね」

「私は霸王クラウス・G・S・イングヴァルトの子孫アインハルト・ストラトスです!」

知らない少女よろしく自称霸王うんたらかんたらストライク・バツターアウトさんか・・・

「で、その霸王うんたらかんたらストライク・バツターアウトさんは家のリインに何の用なの?」

「私はアインハルト・ストラトスです!!」

鼻息フンフンしてぶんすかしてしまった。

どうやら彼女を怒らせてしまったらしい

「ご、ごめんね。あんまりにも長かったからちよつと覚えきれなかったんだ。で、えくとストさんはどうしてリインに敵意を向けているのかな?」

「その闇の書の所為で私の大切な人が亡くなったからです。」

ようやく釈放されてシヤバの空気を据えたのは1時間もたつて居ないのに俺はまた刑務所に戻るのだろうか?

「いえ、ご主人様はその件はとつくに刑期満了しているので問題無いです。」

「ならヨシ（現場猫）」

「ヨシっじゃありません!!ここであつたが100年目今すぐ私と戦え!」

「だつてよりイン」

「私は構いませんが・・・ところでティアナさんミッドチルダに決闘罪つてあつたりしますか?ご主人様に迷惑をかけたくないので」

「未許可の魔法の使用は原則禁止だから決闘なんてもつてのほかよ」

「そりやそうだ。ところでリインはなんか思い出した？」

「うーん、昔のベルカは俺は〇〇王だあーって自称してる人間が多かったの、恐らくその辺りの人？だと思えますよ。」

「ふーん、じゃあ逆に印象に残っている人って誰よ？」

「そうですねえ、聖王オリヴィエぐらいですかね」

「へえ、どんな感じだった？」

「まあ、私には劣りますけど・・・そこそこ可愛いらしかったですよ。強さは最後にあつたフェイトよりも下ですね」

「するてつえ、つと聖王オリヴィエなる人物は10歳程度のフェイトに負けるのか・・・」

ギヤラクティカ・マグナムは偉大だった。

## 人生落（らく） ありや苦もあるさ

その後、ノーヴェエが仲裁に入り日を改めて戦う事になったけど……

「戦うのは嫌だけど……本当に嫌だけど、百歩譲って俺とリインはその日までどこで生活すればいいんだ？」

「ふっふっふご主人様の為ならリインが治安維持の名のもとに犯罪者をとっ捕まえて金品強奪して来ますよ！ さあその管理生局員リ犯罪者ス渡すのです!!」

リインはそういうとティアナさんに催促する

「あんたみたいなヤバいデバイスに渡す訳ないじゃない！」

「リインはヤバくないですよー犯罪者を野ばらしにするほうがやばいですよー」

「やめろリイン！ティアナさんに無礼をするな」

これ以上俺はティアナさんの好感度を下げたくないんだ！

って言ってるそばからすっごい目でティアナさんが俺の事睨んでるし！

あわわどうしようどうしよう……

「坂本あんたみた「良いよティアナ渡してあげても」ってフェイトさん!?!何言ってるんです!?!」

長い金髪を揺らし俺よりも身長の高い同い年の娘であるフェイトが現れた。

黒いスーツがかっこいいがお頭が弱いのは相変わらずなのが玉に傷

「大丈夫だよティアナ私のお父さんは私より強いから」

「俺が強いか弱いかは一旦置いといて、管理局員でもない人間が犯罪者をとっ捕まえるのはお上が許さんですよ?」

「ティアナも執務官になってから全然休めて無いでしょ? 今日だっ

てようやくとれた休みだったのにノーヴェの所為で休日出勤しちゃってるんだから、この機会にお父さんにぶん投げて思いつきり休んじゃいなよ。」

あれ、無視られてる？というか働く事は確定なのん？

「フェイトさんだってもう何か月も休み無しで働いているじゃないですか！それなのに下っ端の私が休む訳にはいかないですよ」

え・・・何か月も休み無し？

「私は毎日7時間は熟睡してるよ？」

「ちつがーうそういう話じゃない」

ティアナさんはうがーと頭を掻きむしりながら叫ぶがフェイトには通じず唯々困惑している様子を見て俺は絶望を禁じえなかった。

### 1週間後

ミッドチルダの法律がどういふものか俺は理解が出来なかったが、見方によつては北斗の拳よりも荒唐しているように感じられるのは気のせいでは断じてない

クラナガンつてところを試しにリインと散歩していれば何処から湧いてくるのか不明だが、ガラの悪そうな奴らがやってくる

フェイトから貰ったお金でちよつとお高いレストランにリインと一緒に رفتら自信に満ち溢れた自称エリートが絡んでくる

リインと一緒にゲームセンターに遊びに行ったら、悪ガキ共に絡まれる

大体どいつもこいつもリイン目当てに絡んでくるんだが・・・

確かにリインはおっぱいはデカいし、ウエストは細く、お尻はモチモチしていていつまでも撫でていたくなる手触りでおまけに顔も可愛い俺が傍にいるときは頬を赤く染めていて庇護欲が滾る

つまり、リインはおモチにならているということである。

俺も顔面には自信はあるんだけどなあ

可愛い男の娘なのに・・・女性の方からは今の所声をかけられた事が無い。

逆ナンは都市伝説はつきりわかんたね

とりあえず、フエイトとティアナさんの執務室に頼まれていた犯罪者達を届けて仮眠室で2時間位寝ようかなと扉を開けたらそこには元氣一杯のノーヴェが待っていた

「兄貴迎えに来たぞ」

パトラツシユ・・・瞼が重いんだ

## 私の名前は高町ヴィヴィオ

空は何故青いのか？

口笛は何故遠くまで聞こえるのか？

何故GAROは愛を求めるのか？

世の中疑問がいっぱいあるが、一番の謎はノーヴェとリインを引き連れ管理局を出た数秒後に何故かやっぱり絡まれる

ノーヴェを見ると困惑顔である。

リインを見るとリインも俺の事を見ていた。

深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているという話を聞いたことがあるが・・・これは、そういうことなのだろうか？

「ノーヴェその人は誰ですか？」

ノーヴェに絡む金髪の少女が現れた！

外見年齢は俺と同じ年

身長自体は向こうのが高いが、一本下駄を履いてるおかげで目線の高さは俺の勝ち

後は可愛い感じなんかなあ

あーあ、この少女が大人だったら良かったのになあ

「ああ、こちらは私の兄貴分の坂本銀次だ」

「こんにちは坂本銀次さん私は高町ヴィヴィオです」

上から目線で挨拶するのもどうかと思ったからしゃがんで目線を合わせて挨拶するか

「はいーこんにちは俺は坂本さん家の銀次君だよ」

「(この人すごい！こんな不安定な履物でしゃがんでいるのに全然軸がぶれてない！とんでもないバランス感覚だ)」

しゃがんで挨拶したら目を見開いて驚かれた

ノーヴェを見たらノーヴェも驚いていた。

なんだろう？つちのこでも周囲に現れたれたのかと思いい周囲を見渡すも特に何事も無い平穩そのものだった。

数秒後再起動を果たしたノーヴェと高町さん家のヴィヴィオちやんとスポーツジムに行くことになった。

うーん可愛い大人の女性がいたらうれしいな

「ところで高町さん家のヴィヴィオちゃんはなんか趣味でもあるの？」

「私の事はヴィヴィオって呼んでください。つで私ストライクアーツを学んでるんです。」

道中暇だからなんか話題にでもなれば良いかなって話を振ってみれば軽快なステップを踏んで左ジャブを繰り出し始めた。

口でシュツ！シュツって言ってるけど、多分本気だ。

だからリイン堪えろ

「ご、ご主人様これはなかなかの破壊力ですよw」

「やめろリイン！ヴィヴィオちゃんは別に笑いを取りに来たわけじゃないんだからな!!」

ほら、リインが笑うからヴィヴィオちゃんがほっぺたを膨らませてむくれちゃった。

「むうー銀次さん！」

「はい！」

「ジムに着いたら私と戦ってください。」

「えー！やだ」

「だめです。決定です。決行します。」

何故俺はストさんと戦う為にジムに行くのに戦う相手が増えるのだろうか？

~~~~~

ジム・・・ジムかあ

考えてみたらジムって前世も含めて一回も行った事が無かった。

俺の想像だったら、美人のお姉さんが手取り足取り嬉恥ずかしい一緒にトレーニングしてくれるパターンかシュワちゃんみたいなマツチヨの人と爽やかにトレーニングするパターンだと思ったんだけど、機材がある部屋は全スルーでなんもない部屋に連れられた。

「じゃあ兄貴はここで待っていて、ヴィヴィオは着替えてきな。私は飲み物でも買ってくるよ」

「はい」

ヴィヴィオは元気な返事をしてパタパタとかけていく。

女性の着替えは時間がかかるからぼくとしていたら、なんかワイワイガヤガヤ女性達の声が聞こえては通り過ぎていく

ジムに出会いを求めるのは間違っているのだろうか？

「はあくなんで俺は眠気を我慢してこんなところにいるんだろ」

「グツグツフ、ご主人様リインのここ空いてますよ」

リインは自身の膝をポンポン叩きアピールする。

若干高さがあるが・・・床よりはマシかな

「じゃあお言葉に甘えるところか」

よっこい正一とリインの膝に頭を置くもやっぱり高さが若干気になる。

色々向きを変えて見てもしつくりこない

「銀次さんお待ち・・・何しているんですか!!」

なんかストさんの声が聞こえたから扉をみたら顔を真っ赤にしているストさんと両手で目を隠しているけどちやつかり隙間から見えるムツツリヴィヴィオ

「何って眠かったからリインに膝枕してもらってたんだけど・・・」

下からは山がデカくてリインの顔は見えないがきつとアルカイク・スマイルだろうから問題はないだろう

射砲撃？ バインド？ 格闘オンリー・・・分かったよ。ただし鉄山靠てめーはだめだ

短い時間ではあったけど、リインの膝枕により余計に眠気が強くなってしまった。

やっぱり、正座ではなく長座してもらうか、この際抱き枕になってもらえば良かったと思わずにはいられない。

ヴィヴィオもストさんもキヤーキヤー言ってるが俺はそもそもフェイトの所為で、いや、管理局・・・違う！アホな犯罪者共の所為で一週間まともに寝れて無いんだ。

だからって訳じゃないが・・・

「おい、ノーヴェ共！犯罪者を見るような目で俺を見るな！」

「そうですう〜これはご主人様がリインに望んだ事・・・つまり合意の上」

「顔を真っ赤にして、荒い息遣いをして着衣も乱れてる・・・坂本銀次逮捕よ」

何故ここにティアナさんが・・・？

というかまたしても好感度ダウンしている！

「ティア流石にそれは厳しすぎるよ」

「うん？スバルさんいつの間？」

よくよく見てみればスカさんところの娘さんも何人も来ていて顔を赤くしていた。

う、う〜ん納得いかないけど膝枕は一線超えた行為のようだ・・・この世界の人たちは一体どうやって恋愛していくのだろうか？

「ご主人様、恐らく交換日記からスタートするのかと・・・」

「ピュアッピュアやな・・・」

ミッドチルダ恐るべし

「ま、兄貴の処遇はこの際置いといてヴィヴィオとアインハルトどっちから兄貴はやる？」

「そりやもちろん先に約束したストさんからでしょう」

先に約束したのはストさんだからねえー

「じゃあ、アインハルトと兄貴からスタート」

「あいよ」

「ハイ」

「で、スーパーリングは4分1ラウンドで、ルールは射砲撃とバインドは無しで格闘オンリーだ」

ノーヴェは知っている前提で話をするけど俺魔法使えないからよくわからん

「射砲撃ってなんだ？ギャラクテイカ・マグナムみたいなもんか？」

「デイバインバスターですよ。ほら、私が以前次郎を焼き落とした魔砲です。」

悲しい事件だった。

「・・・じゃあバインドは？」

「バインド・・・寝技、締め技、関節技かと」

ふむ、投げ技は有りみたいだけどその手の漫画は読んだ事が無い

YAWARAちゃん読んどけば良かった・・・

「マジの打撃オンリーか・・・基本技はパンチとキックで必殺技はローリングソバットで超必が鉄山靠の俺に死角はないな」

「あ、言い忘れたけど兄貴は鉄山靠は禁止だ。」

かつてない厳しい戦いになりそうだ

~~~~~

ラウンド1

ファイ

ノーヴェがそういうと試合は始まる

ストさんはその場で構えてる

俺が出来るのはパンチ・キック・ローリングソバット

下駄履いてるから蹴り技は危ないので止めておくけど、結局のところ近くに行かなきゃ始まらない

カッカッカ

「え？」

「うわ〜」

外野が驚いてるけどストさんはもつと驚いてる

「どうしたストさん？間合いに入ったけど何もしないの」

「ッ!？」

ストさんから繰り出されるは思いつきりの良い右ストレートがお腹に突き刺さる

「うそ」

「無防備で受けたのに・・・」

外野がやつぱり騒がしい

「ッ!？」

慌てて距離を取ろうとしたストさんの右手を潰さないように掴む

その瞬間、左のハイキックが頭に直撃したけど、右手は離さない

色々と焦って攻撃を繰り返しているから、一旦右手を離すとすごい勢いで距離を取って驚愕の表情を浮かべるストさん

周りもよく脱出したとか距離を取ってとかストさんをめっちゃめっちゃ応援している

「ストさん、今のは本気で殴った？」

「それなりに8割位でやっています。」

「じゃあ、本気で来なよ。防御も避けもしないで無防備で受けてやるからさ」

って言ったらストさんの目つきが変わった。

やべえ、地雷踏んだかも・・・

「ならー霸王断空拳」

すごいスピードで突っ込んできて、あ、これスマッシュだ。

顔面に来たから思わず顎を引いたんだけど、それがよくなかった。ボキボキボキって嫌な音が鳴り響く

俺は冷や汗が止まらない

ストさんが右手を抑えて涙を流している。

「ごめんね。大丈夫!？」

その一言が原因でストさんは大声で泣きだしてしまった。

オロオロする俺の肩をティアナさんが怒りの表情で掴んでいた。

「坂本銀次・・・執務官の前で偽証罪とは良い度胸しているじゃない！  
現行犯で逮捕してあげるわ」

「さすがにそれはやりすぎだよティアア！」

スバルさんがかばってくれたおかげで逮捕だけは免れたが、ヴィ  
ヴィオからすごい睨まれてしまったのだが、どうすればいいのだろう  
？

怒れるヴィヴィオに火が付いた

「銀次さん・・・ひどいですよ」

ヴィヴィオの一言で俺に視線が集まる

ティアナさんなんか拳銃（クロスミラーージュ）で俺の頭をガンガン殴っている。

拳銃は撃つものだと思っていたけど、どうやら違ったようだ。

「アインハルトさん泣いてるじゃないですか!？」

ストさんは右手を抑えて泣いている。

「まー右手の骨砕けちゃってるからね。あれは大分痛いと思うから仕方ないよ」

俺はもう慣れたけどね

「仕方なくないですよ！なんでそこまでしたんですか!？」

あ、ヴィヴィオちゃん怒っちゃった。

「結果的にやっちゃった事に関しては俺が悪いけど、あえて弁明するなら当然の結果だよね?」

「・・・どういうことですか?」

「頭蓋骨っていうか額の骨って人体最高硬度の部分だからねえ。プロの格闘家だって素人の頭蓋骨殴れば殴ったプロの手が折れる。ましてや俺の骨はびっくりするくらい硬いから折れるだけじゃすまないよ。だから当然の結果だって言ったの」

「銀次さんあなたは分かってて額で受けつつってことですか!？」

「いや、まさか顔に向けて打ってくるとは思わなかったから、びっくりして顎を引いたらいい感じに頭突きしちゃったんだよ。ま、格闘技に怪我は付き物だししょうがない」

「というかスパーとは言え顔を狙うはいかなものかと俺は思うんだが、ましてやダンクーガの断空剣だっけ？フル改造したら断空光牙剣にでもなるのか？でも霸王って頭についてたような気がするけど・・・まあ流派の違いかもしれない例えるなら北斗神拳と西斗月拳ぐらいの違いか?・・・って違うな」

「まく泣いてるストさんには悪いけど、疑問も晴れたからよかったん

じゃない?」

「疑問?」

「いやーストさん『私の拳とあなたの拳どちらが強いかな勝負してください』って言ってたから、まー拳じゃなくて俺のは頭だったけどね」  
その結果が右手は完治不可なのはとんでもない代償ではあったが、10年位経てば笑い話にでもなるよ

後は仙豆でも食べれば治るから問題ないよ。今持っていないけどね  
ぼーっとしていたら何やらヴィヴィオちゃんがポケットから緑色の豆みたいなのを取り出した。

「アインハルトさんこれ食べてください。怪我が治ります。」

ヴィヴィオは涙を流しているアインハルトに豆を食べさせるとアインハルトの碎けた右手が治った

あれ、仙豆じゃね?

「ヴィヴィオさんこれは一体・・・」

「これはなのはママが持っていた仙豆っていうんだけど、どんな傷でも治しちゃうの」

なのはママ?ヴィヴィオの苗字が高町だから・・・高町なのは?あのなのはちゃんかあ。そりゃ年齢的には結婚位してもおかしくは無いのかな?

「もしやヴィヴィオのママって高町なのはで合ってる?」

俺がそういうと周りがえっ!?!って顔しているけど何でだ?

「・・・そうです。私のママは高町なのはで合ってますよ」

そっか、仙豆がこっちで流通している訳じゃなくて、俺の家からパクって来たわけね。

これはなのはちゃんお尻ぺんぺんだな。

なお、実際にやったのはリサであることは銀次は知らないのであった。

「で、まー傷は治ったようだし、ヴィヴィオちゃんは どうする?俺はお開きでも良いんだけど?」

「アインハルトさんちよつと待っていてください。私が仇を取ってきます。」

「仇って、俺悪いことしてないよね？事故だよね？」  
その問いには誰も答えを返してくれなかった事に涙が出そうに  
なった。



## ロシアより愛をこめて

何時だってそうだ。

俺が何か悪い事をしたわけじゃないのに悪者にされる

俺が暴力を振るった訳じゃなく、相手が勝手に殴ってきて勝手に怪我しているだけなのに事が終わった後に第三者がノコノコ出てきて罰を受ける

それはまるでのび太がジャイアンにいじめられるのと同じ黄金パターンではないか！

全くもって納得がいかない

何で殴られた俺が悪いことになっているんだ？

泣いているのが美少女だからか？

俺だって客観的に見ても美少女面なのに・・・

ええい、泣きたいのはこっちの方なのに・・・

「にゃーん!!!」

「「ごふううう」」

涙が出ないから代わりに猫みたいに鳴いたら、不特定多数の人が吐血した。

両手を頭に付けて猫耳っぽくするのがチャームポイント

やはり俺が可愛いのは間違っていない

間違っではないんだけど・・・

「銀次!!」

ヴィヴィオちゃんは怒りが収まらない様子

しかも呼び捨てにされた。

何でこの子は親の仇の様に俺を見るんだろうか？

ストさんとは今日がお互い初対面のハズだと思うけど・・・

「ちよつとぶざけ過ぎたね。悪かったよ、じゃあ始める?」

「絶対に後悔させてあげます。」

俺氏初対面の子に後悔させられるそうです。

「そ、そっかあ。じゃあ一応聞くけど手抜きと本気と全力どれが良い? 答えによっては鉄山靠が出るからよく考えてね。」

「いや、兄貴鉄山靠は駄目だって!？」

ノーヴェエが止めに入るもヴィヴィオちゃんはそれを手で制して答えてしまった。

「全力でお願いしますー!」

回答は迷いを感じさせずに即答だった。

全力・・・全力かあゝ

求められたのならば仕方ない。

この俺、坂本銀次の全力の限界の一步先まで全てを出し尽くす至高のデコピンが今宵また火を噴くぜ!

「・・・分かった。俺も覚悟を決める」

「あーもー、じゃあ両者共に中央で向かい合って・・・始め!」

ノーヴェエの合図が終わると同時にヴィヴィオちゃんがステップを踏み一気に接近する。

「やあああ」

ヴィヴィオの気合の咆哮とともに右ストレートが飛んできたから上体を逸らして避ける。

続けて右手の位置をそのままに接近してのバックブローはしやがんで避けるも、下段後ろ回し蹴りが高速で迫ってきたからバク宙で避ける。

完全に初見殺しの見事な連続技だ。

俺みたいに動体視力と反射神経が良い奴じゃないと、スリーコンボは確定だな。

まあ口でシュツシュツ言ってるだけのことはあるよね。

「まだまだああ」

再度突撃してくるけど走りながら、右手を振りかぶるって、それはフェイントなのかそれとも・・・普通に右ストレートだった。うーん、格闘技素人の俺が言うのもなんだけどそれってどうなん？

チラッとノーヴェエの方を見るともつと左を生かして応援していた。それを受けて今度は左のジャブを出しつつ、何やら狙っている様子うーん、何だろう観察されている気がする。

俺がどういふ攻撃を受けるところという風に避けるとかそんな感じ

の理詰めの攻めかなあゝ

でも、あんまりそれって意味が無いんだよね。

だって、それって相手が攻撃を察知して避けているからこそ当たるもので、見てから避けられる人には意味が無いんだよね。

「クツなら、フェイトママ直伝ギャラクティカーアアアマグ  
ナアアアム」

スパロボだったらカットインが入るくらいの迫力で、銀河を走る隕石を彷彿させるような・・・させるような？アレ今ヴィヴィオちゃんフェイトママって言った？

とりあえず、半径85cmはこの手の届く距離!!

「必殺ダブルリアット!!」

キヤアアア ドウン ドウン ドウン

「家に帰るんだな。お前にもママがいるだろ？」

「ねえ、スバル？今銀次は何をしたの？不正行為？不正行為よね。逮捕してもいいわよね？」

「ちよつとティア落ち着いて！今銀次はヴィヴィオのギャラクティカ・マグナムを体を回転させて避けたんだよ！だから不正でも何でもないの！」

何だろう、試合に勝ったのに勝負で負けた気分になる。

Let it be

試合は終わった。

結果だけを見るのであれば、銀次の勝利

悪魔的な強さ、誰もが認める美少女面（なお需要が局地的過ぎて無いと言っても過言ではない）そしてどう動いても裏目が出る。

「あ、なのはさん？今〇〇ジムで娘のヴィヴィオがいじめられたのですぐ来てください」

「ちよ、ちよっとティアそれはやり過ぎ」

スバル・ナカジマの声が空しく響く

かつて所属していた自身の隊ではもちろん管理局最強の一人。

白き魔王高町なのは

「・・・すぐに行くの」

ブチツツーツーツー

高町なのはを知る人は銀次に向けてあるものは合掌し、あるものは声を出し涙を流していた。

全くもって理解が追いつかない銀次は状況について行けずに困惑するばかりである。

「ね、ねえリインこれってどういうことだ？俺はこれから殺されるのか？」

あまりの異様な空気を空気を読めない銀次が疑問に思いリインに向けて話すも、返事が返ってこず、リインの方に目を向けると穏やかな表情のまま目を閉じているリインがいた。

鼻血が出ているのはご愛嬌とでも言えばいいのか甚だ疑問ではあるが・・・

そんな中ノーヴェエのデバイスに連絡が入る

連絡相手の名前はもちろん

高町なのは

ノーヴェエも娘のヴィヴィオを預かっている手前無視する選択ではなく、力なく連絡を受ける

「もしもし、なのはさん・・・?」

「私なのは・・・今〇〇〇の交差点にいるの」

ブチツツツツツ

恐る恐る声をかけるノーヴェとは別になのはは感情を感じさせない声で要件だけ伝えると連絡を切ってしまった。

「どうしたノーヴェ?」

「なのはさんから連絡があつて今〇〇〇の交差点にいるって」

「ふーん、意外と早く到着「プルルル」ってまたなのはちゃんじゃね?」

困惑しながらノーヴェは自身のデバイスを見るとやっぱりなのは表示が出ていた。何やら不穏な空気を感じるも気のせいだと思って再度通話状態にする

「な、なのはさんどうしたんで「私なのは今〇〇〇ジムの入口にいるの」っえ!?!」

なのはそれだけいうと再度通話切った。

あそこの交差点から僅か数秒でジムの入口まで来た?

ノーヴェの背筋に冷や汗が流れる

「おいおい大丈夫かノーヴェ顔が真っ青だぞ」

「もうなのはさんジムに到着したって」

「え、だってあそこの交差点からここまで歩いて10分くらい掛かるよ」

「歩いて10分なら魔法で飛んで来たらずぐじゃね?」

「それはあり得ないんだ兄貴、管理局員は私用に魔法を使っではいけない決まりなんだ」

この時銀次が思った事は魔法の私用は禁止なら職権乱用も禁止にすべきじゃね?と考えたが口には出さなかったのは僅かながらにも成長はしているようだ。

そんな時だった。

再度ノーヴェのデバイスが鳴り響く

相手はもちろん高町なのは

ノーヴェはもう半泣きだった。

誰か私の身代わりになってほしいと思いつつながら周りを見渡すも皆

が皆目を背けていた。

もはやノーヴェは完全に泣きそうだった。

「俺が出てやるよ。ほれ貸しな」

銀次からしてみるとなのはちゃん相手になんでこんなにビビッているのか理解が出来ないが、妹分が可哀そうだから軽い気持ちで代わってあげた。理由はそれだけだった

「私なのは今ドア」いるんだったら早く入って来いよ！」え！その声っ  
てもしかして銀次君」

ガラガラ

「二よう、久しぶりなのはちゃん」

高町なのはは声に為らない悲鳴を上げた

睨めっこしましよ

なのはSIDE

ティアナから連絡が来た時、私は一瞬で頭に血がのぼった。私の娘であるヴィヴィオが虐められてる。

たったそれだけの言葉で我を失う程の怒りが込み上げてくる。

あの子が一体何をしたというのだ。

ヴィヴィオはその特殊な生まれ方をしてきただけで、普通のどこにでもいる可愛い女の子なのに・・・

たったそれだけが理由で理不尽な目に合うなんて・・・

そんなの絶対に許さない

どんな大儀があろうと私が絶対に守る

この扉を開けたら奴にデイベインバスターをぶち込んでやるの（#  
。D。）

なのはが扉を今まさに開けようとした瞬間に扉がひとりでに開いた

そこにいたのはすっごい目つきでなのはを睨みつける坂本銀次がいた

なのはは目の前が真っ暗になった。

~~~~~

銀次のタ【まだなのはだよ】

「まあなんだ、急いで来たわけなんだしドアの所で話す事も無いからこっち来いよ」

銀次はそういうと部屋の中央に移動して床に胡坐をかく。

なのははどうかして逃げようと画策するも何も思いつかず、ただ立ち尽くすばかりであったが・・・

「おい、こっち来て座れって！」

イラつく銀次の声に瞬時に体は反応を示し、銀次の目の前で正座するなのは

「そういえば喉が渴いたろう？何か飲むか？おい、リン何か飲み物買ってきてあとついでに食い物も」

「分かりましたご主人だば」

銀次に呼ばれてリンはすぐさま起動し、全力で駆け抜ける

なお、恍惚の表情を浮かべたまま鼻血を垂れ流し、爆速でミッドチルダを駆け回る美女の都市伝説がこの日生まれたのは銀次の所為である。

「ぎ、銀次君なのは喉乾いて無いから大丈夫なの！」

確かに喉は乾いて無い

何ならあまりの恐怖に絶賛生唾がぶ飲み大会を起こしている状態である。

むしろ冷や汗を掻きすぎて脱水症状が起きてしまいそうなほどであった。

「ご主人様買ってきました！」

先ほど買い出しに行ったりリンが大量のビニール袋に詰め込まれたストロングゼロとカシユーナツツの山

それをさも当然の様になのはと銀次に渡す

なのはは困惑し銀次はしどろもどろ

その光景を見ている執務官は手錠を取り出す。

なのはその時まずいと思った。

今銀次は怒っている

理由はよくわからないが、ティアナも何だか怒っている。

お兄ちゃんが居れば如何にか対処できるけど、私ひとりじゃ絶対無理

人は化物には敵わない

だけどあの子を守る為なら、覚悟を決めよう

なのは出されたストロングゼロ（500?）を一気に飲み欲し銀次に立ち向かう

「銀次君腹を割って話そう!!!」

その力強い言葉に化物は驚いた。


~~~~~  
ようやく銀次の番

「銀次君腹を割って話そう!!!」

なのはちゃんはそれだけ言うストロングゼロ(500?)を再度手に取り一気に飲み干す。

あれ、なのはちゃんって酒強いのかな？

実のところ俺は別にそこまで怒っていたわけじゃない。

経緯はどうであれ、ノーヴェに迷惑かけた事を素直にごめんね。つて言ってくればそれでチャンチャンって終わろうと思ったし、何よりホラーが苦てな俺にあんなメリーさんみたいな事したから隠す意味合いもかねて強めに怒っているポーズを取っただけなんだけど…：なのはちゃんすつごい勢いで酒飲んでるし、もう目つきがやばいよ女の子がして良い表情じゃないよ

これってアルハラをした側に俺はなるのかな？

なるだろうなあ

だってラインが買って来ちゃったんだもん

どうやら俺の未来はお先真っ暗な事は確定してるようだった。

非殺傷設定？そんなもんねーよ

なのはちゃんとの話し合いから10分後

なのはちゃんはお酒の勢いが良すぎた所為か、顔を真っ赤にしながらも絶えず腹割って話そうと息巻くが、一向に話が進まない

誰か助けてくれても良いんじゃないかと思うも、周りにいたジェイルシスターズは俺たちのやり取りに飽きたのか、世間話をしていた。

ティアナさんは歯を？き出しにしてオコ状態

スバルさんはそんなティアナさんを何とかなだめている

リインはいつの間にか起き上がっていたストさんとヴィヴィオちゃんに絡まれていた。

会話の内容に耳を澄ませば、リインが遥か昔のベルガ時代であった事をグチグチ言われてる責められていた。

リインの表情は変わらない穏やかなものではあるが、拳を握っていることからムカついていることだけは理解ができる。

なんていうかリインも人間味が出てきて良いんじゃないかなと思った瞬間だった。

リインは徐に右の拳にハア〜と息を吹きかけ二人に拳骨落とした。

「なのはさん今の見ました!?!坂本のデバイスが二人を殴りましたよ。これはもう逮捕しても構いませんね!」

何で俺はこんなにも嫌われているのか理解が出来ないのだが、生理的に無理な類なのだろうか？なのはちゃんを見るとなのはちゃんは座った目でティアナさんを見ている。

アカンこれやばい奴だ。

次の瞬間なのはちゃんはレイジングなんちゃらをティアナさんに向け始めた。

「それはアカンでしょ!?!」

「あっ!?!」

咄嗟にレイジング・・・何とかを奪い取ったのが良くなかった。

後になって知ったんだが、普通は術者の手からデバイスが離れれば魔法は発動しないらしいけど、なのはちゃんって砲撃魔法の天才らし

くてたかがデバイスを取り上げられただけじゃ意味が無いらしく、たまたま向いていた先が頭を押さえてかがんでいるストさんとヴィオちゃんに発射された。

「デイバインバスター」

しかしリインの魔法で相殺された。

ポーズがかめはめ波なのがかつこいいじゃないか!!

「ふ・ふう、じゃあ用も済んだことだし、なのはは帰るの！ヴィヴィオ行くわよ！」

「まあ待ちなさいよ。セニョーラ」

逃げるなのはちゃんの肩をグワシと掴んで引き留める。

「とりあえず、フェイトを呼ぶから待つように」

「フェイトちゃんを呼ぶの!?!」

「当然、お仕置きしないといけないからね。」

「ひえ」

この後フェイトが文字道理飛んできた。

そして、事情を説明したところフェイトから許可が出た

「許可は得た!!やれ、リイン。命を刻む館のトラップの一つクレインでグルグル回しておやり」

「イエッサー」

「にやああああああ世界が回るのおおおおおお」

銀次がボランティアで管理局の手伝いをしていた時、暴力はいけないとフェイトから口が酸っぱくなるほど言われた為、考えた苦肉の策であった。

なお、リインは非殺傷設定が出来るが、クレインで回す分には大丈夫だろうと考えており、犯罪者共には容赦なく光速でかつ氷結クレインで回していた。

だから、今回もものはなら特に大丈夫だろうと考えており、設定せずにそのまま回してしまった。

30秒後

そこにはぐったりしているのはちゃんがいた。

## 銀次、啞然、河辺にて

何十年振りだろうか？

散歩をするという行為は・・・

爽やかな風が、まるで今日という一日を祝福してくれる

太陽も燦々と輝き暖かく俺をリフレッシュしてくれる

「全くシャバの空気は最高だぜ」

一本下駄をカッカカッカと鳴らしながら空や景色を見ながらも見知らぬ土地を歩くというのは実に良き、そう今日からこの俺坂本銀次の日常が始まるのだ。

「あゝそこの君、こんな朝に何しているんだい？学校や親はどうしたの？」

呼ばれて振り向けば人の良きそうな茶髪のイケメンがそこにいた。

「あのゝこんななりでも成人しているんですけど・・・」

「はっはっは、面白い話だ。詳しい事は管理局で聞くから大人しく着いてきてね」

冗談じゃない！

「俺は嘘なんかついてないやい！」

俺は逃げだした。

「こら、待ちなさい」

しかし、茶髪のイケメンは追いかけてきた。

~~~~~

イケメンさんは空は飛べないようだが、なかなか体力があるのか、なお俺の事を追いかけてくる。

撒こうと思えばいつでも撒けるけど、久しぶりの追いかけてっこだからギリギリ手が届きそうで届かないそんなつかず離れずの距離を河原で走り回る。

近くにテントがあるから、その周りをグルグル回りながら逃げ続けること1時間が経過

「ぜ〜ぜ〜、な、何でそんな履物で速く走れるんだ君は・・・」

「慣れですよ慣れ。ホラホラ、鬼さんこちら手の鳴る方へ♪」

パンパン手を鳴らして

「オレ!!!」

「先つからうるさいんや!!」

テントから黒いパーカーをきた女の子が現れた

「俺?それともあっちの人?」

「両方や!!!」

「君その子供を捕まえてくれ」

イケメンさんまだ諦めてくれないのか・・・全く管理局員はしつこいぜ。後でクロノさんに言いつけてやる

「なんでそんなことしてるんや?」

「こんな朝から子供が一人でいるなんておかしいだろ?だから彼を保護しなければならぬ!」管理局員としてね」

言ってる事は正しいかもしれないけど、別段強制される程のことじゃないと思うんだけど?あとテントから出てきた住所不定無職の通称ホームレスな女の子の方が案件なんじゃないだろうか?

「分かったで私も協力したる」

黒パーカー女子が敵にまわったようだ。

「ほな、さっさと捕まえたる」

2対1か・・・面白くなってきたじゃあねーの!!

「二人まとめてバチッコイ!!」

相手に尻を突き出して挑発

自然と後ろを向くポーズになり、川があることに今更ながらに気が付いた。

「上等や絶対に捕まえたるで!」

女の子が出していい声じゃ無いけれど、なかなかのダツシユ力である。

女の子もイケメンも俺を川に追い詰めようとしているんだろうけど、バカめそれこそが俺の狙いよ

発動を覚えた人間は水の上を歩く事すら容易い

「マジかよ」「嘘やろ！」

「どうしたどうした！来いよ二人とも！濡れるのなんか気にせずさあ！かかって来いよ」

川の真ん中でブレイクダンスを踊りながら二人に呼びかけるも動く様子が全くない

「クッククック俺を捕まえようなんて10年早いんだよ！イケメンさんに黒パーカー女」

最後の最後まで煽る言葉は忘れずに俺はなのはちゃんの家に帰った。

それは力を求めた・・・

なのはちやんが鼻歌交じりに洗濯物を庭で干し

ラインがギター片手にアイドルを熱唱していたが・・・こいつ一体何を目指してるんだ？

とりあえず、ラジオ体操でもしながら俺は訝しんだ。

「ハアハアやっぱりアイドルは良いですね〜なんていうか謎の中毒性がありますよね〜ご主人様」

全身から汗を流し、赤く蒸気した肌は凄まじくエツチで官能的でたまんねえーな！

「そうなんだよね〜何でか分からないんだけどついつい口ずさんじやうなんだよね」

「そうそう、別に特段好きって訳では無いんですが、ふとした時に出ちゃう。それはまるで悔しい！でも感じちゃう！みたいなの！」

眼を爛々と輝かせてラインは話してるけど、こいつ目に星があるんだけど？

まあ夜天の書だからそれに纏わるなんか演出的な魔法か何かだよな？

「ちよつとラインが何を言っているのか良く分からない」

俺は訝しいんだ。

「あ、そうだなのはちやんクロノさんに今連絡できる？」

「え？今！良いけど何があったの？」

「実は朝散歩していたら茶髪のイケメン管理局員に追いかけて回されたんだよ。理由がこんな朝から子供が外にいるのはおかしいって言われてね。で、俺は言ったのよ。いやいや、こんな見た目でもちやんと大人ですよってね。でも、信じて貰えなかったんだ」

「（それはそうだよ。銀次君のその見た目で大人ってヴィーたちやんって前例が居ても説得力無いもん」

「そ、そうか。そうだよ。俺可愛い男の娘だもんね・・・説得力無いもんね。」

銀次は次回もしチャンスがあれば男の娘にだけはならないと胸に

誓うのだった。

「まーその件はなのはに任せてご飯でも食べよ？」

「う〜う〜ん。ヨシそうしよう」

「今日はサラダ記念日ですね。ご主人様!!」

「リインお前失礼だぞ」

「てへ」

「もおーちゃんとお母さんから料理は仕込まれてるから大丈夫だよ
リインさん」

と言いつつもなのははニコニコ笑いながら冷蔵庫を開けた。

~~~~~

30分後

そこには勝ち誇った顔をしていたリインと照れ笑いをしながらも  
頭を掻いてるなのはと大量のビニール袋を持っている銀次が居た。

「いやあ〜銀次君ごめんね。最近スーパー行けて無かったから、もや  
ししかなかったんだった。」

「いや、あの、ごめんね。なのはちゃん居候しているのうちの馬鹿リ  
インが勝手に冷蔵庫開けてたみたいで、本当にごめんね」

「ご主人様、その件についてはフェイトに許可は頂いておりますので  
問題ありませんっ痛いです。」

「お前フェイトの名前出せば許されると思うなよ!ほらなのはちゃん  
にちゃんと謝って」

「大丈夫だよ。銀次君・・・ほら、なのはと銀次君の仲じゃない」

なのはちゃんのやさしさに俺は涙が出そうになったが、ドヤ顔のリ  
インはムカつくので後でお仕置きするとして、後ろの白髪の幼女が追  
いかけてきているんだが、どうしよう?

「・・・分かってますよ。ご主人様」

「さすが、俺のリインだな」

これぞ以心伝心

「ちゃんとハーゲンダッツも購入してます。」

「違うんだよなあ〜」



合わない呼吸

「あの、私を弟子にしてください」

「そうこうしていたら白髪の幼女からトンでもない言葉が飛んできた。」

俺とリインはミッドチルダに来たのが、つい最近だから恐らくなのはちゃんに言っているのだろう

しかし、あの運動音痴のなのはちゃんが戦い方を教える先生になっていたとは、男子三日会わざれば刮目して見よとは言うけど、凄くなつたなあ

それにしても、何でこの幼女は俺の目を見て弟子にしてくれといふんだろうか？

もしや照れて「私は坂本銀次さんあなたに言っているんです！」

「何で俺!?!なのはちゃんていいじゃん。俺が言うのもあれだけど、魔法を扱う戦闘に関しては天才だよ?」

「ご主人様私は?」

なのはちゃんを誉めたら、対抗心を燃やしてリインがハイハイ手を挙げながら抗議するが……

「お前は圧倒的な魔力量でのごり押ししか出来ないじゃん。」

リインは口を尖らせ不満顔である。

「ご主人様だって、鉄山靠鉄山靠言ってる割には唯のフィジカル馬鹿じゃないですか!」

「……一応俺は酔拳使えるからね。」

「本当の酔拳って実際は酔っぱらっている訳じゃなくて、そうゆう風に見せる拳法だよ」

「何を言ってるんだなのはちゃん? 酔拳は酔ってこそだよ。ゆらりグラつきされど倒れずそれが酔いの極意だ」

「銀次君お酒は駄目だよ。」

「型と練習方法だけで良いなら問題ないべ」

「うん? まーそれなら良いかな」

「あのを酔拳って何ですか?」

当然の疑問であった。

「それは後で教えるとして君は誰だい？」

「申し遅れました。私はリンネ・ベルリネツタです」  
なにやらえらい事になりそうだと銀次は訝しんだ。

スイッチが入ったら

「それで弟子にしてくれますか？」

白い幼女リンネがハイライトの無いレイプ目で俺に詰め寄ってくる

正直言うと技を教えるのは全然OK、むしろ手取り足取り腰取り尻取り・・・ぐへへ

「ご主人様！ご主人様にはリインがいるじゃないですか！ご主人様のご奉仕の為なら性欲処理でも何でもやります。何なら今この場でも構わないです!!」

何が構わないのかは置いて、鼻息ふんふんしているリインは一体何故発情しているんだ？

前からおかしいと思っていたことがある。

俺がエッチな事を考えたら、まるで伝わっているかのような？

そんなことが果たして可能なのだろうか？

どこその頭に銃弾ぶち込まれたヤクザじゃあるまいし・・・

まあいい、ものは試しだ。

イメージするはクリスマスイブ・・・ベタだな

付き合うきつかけは・・・とりあえず、ベタだけど、悪漢に襲われているリインを助ける・・・誰を？俺が？うーん無理だな。相手が思いつかない。リインとまともに戦えるのなんて俺か恭也さんぐらいだから無理だな。

あーつと、じゃあ病気って事にしよう。

不治の病に侵されたリインは医者からも余命を宣告されて、手の施しようが無かった設定

そこに現らわれたスーパー可愛い健康優良不良男の娘である俺が颯爽と現れて・・・何をすりゃいいんだろう？

確か俺は病気にかからない特典があるから・・・血でも飲ませる？

ワイルドに右腕を八重歯でがりがりややって、嫌がるリインに無理やり血を飲ませる？

「ひゃああああん」

「リインさん!？」

ねーな。初めて会う人間相手に問答無用で血を飲ませて惚れられる奴はいないだろう。

うーん。それともある程度会話した後に唾液を飲んでもらう?無理やりキスして?発想が強姦魔なんだけど・・・

「ご主人様♡ダメですううう」

「銀次君ストップストップ」

気が付いたらリインが道端でビクンビクンして体を震わせていた。

こいつ・・・見えてやがる!

何時からだ?何時から俺の頭の中を覗いていたんだ?

っーか、だから俺はティアナさんに嫌われてたのか・・・

そうだよなあ常識的に考えて、俺の事をご主人様って慕ってくれるリインが俺の横で悶えてるんだもんな。

そりや二人きりになったらどんなことをしているのか、知りたくはないけど勘ぐるわなあゝ

おまけにコミュニケーション能力は低いし・・・

「あの、銀次さん弟子の件ですが・・・」

「うん?ああ、良いよ。俺が誰にも負けない最強の幼女にしてやるよ」  
「あ、ありがとうございます。」

「ちなみに何かコンセプトはある?例えば路上の喧嘩で負けない方法とかリングの上での戦い方とか・・・」

「そうですね。あらゆる武術に対応できる方法ってありますか?」

「一応あるっちゃあるし、無いっちゃない。」

「それって一体」

「相手が使う技を瞬時に覚えられたら対応出来るだろう?まーよく言えば直感と臨機応変に対応する・・・平たく言えば行き当たりばったりだけだな」

「銀次さんは出来るんですか?」

「俺は馬鹿だからそんなことは出来ない。酔拳だって何十年も型の練習して要約実践で使えるぐらいになったからなあゝ」

「そういえば銀次君酔拳はどうやって覚えたの?」

「映画で覚えた。いろいろ練習したけど腕立て伏せとクルミを指で割るのがマジできつかった。だけど俺が唯一使える必殺技は鉄山靠ただそれだけなんだよね。」

「それって当たらないんじゃない意味が無いんじゃない？」

「鉄山靠は当てる技じゃない撃ち落とす技だ。だから、相手が何をしようが関係ない！間合いにいけば撃ち落とす。ただ、それだけだ」

「でも、もしそれが外れたらスキをさらすことになりますよね」

「そうだよ、その結果外れたら俺は死ぬだろうしな、しかし当たれば相手が死ぬ。だから必殺技だ。相手の命を奪うんだ。ならこっちははなっから命を捨てなきゃ相手に失礼じゃん」

「狂ってますね」

「何の才能も無い奴がちよつと努力した位で強くなれるほど世界は甘くねえし残酷だ。なにせセンスのあるやつはそのちよつと練習しただけで強くなる。」

「どんなに言葉を弄そうが、所詮この世は弱肉強食。強くければ生きられて、弱ければ死ぬ。ただそれだけの事よ」

「そうですね。そこは同意します。どんなに厳しいトレーニングをしたところで急激に強くなるのは分かります。」

「だけど、一つだけ急激に強くなる方法がある。それは闘争本能を目覚めさせることだ。やり方は簡単だし、理由なんて何でもいい」

「そんな方法があるのですか？」

「まーね。理由は人それぞれだから、何でも良いんだけど、例えば後で食べようと思っていたショートケーキが冷蔵庫から無くなっていたら年頃の女の子だったらブチ切れるだろ？で、それをやったのが目の前の人だと思えば完成だ。」

「た、例えが微妙だよ銀次君」

「いや、本当に理由なんて何でも良いの。高級車を乗り回してるあいつが憎いでも毎日フォアグラを食べてるからだとかそんなんでも良いんだ。それを業界用語ではスイッチって言うんだけど、要はそのスイッチを入れることで相手を0.1秒でブチ殺したくなる殺人マ

シーンになる方法だ」

「とんでもない八つ当たりなの」

「ただ一つ欠点があつてね慣れてないと感情に振り回されて相手の事を本当に殺しかねないから、そこだけが注意が必要だね。」

「ちなみに銀次君はどんなスイッチがあるの？」

「俺は明確に殺意を受けたらだね。素手で来る分にはまだ大丈夫だけど、武器の使用はほぼほぼアウトだね。」

「あれ？じゃあ魔導士はアウト？」

「非殺傷設定を解除したらアウトだね」